

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告103

富山市友坂遺跡発掘調査報告書

—朝日小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2020

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告103

富山市友坂遺跡発掘調査報告書

—朝日小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2020

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市婦中町下条地内に所在する友坂遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、富山市教育委員会学校施設課が事業主体となる朝日小学校プール改築工事に伴うものである。富山市教育委員会学校施設課の依頼を受けて、令和元年度に富山市教育委員会埋蔵文化財センター監理のもと、有限会社毛野考古学研究所富山支所に委託して実施した。
- 3 発掘調査・整理調査期間及び発掘調査面積・調査担当者は、次のとおりである。
調査期間：現地調査 令和元年 11 月 13 日～令和元年 12 月 26 日
整理調査 令和元年 12 月 27 日～令和 2 年 12 月 25 日
調査面積：152 m²
監理担当者：富山市教育委員会埋蔵文化財センター 専門学芸員 堀内大介
調査担当者：有限会社毛野考古学研究所 常深尚
- 4 本書の執筆は、第 1 章・第 2 章・第 5 章第 2 節を堀内が、その他を常深が行い、編集は常深が担当した。自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、佐伯史子氏・澤田純明氏（新潟医療福祉大学）に委託し、第 4 章にその成果を掲載した。
- 5 現地調査から報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関のご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（敬称略）
相羽重徳 九千房百合 鈴木重治 竹部佑介 藤田邦雄
富山県埋蔵文化財センター 富山市立朝日小学校 東武建設株式会社
- 6 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系第VII系である。方位は真北、水平水準は海拔高である。
- 2 遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで標記した。番号は遺構種別にかかわらず 01 からの通し番号を付した。堅穴建物については、SIではなく、発掘調査時の SK をそのまま使用した。
SA (櫛) SB (礎石建物) SD (構) SK (堅穴建物・土坑) SP (ピット)
- 3 土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄著 財團法人日本色彩研究所)を使用した。
- 4 掘図中の網掛けは次のとおりである。

遺構： 旧プールによる搅乱、SK107 推定範囲
遺物： 煤  黒色処理  油煙

目 次

例 言

凡 例

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査成果	9
第1節 調査の方法	9
第2節 層 序	9
第3節 遺 構	10
1. 概 要	10
2. 檻	10
3. 磚石建物	10
4. 竪穴建物	15
5. 溝	16
6. 土坑	20
7. ピット	24
第4節 遺 物	25
1. 概 要	25
2. 遺構出土遺物	25
3. 包含層出土遺物	33
4. 表土出土遺物・表採遺物	34
第4章 自然科学分析	43
第1節 放射性炭素年代測定・珪藻分析・花粉分析	43
第2節 友坂遺跡出土焼骨の人類学的報告	52
第5章 総 括	55
第1節 友坂遺跡における中世遺構の調査歴	55
第2節 中世前期の土師器皿の諸様相～富山県内の城館遺跡出土遺物を中心に～	60
第3節 友坂遺跡中世館跡の変遷	67
引用・参考文献	71
写真図版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図 友坂遺跡調査位置図	2	第19図 SD93・102・106・125遺物図	28
第2図 友坂遺跡主要部平面図	4	第20図 SK05・16遺物図	29
第3図 周辺遺跡図	6	第21図 SK43・44・54・61・101・107遺物図	31
第4図 層序	9	第22図 SK107遺物図	32
第5図 調査区全体図	11	第23図 SK107遺物図	33
第6図 調査区遺構位置図1	12	第24図 SP08・22・23・34・56・84・120・124遺物図	34
第7図 調査区遺構位置図2	13	第25図 包含層、表土、表探遺物図	35
第8図 SA128・129遺構図	14	第26図 曆年較正結果	45
第9図 SA133・SB119遺構図	15	第27図 花粉分析、珪藻化石	51
第10図 SK21・85・86遺構図	16	第28図 友坂遺跡出土焼成骨	54
第11図 SD06・24・25・65・93・94・102遺構図	17	第29図 友坂遺跡過去調査出土遺物	56
第12図 SD36・37・106・117・118遺構図	18	第30図 友坂遺跡平成8年度農道調査遺構図・遺物図	58
第13図 SD125遺構図	19	第31図 士師器皿の分類図	61
第14図 SK05・16・43・44・54・57・61・63・122遺構図	21	第32図 士師器皿の編年案	64
第15図 SK101・103・107・108、SP08・22・23・34・35・84・124遺構図	23	第33図 ロクロ土師器・古瀬戸・貿易陶磁の編年案	65
第16図 SA128・SB119遺物図	25	第34図 珠洲・八尾の編年案	66
第17図 SK21・85・86遺物図	26	第35図 友坂道路中世遺構変遷図	69
第18図 SD06・36・37遺物図	27		

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	7	第9表 遺物観察表(7)	42
第2表 ピット一覧表	24	第10表 放射性炭素年代測定結果	45
第3表 遺物観察表(1)	36	第11表 珀藻分析結果	46
第4表 遺物観察表(2)	37	第12表 花粉分析結果	47
第5表 遺物観察表(3)	38	第13表 友坂遺跡過去調査遺物一覧表	57
第6表 遺物観察表(4)	39	第14表 士師器皿の分類比較表	61
第7表 遺物観察表(5)	40	第15表 友坂遺跡遺構変遷	68
第8表 遺物観察表(6)	41		

図 版 目 次

図版01 遺構(1) 調査区全景(空撮、南東から) 礎石建物 SB119 全景(南東から)		図版07 遺構(6) SD37 全景(南西から) SD37, SK43・44 條出状況(南西から)	
図版02 遺物(1) 中世土師器(SK107) 青磁・白磁		SK43・44 全景(南東から) SD36全景(西から)	
図版03 遺構(2) 調査地区全景(空撮、南から) 調査地区全景(空撮、右下が北)		図版08 遺構(7) SK107 全景(北から) SD125全景(南東から)、SD125全景(北西から)	
図版04 遺構(3) SA128 全景(北西から) SA129 全景(南西から)		図版09 遺物(2) SA128, SB119, SK21・85・86, SP08・22・23・ 34・120・124出土遺物	
SA128・129・133, SB119 全景(北から)		図版10 遺物(3) SD06・36・37・106, SK85・86出土遺物	
図版05 遺構(4) SB119-SP07 磐石検出状況(南東から) SB119-SP26 磐石検出状況(北西から) SB119-SP29 磐石検出状況(北西から) SK05人骨検出状況(南東から)		図版11 遺物(4) SD37・93・106・125, SK05出土遺物	
SK16・61 全景(南東から) SD106 全景(北西から)		図版12 遺物(5) SK16・54・61・101出土遺物	
SK86 全景(南から)		図版13 遺物(6) SK61・101・107出土遺物	
図版06 遺構(5) SK21 全景(西から)		図版14 遺物(7) SK107, SP84出土遺物	
SK86 全景(南から)		図版15 遺物(8) SK107出土遺物	
		図版16 遺物(9) SK107出土遺物	
		図版17 遺物(10) 包含層出土遺物、表探遺物、石製品、土製品	
		図版18 遺物(11) 鉄製品、土製品	

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

友坂遺跡は古くから知られた遺跡で、地元の住民が遺物を採集したことで確認された。昭和49年刊行の文化庁文化財保護部監修『全国遺跡地図16 富山県』には既に登載されている。現在は、平成25年刊行の『富山市遺跡地図(改訂版)』に「友坂遺跡」(市No.2010429)として登載している。現在の包蔵面積は624,800m²である。

友坂遺跡では、昭和50年代後半から、各種開発に先立ち試掘調査・本調査が行われてきた。特に本報告の対象である富山市立朝日小学校においては、昭和56年・平成4年に続き3回目となる。

平成29年3月に作成された「第2次富山市総合計画」において、学校施設の整備充実を目的に学校プール建設事業として朝日小学校を含む6校のプール改築計画(平成29~33年)が盛り込まれ、平成30年6月~平成31年3月に朝日小学校プール改築工事の実施設計が行われた。

平成31年4月、事業担当課の市学校施設課と朝日小学校プール改築工事について協議を行い、朝日小学校内では何度も発掘調査が行われていることから、遺跡が周知される以前の昭和44年に建設された既存プール改築に伴い工事で影響が及ぶ範囲の試掘調査を実施することとなった。

令和元年5月14日、既存プール周辺部で試掘調査を実施した。その結果、遺跡の遺存を確認し、既存プールの範囲内にも遺跡が遺存する可能性が高いことから、市学校施設課と再度協議を行い、既存プール解体時に追加の試掘調査を実施することとした。同年7月「朝日小学校プール改築工事」が採択され、8月26日から既存プール解体が着手された。解体中の9月13日、20日に試掘調査を実施し、その結果、既存プール内280m²の範囲に遺跡が遺存することが分かった。この結果を受けて、市学校施設課と埋蔵文化財の保護措置について協議を行い、新規プール建設で遺跡の保護ができない範囲152m²について、本調査を行い記録保存することとなった。

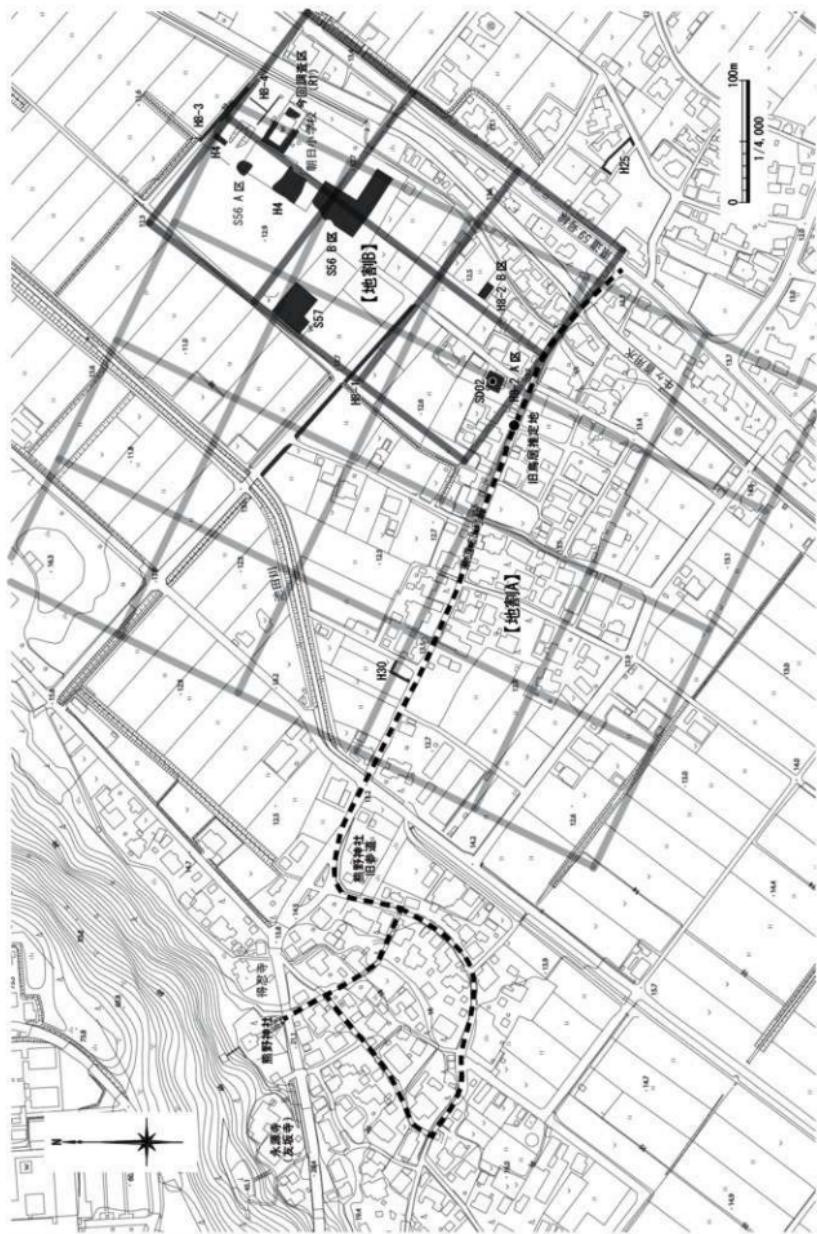
文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、令和元年10月17日付で市学校施設課から提出され、10月23日に富山県教育委員会へ副申した。また、文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、11月27日に富山県教育委員会へ提出した。

第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業 発掘作業は、市学校施設課から民間発掘会社である有限会社毛野考古学研究所に発掘調査業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が発掘調査の監理にあたった。作業期間は、令和元年11月13日から12月26日である。

11月13日からバックホウによる表土掘削を実施し、18日に既存プール西側にも上層遺構の広がりを確認したので、既存プール西側にも調査区を拡張した。その結果、表土掘削により調査面積は320m²に広がったが、広範囲に旧プール建設時の擾乱を確認し、擾乱部分を除外すると実際に調査できた面積は138m²である。18日から22日に作業員による上層の遺構検出を行い、併行して遺構概略図を作成した。23日にドローンによる検出状況の写真撮影を行った。27日から検出した上層遺構の掘削を開始した。掘削を終えた遺構から順次、断面図・平面図を作成した。測量作業は世界測地系座標により、電子平板を用いて行った。

第1章 調査の経過



第1図 友板遺跡調査位置図

上層遺構完掘後の12月16日にドローンによる上層完掘の写真撮影を行った。同日、朝日小学校の6年生児童10名の現地見学会を実施した。

翌17日から20日まで下層包含層の掘削を行ったが、下層には遺構・遺物は確認できなかつた。21～25日に断割りなど調査を終え、26日に現場ハウス・トイレを撤去して発掘作業を完了した。

整理作業 整理作業は令和元年12月27日から令和2年12月25日まで行った。遺物は、口縁部や底部が残るものはできるだけ図化す

るよう努めた。また、遺構の年代比定や地山土壌の検討のため、自然科学分析(AMS、珪藻花粉分析など)をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。焼骨は新潟医療福祉大学澤田純明准教授に鑑定を依頼した。併行して原稿作成、遺物写真撮影を行い、令和2年12月25日に本書を刊行した。 (堀内)



現地見学会（12月16日）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

友坂遺跡は、富山市街地から西南西約7.0kmに位置し、富山市婦中町友坂・下条・小泉地内に所在する。昭和48～51年に行われたほ場整備前の地籍図などをみると、下条・小泉集落の東には井田川の旧流路、上友坂集落と下友坂集落の間には池田川の旧流路が復元される(婦中町教委1997)。遺跡は、井田川左岸の氾濫平野の微高地上に立地し、標高13mを測る。

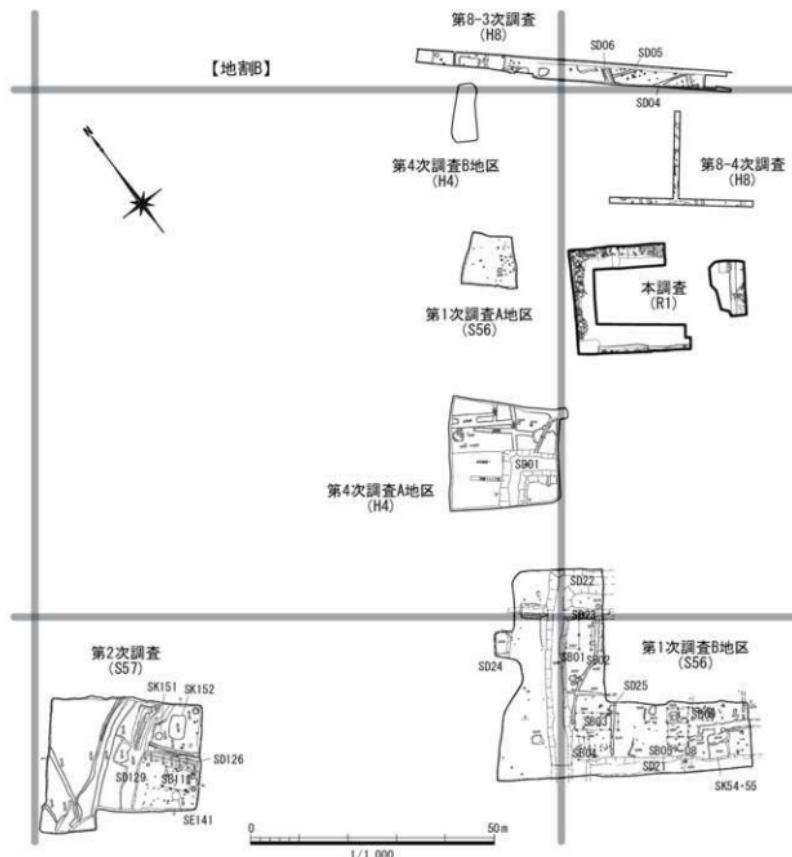
遺跡の西には富山県を二分する呉羽丘陵がある。呉羽丘陵は、北西端の富山市八ヶ山から南西端の富山市境野新にかけて約7kmの長さがある。最大幅約2.5kmで、東斜面は呉羽断層の断層崖により急崖となっている一方、西斜面は緩やかな馬背状の尾根が続く。丘陵の形成は約100万年前頃の海成層に始まり、その後の隆起により陸化し、50～30万年前には旧神通川から運ばれた砂礫が堆積した。その後、さらに隆起し、河道が丘陵東側に移り、浸食により直線的な急崖をつくって、ほぼ現在の状態となった(高瀬監修1994)。

第2節 歴史的環境

令和2年7月末時点で、富山市には1043ヶ所の遺跡が所在する。友坂遺跡が立地する井田川左岸の平野部と、西側の呉羽丘陵・射水丘陵および境野新扇状地周辺では、遺跡の内容・数が大きく異なる。このうち呉羽丘陵・射水丘陵および境野新扇状地周辺は、富山市の遺跡のおよそ5分の1にあたる約200ヶ所の遺跡があり、県内の遺跡密集地帯の一つであり、旧石器時代から江戸時代まで集落、生産、墳墓、山城などと様々な種類の遺跡が連続と続いている。一方、井田川左岸の平野部は、古代・中世

を中心とする集落や城館、生産遺跡が広がる。

旧石器時代 奥羽丘陵・境野新扇状地周辺に遺跡が点在する。古沢A遺跡⁽³⁰⁾ではナイフ形石器・搔器など、開ヶ丘中山IV遺跡⁽³¹⁾では関東系の茂呂型ナイフ形石器、北押川B遺跡⁽³²⁾では東山系の石刀と搔器、杉久保系のナイフ形石器が出土した（富山市教委 1982・1983・2001a・2008a）。向野池遺跡⁽³³⁾では、県内でも数少ない黒曜石細石刃核が見つかっているほか、縦長剥片素材の周縁調整尖頭器も出土した（富山市教委 2000a）。境野新遺跡⁽³⁴⁾は石核・剥片が出土し、製作遺跡とみられる。石器の出土数の多い境野新遺跡、北押川B遺跡以外は、完形の石器が単独あるいは少量出土する傾向があり、短期間の行動の痕跡と評価された（西井・藤田 1976）。



第2図 友坂遺跡主要部平面図

縄文時代 舟羽丘陵・射水丘陵および境野新扇状地周辺で多くの集落遺跡がある。

草創期は、旧石器時代同様に舟羽丘陵の中位段丘で尖頭器の出土する杉谷遺跡⁽²⁷⁾、平岡遺跡⁽⁴⁴⁾、千坊山遺跡⁽⁴⁶⁾、鏡坂I遺跡⁽⁵⁸⁾などが点在する（西井・藤田 1976、婦中町教委 2000）。前期になると中位段丘に入人々が定住はじめ、集落を形成するようになった。平岡遺跡⁽⁴⁴⁾では、前期中葉～末葉の建穴建物14棟、掘立柱建物5棟などが墓域を取り囲むように検出され、墓域の外側に居住域を同心円状に配置する環状集落の構造を持つことが判明した。遺跡からは、これまでに採集品を含め玦状耳飾77点出土していることは特筆される（富山県財団 2015）。北押川C遺跡⁽³²⁾では、竪穴建物1棟を検出した（富山市教委 2003a）。古沢遺跡⁽¹⁹⁾では、前期～中期の貯蔵穴8基を検出した（富山市教委 1973a）。

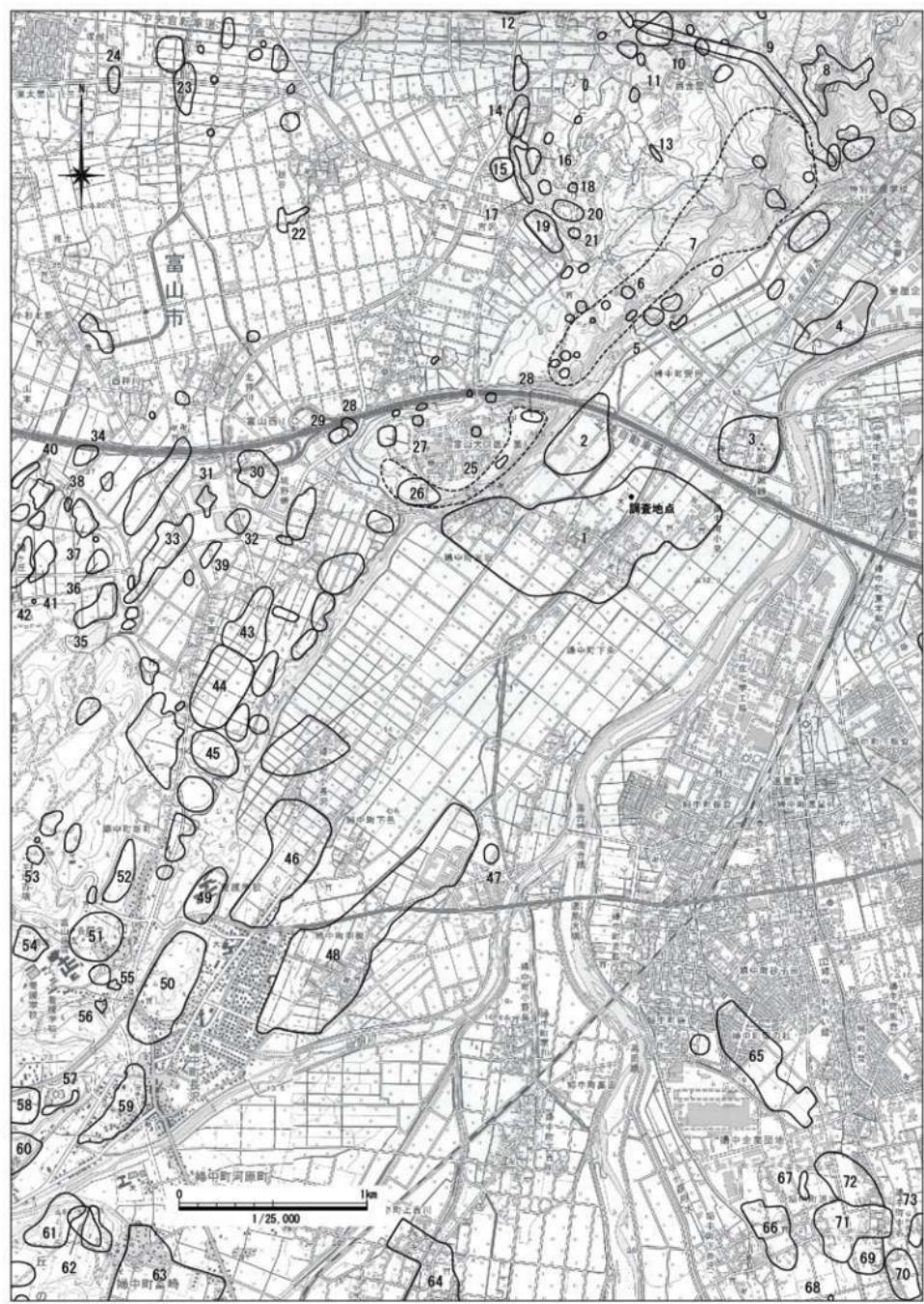
中期は、射水丘陵東端の高位段丘にある開ヶ丘地区で集落形成が活発になる。開ヶ丘中山III遺跡⁽⁴⁸⁾では中期前葉～中葉の竪穴建物6棟を検出した（富山市教委 2002a・2003b）。開ヶ丘孤谷III遺跡⁽³⁷⁾では中期前葉の竪穴建物24棟で構成される北群集落、中期中葉の竪穴建物51棟、掘立柱建物6棟で構成される南群集落の2時期の環状集落を確認した（富山市教委 2003b・2003c・2003d・2004a・2004b）。遺跡からは、千葉銚子産琥珀製品が出土している（栗島 2012）。山田川左岸の中位段丘にある鏡坂I遺跡⁽⁵⁸⁾では、中期前葉～中葉の竪穴建物3棟、大量の土器が廃棄された谷地形を検出した（婦中町教委 2000）。中期後葉になると、高位段丘の大規模集落が衰退し、再び低位・中位段丘に小規模集落が展開する。上堤池遺跡⁽³⁴⁾では竪穴建物1棟、池多東遺跡⁽³⁹⁾では竪穴建物2棟を検出した（富山市教委 1973b・2002b）。北押川C遺跡⁽³²⁾、池多東遺跡⁽³⁹⁾、野下・新開遺跡⁽⁴³⁾などではこの時期と推定されている落とし穴状遺構がある（富山市教委 1985・2003a・2008c・2009、富山県財団 2016）。

後期～晩期は検出遺構が減少し、空白期に近い状態となる。開ヶ丘中山I遺跡⁽³⁸⁾では、後期の竪穴建物3棟、晩期の竪穴建物4棟（富山市教委 2003d）、古沢A遺跡⁽³⁹⁾では、晩期の平地式建物、巨大柱穴群などを検出した（富山市教委 1983）。

弥生・古墳時代 弥生時代中期以前の遺跡はほぼ見つかっておらず、後期以降に舟羽丘陵・羽根丘陵・富崎丘陵周辺に、集落遺跡や墓などが増加する。舟羽丘陵南部にある杉谷A遺跡⁽²⁶⁾では、弥生時代終末期の方形周溝墓群から素環頭鉄刀、ヤリガンナ、鉄素材等が出土した（富山市教委 1975b）。杉谷古墳群⁽²⁵⁾では、山陰地方との関係性の強い四隅突出型埴丘墓である杉谷4号墳、前方後方墳である杉谷1番塚古墳のほか円墳や方墳が築造された（富山市教委 1974）。杉谷古墳群の北東には、舟羽丘陵古墳群⁽⁷⁾がある（富山市教委 1984）。羽根丘陵・富崎丘陵においては、古墳出現期の動向を集落と墳墓両面から追える弥生時代後期から古墳時代前期の集落・墳墓で構成される千坊山遺跡群（婦中町教委 2002）があり、そのうち千坊山遺跡⁽⁵⁰⁾（集落）、六治古塚墳墓⁽⁵⁶⁾・富崎墳墓群⁽⁶²⁾（四隅突出型埴丘墓）、向野塚墳墓⁽⁵⁵⁾（前方後方型埴丘墓）、王塚古墳⁽⁵³⁾・勅使塚古墳⁽⁵⁴⁾（前方後方墳）、富崎千里古墳群（前方後円墳1基、円墳1基、方墳15基）は、国史跡王塚・千坊山遺跡群である。

古墳時代中期になると、舟羽丘陵南部に前方後円墳の古沢塚山古墳が築かれ、後期になると富山県最後の後期前方後円墳と評価される舟羽山No.26号墳が築かれるほか、群集墳である金屋陣の穴横穴墓群⁽⁵⁾も築かれる（富山市教委 1976）。羽根丘陵には、二本榎遺跡⁽⁴⁵⁾において横穴式石室を持つ円墳が築かれる。

古墳時代中期以降の集落遺跡は少ないが、境野新遺跡⁽²⁹⁾では古墳時代中期の竪穴建物2棟、古沢A遺跡⁽²⁰⁾では古墳時代中期の竪穴建物1棟を検出した（富山市教委 1974・1983）。古墳時代後期になると、砂子田I遺跡⁽⁶⁵⁾で竪穴建物1棟、中名VI遺跡⁽⁷²⁾で竪穴建物5棟検出され、井田川右岸の



第3図 周辺遺跡図

第1表 周辺遺跡一覧表

市・富山市教育委員会、福・福中町教育委員会、富大・富山大学、財・(公財)富山県文化振興財团県民文化財満喫事務所、縣・富山県県民文化財センター

氾濫平野にも集落が形成され始める（県財団 2005）。

飛鳥白鳳～平安時代 飛鳥白鳳～平安時代には、吳羽丘陵・射水丘陵および境野新扇状地周辺に須恵器窯・瓦窯・土師器焼成遺構・炭窯・製鉄炉などが築かれ一大手工業生産地帯が広がる。須恵器窯は、飛鳥白鳳時代に操業された県史跡金草第一古窯跡⁽¹¹⁾（富山市教委 1970）、奈良時代に操業された古沢・西金屋窯跡群⁽¹²⁾（富山市教委 1988・2000b）などが知られている。市史跡柄谷南遺跡⁽²²⁾では、奈良時代の瓦陶兼業窯・灰原・掘立柱建物・粘土採掘坑・井戸跡などが発掘され、粘土採掘から土器・瓦の焼成までの一連の作業を行う生産工房があったことが分かった（富山市教委 1999a・2002e）。土師器焼成遺構は、向野池遺跡⁽²⁰⁾、開ヶ丘中遺跡⁽⁴¹⁾、御坊山遺跡⁽³³⁾、西金屋遺跡⁽¹⁴⁾、住吉IV遺跡⁽¹⁹⁾などで確認した（2002c・2002f・2003b・2008c・2012a・2012b・2014b）。製鉄関連では、塚越A遺跡⁽²⁴⁾で8世紀末の長方形箱型炉（富山県教委 1992）、御坊山遺跡⁽³³⁾・開ヶ丘中山III遺跡⁽⁴⁰⁾で半地下水式円形堅型炉が検出されている（富山市教委 2002d・2003b）。

花ノ木C遺跡⁽¹²⁾では、8世紀後半の溝から人形・斎串の祭祀具が出土し、律令祭祀が行われていたことが明らかとなつた（堀沢 2008）。そのほか、吳羽山を越える直線道路遺構として、吳羽山古道⁽⁹⁾の存在が確認された（西井・小林 2005）。

井田川流域においては、左岸の平野部では、友坂遺跡⁽¹⁾で奈良時代後半の堅穴建物3棟（婦中町教委 1993）が検出されており、大宝年間創建とされる熊野神社や友坂寺の門前町の性格をもつ集落が広がっていたと考えられる（富山市教委 2019）。金屋南遺跡⁽⁴⁾では、平安時代の堅穴建物6棟を検出した（富山市教委 1999b、2003）。羽根丘陵周辺には、大宝元（701）年開基とされる各願寺があり、その周辺に飛鳥白鳳時代の堅穴建物1棟、奈良時代の堅穴建物3棟が見つかった鍛治町遺跡⁽⁶⁹⁾があり、各願寺の開基に関連する集落の可能性が示唆されている（婦中町教委 2003）。また、新町II遺跡⁽⁵²⁾では、平安時代の掘立柱建物群が見つかっている（婦中町教委 1986）。

一方、井田川右岸では、墾田開発集落が増加し始める。砂子田I遺跡⁽⁶⁵⁾で堅穴建物6棟、中名I遺跡⁽⁶⁹⁾で堅穴建物10棟、中名V・VI遺跡^(71・72)で堅穴建物11棟、道場I遺跡⁽⁶⁶⁾で堅穴建物3棟が検出され、古墳時代以来井田川左岸地域に勢力を持つ集団が井田川右岸の墾田開発に携わった可能性が示唆されている（婦中町教委 2004・2005、県財団 2003・2004・2005）。

中世 井田川左岸にある友坂遺跡⁽¹⁾では二重にめぐらる堤などを持つ鎌倉～室町時代の武家居館跡が発掘された（婦中町教委 1984・1993）（第2図）。その北東約2.5kmにある金屋南遺跡⁽⁴⁾では、12世紀～16世紀にかけての大規模集落があり、14世紀後半～15世紀に銹物生産が行われていた（富山市教委 2007b）。

井田川右岸には、文献史料に14世紀中頃から現れる中世荘園・宮川荘があったと推定されており、熊野神社を中心に中名I～VI遺跡^(69～72)、持田I遺跡⁽⁷³⁾、道場I・II遺跡^(66・67)などの中世の遺跡が広がっている（婦中町教委 1995、県財団 2002・2003・2004・2005）。また中世墓である市史跡堀I遺跡⁽⁶⁸⁾も存在する（婦中町教委 1996）。

吳羽丘陵には、天正13（1585）年の「富山の役（佐々攻め）」で、富山城に籠る佐々成政を攻めるに際し、羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）の本陣が置かれたとされる戦国時代末期の白鳥城跡⁽⁸⁾があり、東側の平野部にはその出城とされる国史跡安田城跡⁽³⁾、大峪城跡がある。近年の研究では、白鳥城は秀吉の本陣ではなく、先遣隊の総大将であった織田信雄の本陣が置かれた可能性があるとされる（富山市郷土博物館 2010、佐伯 2017）。その他にも、神保氏の支城であった富崎城跡⁽⁸¹⁾、平城の鶴ヶ城跡⁽⁴⁷⁾、山城の長沢東城・長沢西城などがある。（堀内）

第3章 調査成果

第1節 調査の方法

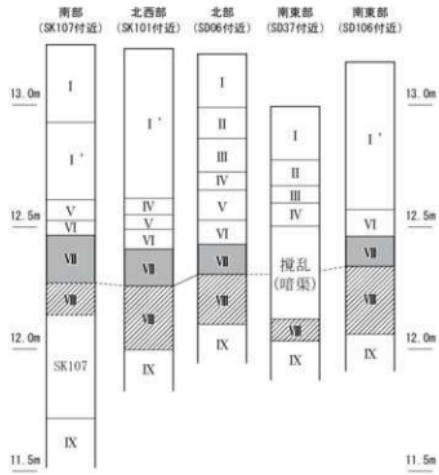
調査区は、旧プール解体工事の周囲を取り囲む形で、北西部と南東部の2箇所に分かれた。

表土掘削は重機を使用し、遺物包含層（VII層）は重機と人力を併用しながら、中世の遺構検出面（VII層）まで掘削した。遺構調査は、検出状況の空中写真撮影後に掘削を開始した。遺構番号は、通し番号の前に遺構の種類を記号で付し、「SK21」・「SD37」のように呼称した。遺構の測量は、断面図を手実測、平面図を電子平板で行った。平面図の縮尺は1/20、等高線は10cm間隔とした。遺構の写真は、デジタル1眼レフカメラ（NikonD850）を使用し、RAWデータ撮影をした。遺跡の全景写真は、遺構検出時と遺構掘削終了時に、ドローン（DJI社 Phantom 2 Vision+）を使用して撮影した。

遺物注記はインクジェットプリンターにて行い、遺跡記号・遺構名・日付を「TMSK SD37 No.01 191203」のように注記した。遺物の写真撮影はデジタル1眼レフカメラ（NikonD850）を使用した。遺構図・遺物実測図・報告書作成とともにAdobe®Creative Suite®でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF型式（X-1a:2001）で入稿した。

第2節 層序

地表面の標高は13.2m前後である。表土（I層）ないし旧プールの造成土（I'）の下には、プロック土を含む黒褐色土（II層）がある。その下には褐色土（III層）、灰褐色土（IV層）、青灰色土（V層）があり、いざれも近世以降の水田土壤と思われる粘質土である。V層の下面には鉄分の沈殿が認められた。II～V層の堆積は調査区北端で厚くなる傾向があり、地形的にやや高くなっている。V層の下には暗紫灰色土が2層（VI層・VII層）あり、とくに下部のVII層はV层のプロック土や炭化物を含み、中世の遺物が出土することから、中世の遺物包含層と判断された。包含層中の遺物量は調査区北側でより多く確認された。VII層の下には、中世の地山となるにぶい黄褐色シルト質土（VIII層）が堆積する。層厚は20～30cmあり、上面で中世の遺構を検出した。VIII層は、古代の遺物包含層である可能性も想定されたが、調査区内では古代の遺物は出土しなかった。VIII層下のIX層は、灰白色のシルト質土で古代の地山である。調査区内ではIX層上面で遺構は検出されなかった。



第4図 層序

第3節 遺構

1. 概要

VII層の上面で中世の遺構を検出した。内訳は柵3条、礎石建物1棟、竪穴建物3基、溝13条、土坑13基、ピット77基である。旧ブルー跡地の遺構の状況が不明であるが、竪穴建物や土坑・ピットは調査区の北西部に明らかな偏りがあり、溝が散在する南東部と対照的である。SD37やSD125がその境界に位置している。柵・竪穴建物・礎石建物の切り合いや溝の掘り直しなどから、6段階程度の変遷があり、12世紀後半～15世紀にわたって断続的に遺構が形成されている。

なお、IX層の上面を古代の遺構確認面として調査したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

2. 柵

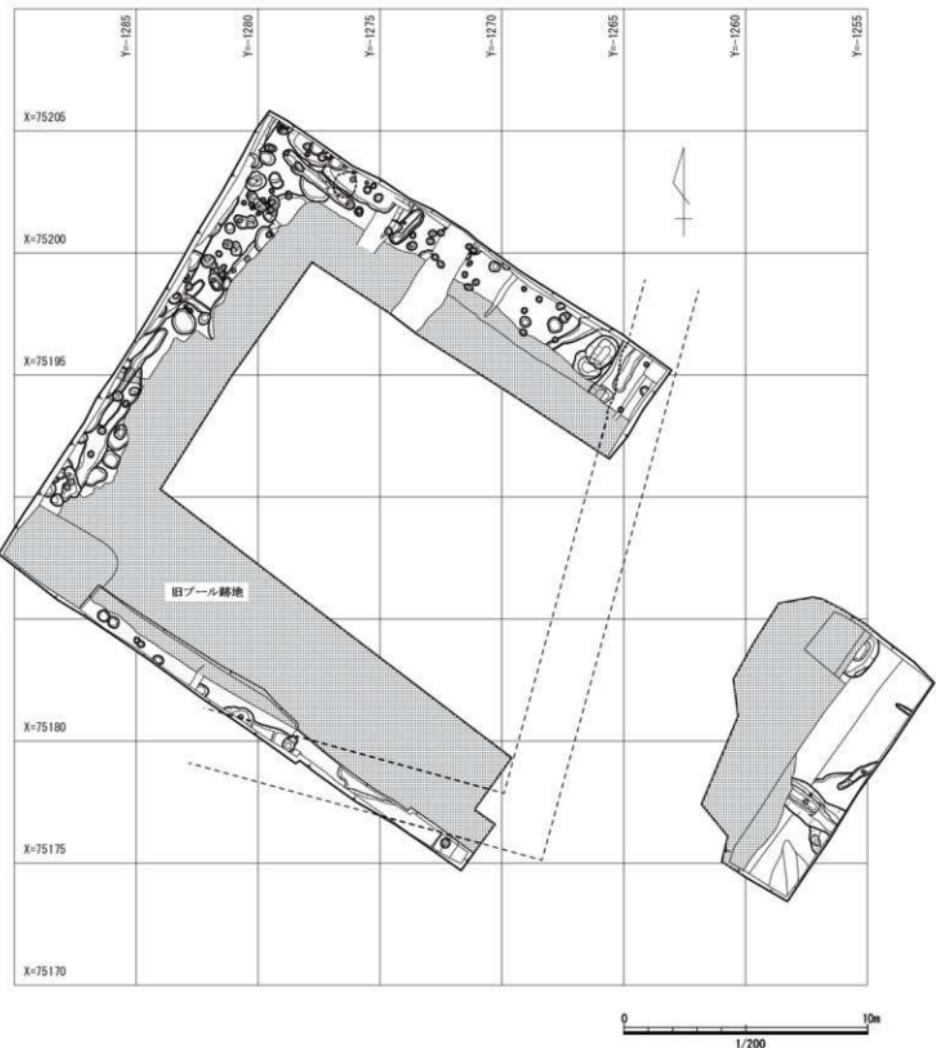
SA128（第8図） 北西部に位置する柵列で、7基のピットが並んで検出された。北西側からSP18・131・96・121・55・58・112の順で、SK16と重複するSP131・96の間にもう1基のピットが想定される。総長は9.88mであるが、北西側は調査区外へ延びる可能性がある。方位はN-125°-E、柱間距離は1.09～1.49mである。柱穴はSP96を除き、円形ないし楕円形基調で、規模は径25～48cm、深さは40～57cmである。SP96は一辺35cmの隅丸方形で、深さ75cmを測り、他に比べて深くなる。SK16より古く、SK85より新しい。遺物はSP18・55から土師器皿、SP55から須恵器（1）・珠洲（2）が出土した。

SA129（第8図） 北西部に位置する柵列で、6基のピットが並んで検出された。南西側からSP67・04・10・30・132・130の順に並び、方位はN-28°-Eである。総長は6.12mであるが、北東側は調査区外へ延びる可能性がある。柱間距離は0.83～1.60mである。柱穴は円形ないし楕円形で、規模は径17～73cm、深さ33～46cmを測る。SP10が礎石建物SB119のSP09に切られる。遺物はSP10・30・67から土師器皿が出土した。

SA133（第9図） 北西部に位置する柵列である。南西側からSP95・134・01・29の4基が並ぶ。総長は4.47mで、方位はN-35°-Eである。北西側調査区外の状況によっては掘立柱建物になる可能性がある。柱間距離は1.40～1.60mである。柱穴は円形で、規模は径27～44cm、深さは39～50cmである。礎石建物SB119より古く、柵SA129より新しい。遺物はSP29から土師器皿が出土した。

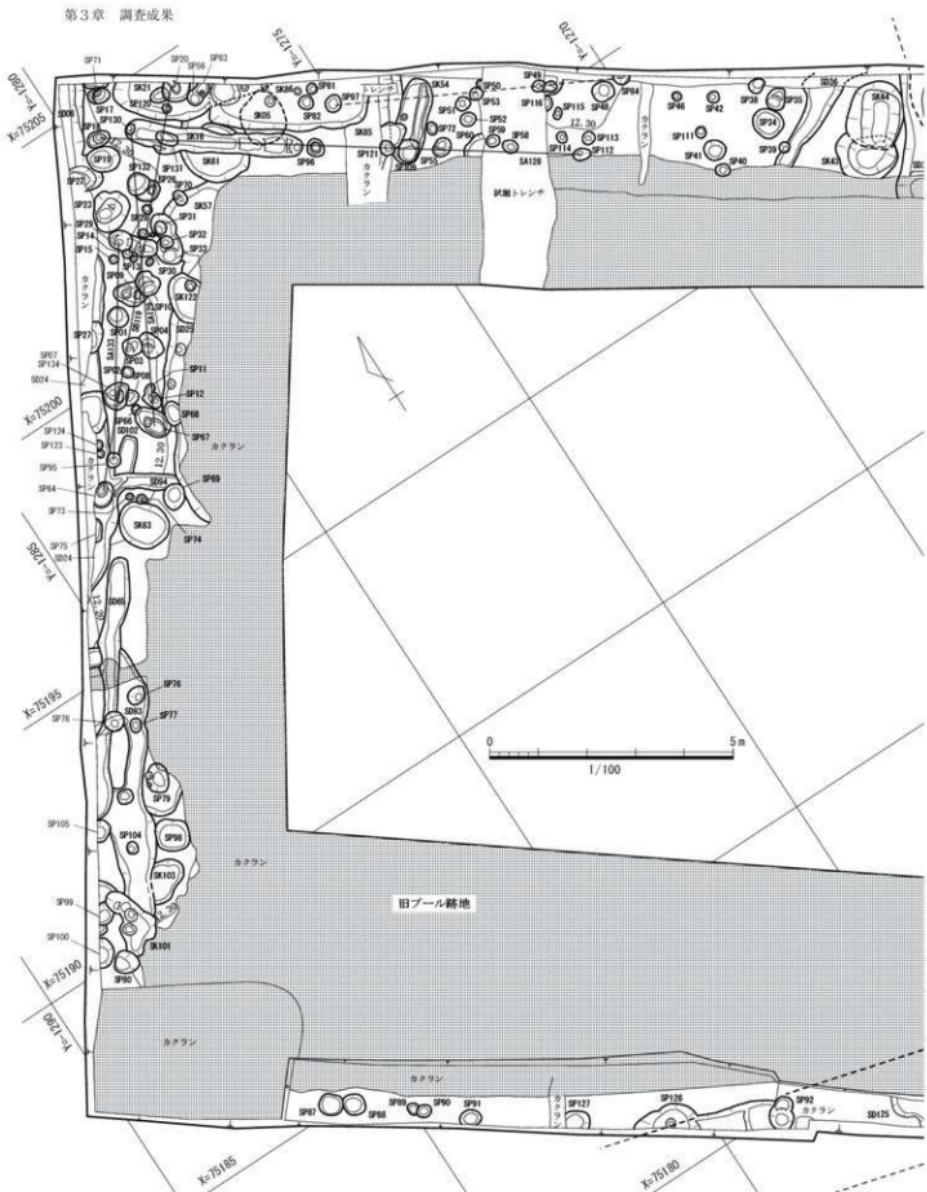
3. 紋石建物

SB119（第9図） 北西部に位置する礎石建物で、5基のピットが並んで検出された。南西側からSP64・07・09・26・20の順に並び、方位はN-43°-Eである。総長は8.64mであるが、南西・北東側とともに調査区外へ延びる可能性がある。SP64を除く4基でやや角のある円盤状の礎が水平に置かれ、礎石建物と判断した。建物の中心は北西側調査区外にあると想定される。礎の大きさは17～26cmである。柱間距離は2.12～2.22mで揃う。礎石上面の標高は最も低いSP09で12.23m、最も高いSP20で12.30mである。柱穴は隅丸方形ないし円形基調で、規模は径49～68cm、深さは17～54cmである。柵SA129・SA133、竪穴建物SK21より新しい。遺物は全てのピットから土師器皿が、SP20からは珠洲が出土した。SP20から土師器皿（3）が、SP07からは鉄釘（4）が出土した。

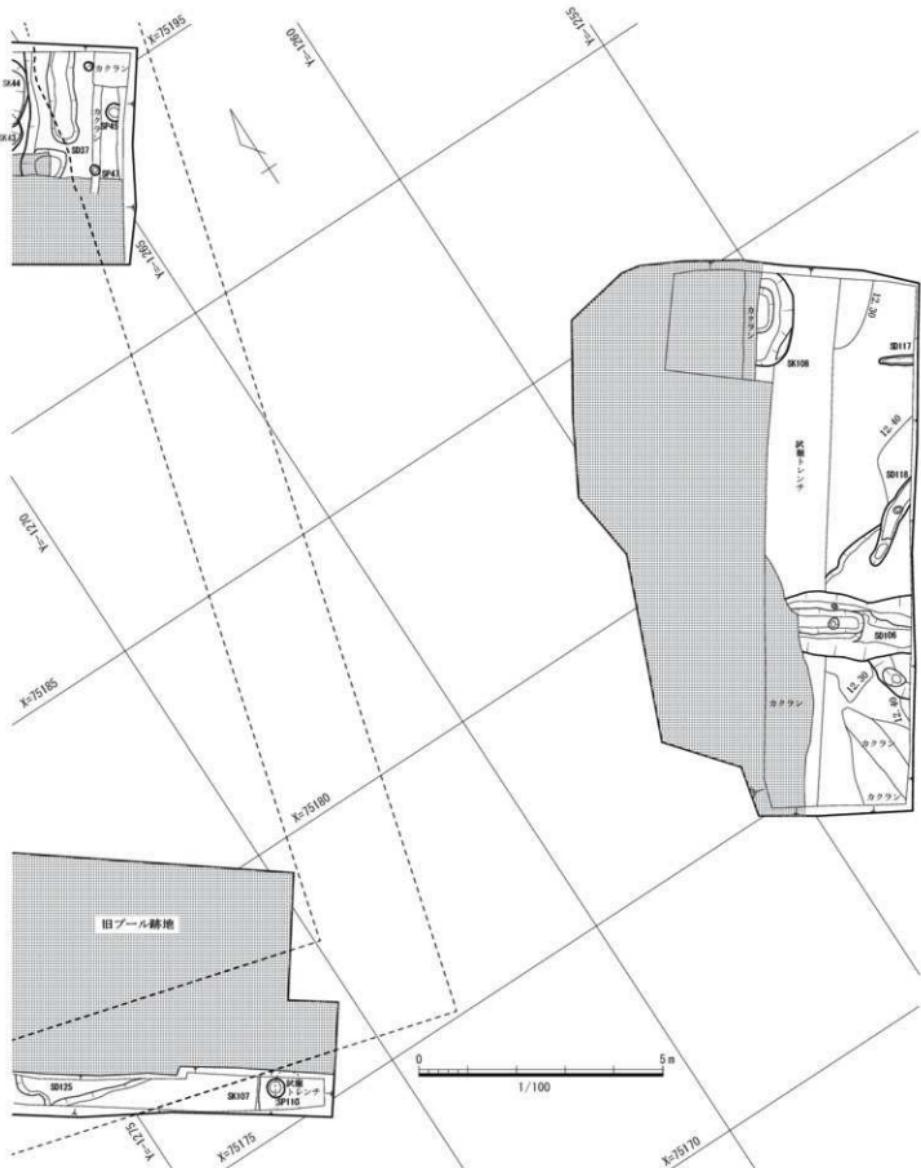


第5図 調査区全体図

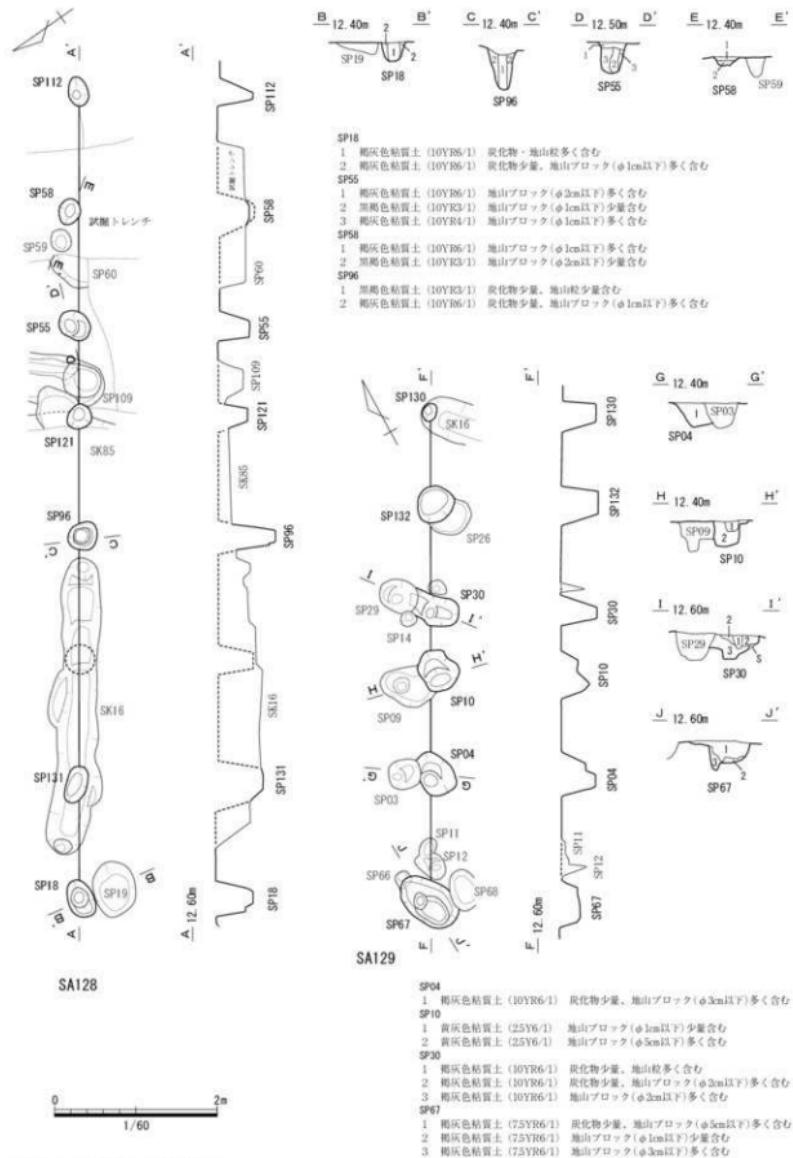
第3章 調査成果



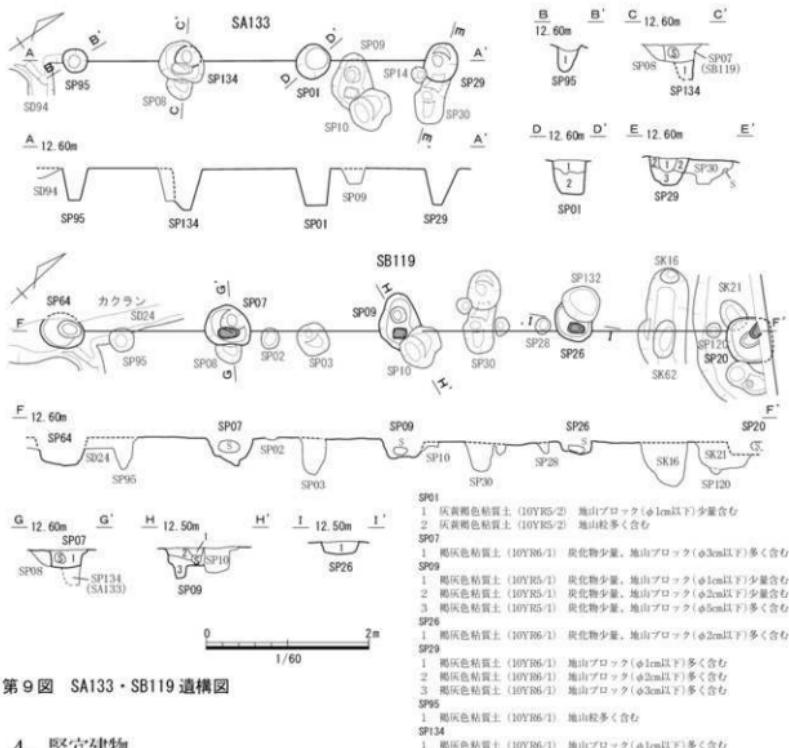
第6図 調査区構造位置図 1



第7図 調査区遺構位置図 2



第8図 SA128・129遺構図



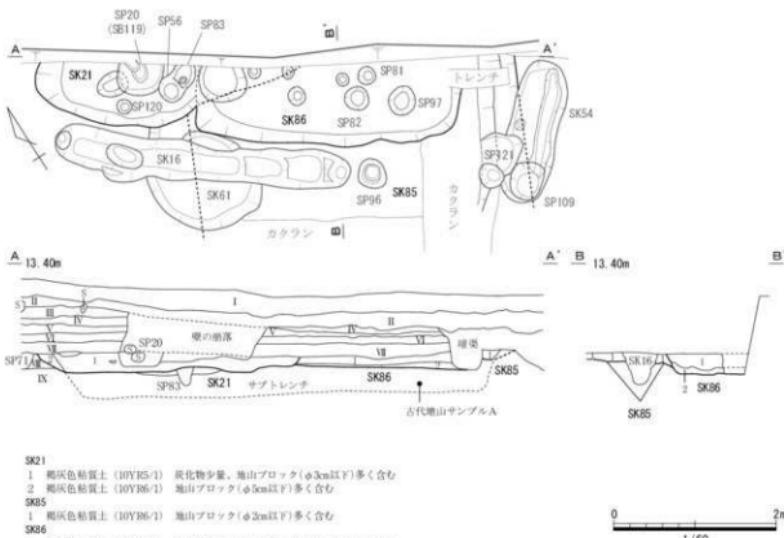
第9図 SA133・SB119遺構図

4. 壇穴建物

SK21 (第10図) 北西部に位置する壇穴建物である。礎石建物SB119より古く、壇穴建物SK85・86より新しい。調査区壁断面をみると東側へ延びており、一辺3.0m程度の隅丸方形ないし不整円形になると推定される。深さは約25cmあり、床面は西側では概ね平坦で、東側はやや凹凸がある。覆土は地山ブロックを含む褐灰色土のほぼ単層である。遺物は土師器皿(5~14)、珠洲、土錐(15~17)、刀子(18)、鉄釘(19)が出土した。出土炭化物の年代測定結果を第4章第1節に記載した。

SK85 (第10図) 北西部に位置する壇穴建物である。柵SA128、壇穴建物SK21・86、土坑SK16・61より古い。検出状況をみると、一辺4.1m程度の方形になると推定される。方位は南東壁でN-27°-Eである。深さは10~15cmで、床面は概ね平坦である。覆土は地山ブロックを多く含む褐灰色土の単層である。遺物は土師器皿(20~27)・梶(28)、珠洲(29・30)、土錐(31~33)、輪羽口(34)が出土している。

SK86 (第10図) 北西部に位置する壇穴建物である。壇穴建物SK21より古く、壇穴建物SK85より新しい。人骨の出土したSK05も本遺構より新しい。一辺3.2mの方形になると推定される。南西壁の方位はN-125°-Eである。深さは25cmあり、床面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む褐灰色土が上下2層確認された。遺物は土師器皿(35~39)、珠洲(40)、鉄釘(41)が出土した。



第10図 SK21・85・86遺構図

5. 溝

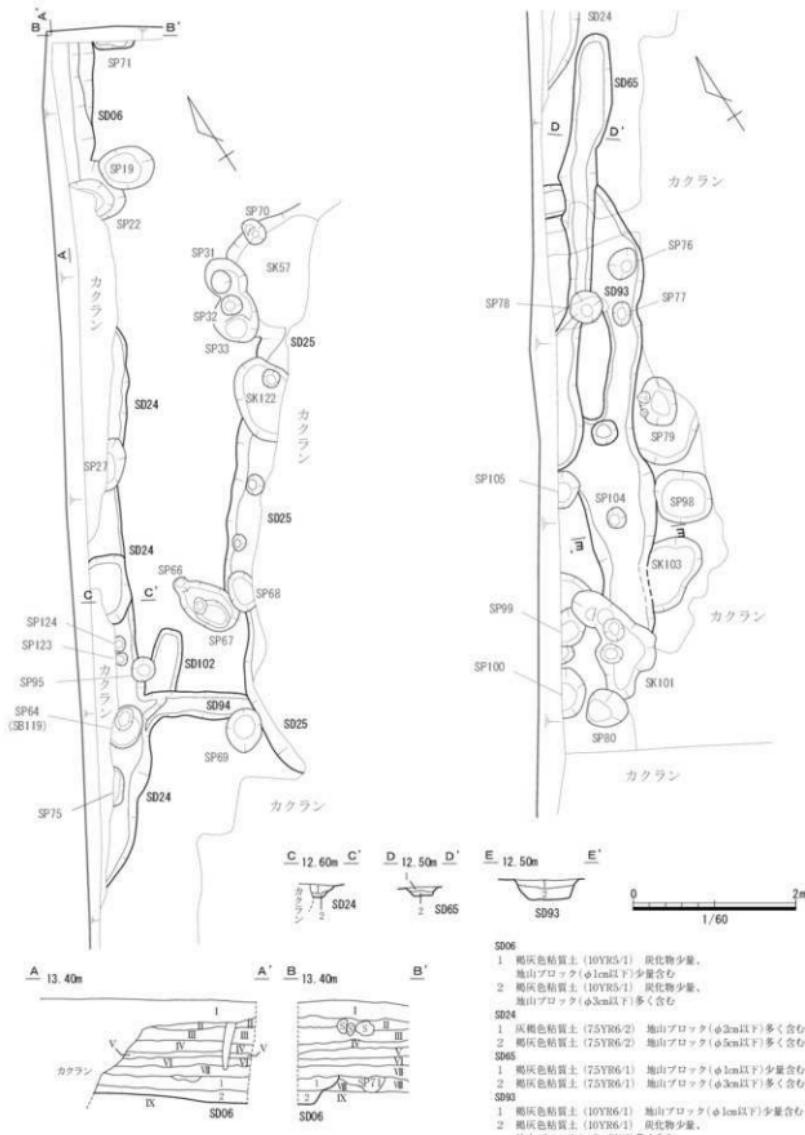
SD06 (第11図) 調査区北隅に位置する。N-33°-Eの方位に直線的に延びる溝であるが、大部分が調査区外になり、全容は明らかでない。SP22・71より新しい。幅は不明であるが、深さは約35 cmあり、底面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む褐灰色土が上下2層確認された。遺物は土師器皿、珠洲(42)が出土した。

SD24 (第11図) 調査区北西部に位置する。N-35°-Eの方位に約7.0 mの長さで延びるが、両端は屈曲ないし途絶する。SD94より新しい。搅乱のため幅は不明であるが、深さは約15 cm、底面は概ね平坦である。覆土には地山ブロックが多く含まれる。遺物は土師器皿が出土した。

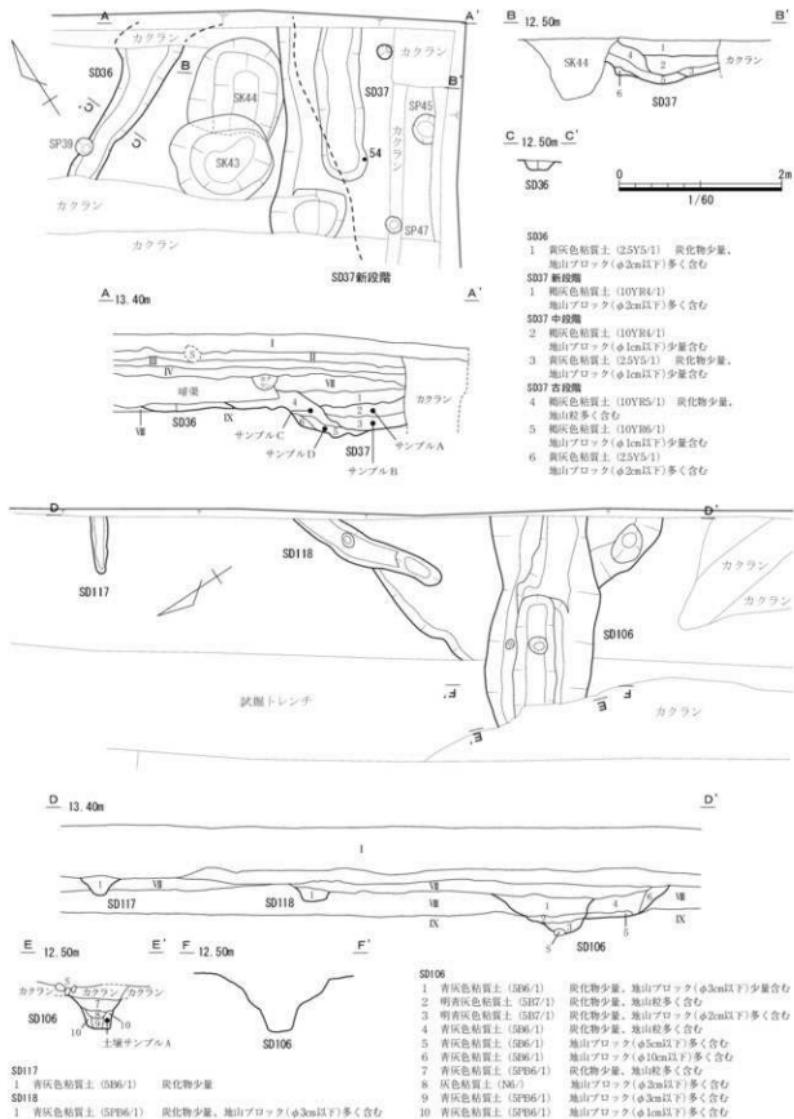
SD25 (第11図) 調査区北西部に位置し、SD24と並走する。約5.3 mの長さで弧状に延び、両端は屈曲ないし途絶する。SD94・SK57・SK122より新しい。搅乱のため幅は不明であるが、深さは約10 cmで、底面は平坦である。覆土は褐灰色粘質土である。遺物は土師器皿、珠洲が出土した。

SD36 (第12図) 調査区北東部に位置する。N-66°-Eの方位に直線的に延びるが、東端はやや蛇行する。幅は30~85 cmあり、深さは約12 cm、底面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む黄灰色土ないし褐灰色土である。遺物は珠洲(43)が出土した。

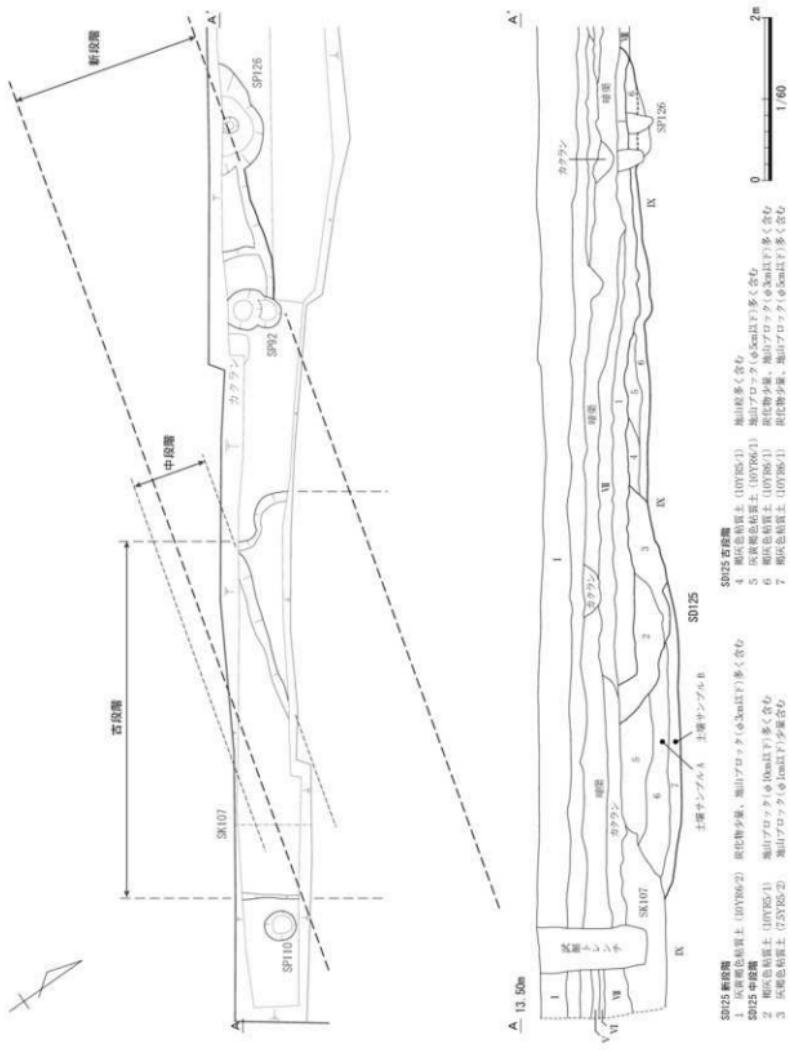
SD37 (第12図) 調査区北東部に位置する。調査区壁断面で二度の掘り直しが確認され、覆土の1層を新段階、2・3層を中心段階、4~6層を古段階と判断した。古段階はSK44より古く、SD36より新しい。古段階はN-26°-Eの方位に直線的に延び、全幅が3.0 m以上あり、北西側0.7 mは深さ20 cmの



第11図 SD06・24・25・65・93・94・102遺構図



第12図 SD36・37・106・117・118遺構図



第13図 SD125 遺構図

段があり、それより南側は深さ 50 cmまで深くなる。その最深部には幅 55 cm、深さ 5 cmの掘り込みがあるが、南西側は途切れる。中段階・新段階は、検出状況や断面観察により N-17°-E の方位に延びると推定される。中・新段階は規模が小さくなり、幅 2.2 m前後、深さは中段階が 50 cm、新段階が 20 cmで、断面逆台形となる。遺物は土師器皿（44～56）、八尾（57）、珠洲（58～60）、土錘（61）、鉄製品の鏡（62）が出土した。八尾は新段階の 1 層から出土している。

SD65（第11図）調査区北西部に位置する。N-37°-E の方位に直線的に延びるが、北東端は途切れ、南西側は屈曲ないし途絶する。幅は 25～50 cmあり、深さは約 12 cm、底面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む褐色灰色土が上下 2 層確認された。遺物は土師器皿が出土した。

SD93（第11図）調査区北西部に位置する。N-37°-E の方位を主軸として直線的に延びるが、北端は西へ屈曲し、中央部でも西へ分岐する。幅は 35～90 cmあり、深さは 25 cm、底面は平坦である。覆土は地山ブロックを含む褐色灰色土が上下 2 層確認された。遺物は土師器皿（63～65）が出土した。

SD94・102（第11図）調査区北西部に位置する小規模な溝である。SD94 は SD24・25 より古く、SD102 より新しい。SD94 は N-122°-E の方位に直線的に延び、幅 30～35 cm、深さ 10 cmである。SD102 は N-49°-E の方位を主軸とし、北東端は途切れる。幅 35 cm、深さ 5 cmである。遺物は SD94 から土師器皿、SD102 から土錘（66）が出土した。

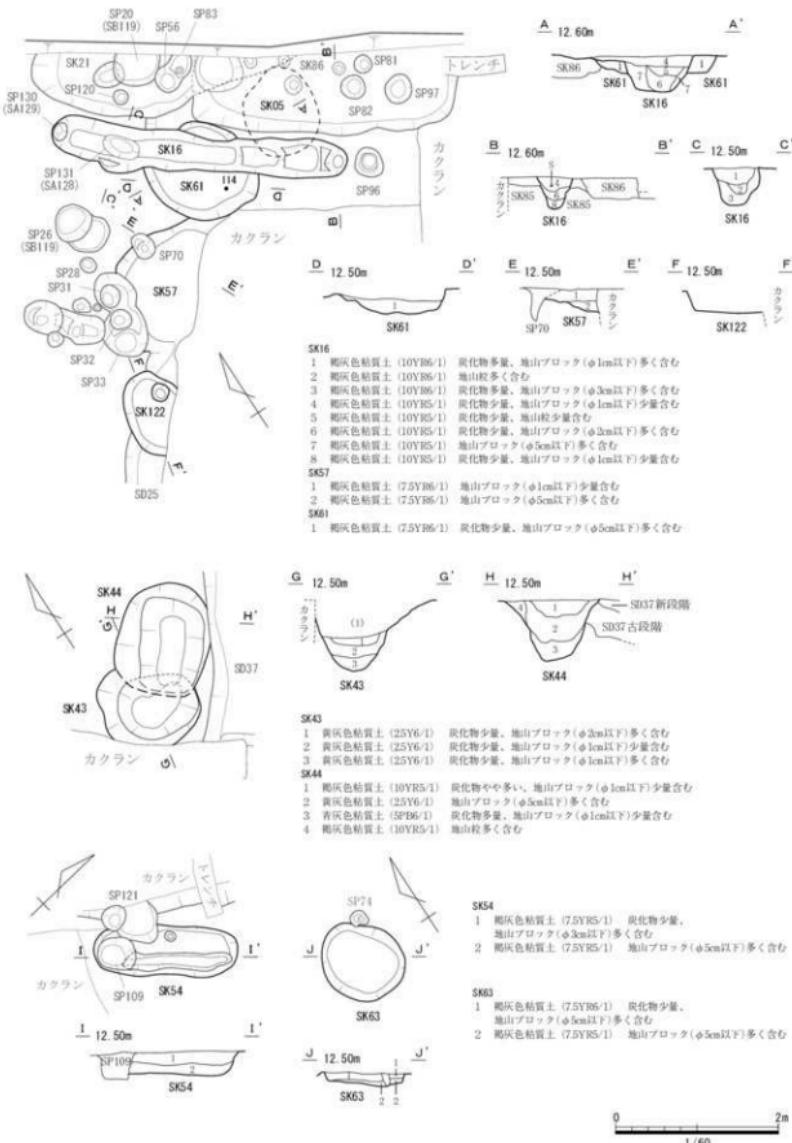
SD106（第12図）調査区南東部に位置する。N-116°-E の方位に直線的に延び、SD37・125 の古段階と直交する。幅は 1.15～1.30 mで、南東側には幅 90 cm、深さ 20 cmの張り出しがある。溝は南東側では断面逆台形を呈し、深さは 45 cmであるが、北西側では断面が薬研堀り状になり、深さ 70 cmと深くなる。底面標高は北西へ緩やかに下がる。覆土は青灰色粘質土を基調とし、南東側には炭化物を含む層がある。遺物は土師器皿（67～69）、珠洲（70）が出土した。

SD117・118（第12図）調査区南東部に位置する小規模な溝である。SD117 が N-123°-E 、SD118 が N-60°-E を主軸とする。SD117 は幅 20 cm、深さ 25 cmである。SD118 は幅 20～35 cm、深さ 15 cmである。SD117 は VII 層上面から掘り込まれたため、中世より新しい遺構と判断される。覆土はいずれも青灰色粘質土の単層である。遺物は出土しなかった。

SD125（第13図）調査区南西部に位置する。調査区南西の壁断面で二度の掘り直しが確認され、覆土の 1 層を新段階、2・3 層を中段階、4～7 層を古段階と判断した。古段階は SK107 より古い。古段階の方位は SD37 古段階と同じ N-26°-E を示し、同一の溝となる可能性がある。中・新段階の方位は N-107°-E を示し、SD37 の中・新段階と直交する。古段階は下端幅で 4.8 mで規模が大きく、深さは中心部で 79 cm、一段高くなる北寄りで 42 cmである。中段階は幅 1.0 m、深さ 66 cmとなり、断面はやや丸みのある逆台形になる。覆土上層の 2 層は地山の大ブロックを含む埋戻し土である。新段階は幅 2.2 m、深さ 23 cm と浅くなり、断面は整った逆台形となる。遺物は土師器皿（71）、八尾（72）、珠洲（73）が出土した。71 は古段階の底面から出土したものである。

6. 土坑

SK05（第14図）調査区北東部に位置する。VII 層上面での遺構検出時に、SK86 を切って確認された。径 1.0 m の不整円形の範囲で人骨（焼骨）が出土した。土壤墓と考えられたが、掘り込みがほとんど残存せず、上部も旧ブルーベル建設による搅乱を受けていたため、確証を得られなかった。人骨については、第4章第2節に分析結果を掲載している。人骨を取り上げるために周囲の土を掘削した際に出土した土師器皿（74～79）、珠洲、土錘（80）は、本来は重複する SK86 に帰属するものと判断される。



第14図 SK05・16・43・44・54・57・61・63・122遺構図

SK16 (第14図) 調査区北東部に位置する。長さ3.6m、幅50cmの溝状になる土坑である。SK61・86より新しい。N-125°-Eの方位を主軸とするが、北西端はやや北へ曲がる。深さは中央部が55cmで最も深く、南東側は緩やかな階段状に浅くなる。覆土は褐色粘質土を基調とし、炭化物を含む層が多い。遺物は比較的量が多く、土師器皿(81~97)、珠洲(98~100)、土錘(101~106)、鉄製品の鎌(107)が出土した。

SK43 (第14図) 調査区北東部に位置する。SK44と重複し、検出状況をみるとSK44より古い。1.1×1.2mの隅丸方形に近い平面形で、深さは94cmである。覆土は黄灰色土を基調とし、上層は地山ブロックを多量に含む。遺物は土師器皿、白磁皿(108)が出土した。

SK44 (第14図) 調査区北東部に位置する。SD37・SK43より新しい。1.1×1.4mの隅丸長方形と推定される。深さは92cmである。覆土は下層の3層が青灰色粘質土で、中層の2層は地山ブロックを多量に含む埋め戻し土である。SK43を大型の柱穴とした場合には、SK44がその抜き取り穴になることが考えられる。上層の1層は後世のピットの埋土の可能性があり、径70cm、深さ20cm程度のピットが想定される。遺物は土師器皿(109)、珠洲が出土した。

SK54 (第14図) 調査区北東部に位置する。長さ1.75m、幅65cmの隅丸長方形を呈する。南半が溝状に深く、深さは北半で16cm、南半で35cmである。長軸方位はN-44°-Eを示す。SP109に切られる。覆土は褐色土を基調とする。遺物は珠洲(110)が出土した。

SK57 (第14図) 調査区北西部に位置する。一辺1.3mほどの隅丸方形と推定される。検出状況をみると、SD25より古い。深さは21~30cmで、底面は凹凸がある。覆土は褐色粘質土を基調とする。遺物は土師器皿、珠洲が出土した。

SK61 (第14図) 調査区北東部に位置する。径1.2~1.4mの不整円形の平面形である。断面は逆台形で、深さは33cmである。SK16より古く、SK85・86より新しい。覆土は褐色粘質土の単層である。遺物は土師器皿(111~117)、珠洲(118・119)、土錘(120)、鉄釘(121)が出土した。

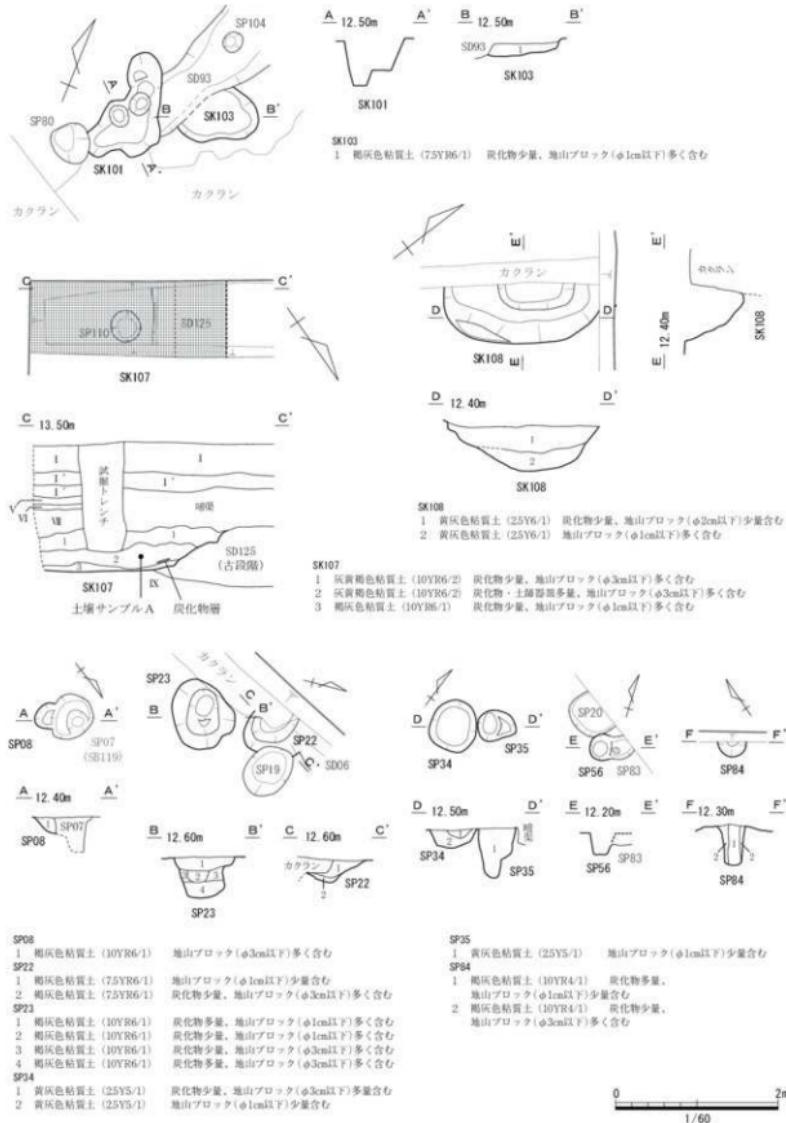
SK63 (第14図) 調査区北西部に位置する。径0.90~1.05mの不整円形を呈する。最深部は南側があり、深さは21cmである。覆土は褐色粘質土を基調とする。遺物は土師器皿、八尾が出土した。

SK101・103 (第15図) 調査区北西部に位置する。SK101は径0.8~1.2mの不整形を呈し、深さは43cmである。底面に深さ19cmと16cmのピットがあるが、SK101とは別のピットの可能性もある。SK103は0.7×1.0m程度の不整楕円形と推定され、深さは18cmである。覆土は褐色土の単層である。遺物はSK101から須恵器(122)、土師器皿(123)が出土、SK103からは出土しなかった。

SK107 (第15図) 調査区南西隅に位置する。北側は旧ブル建設による搅乱のため全容は不明であるが、調査区南壁をみると幅2.3m以上の大型土坑と想定される。SD125古段階より新しい。断面は逆台形状で、深さは55cmである。土坑内は、褐色土が薄く堆積した上に、灰黄褐色土が上下2層堆積していた。灰黄褐色土は炭化物や土師器皿を多く含み、とくに下層(2層)で顕著であった。炭化物は西壁の立ち上がり部分に特に多く、一部は薄く層をなしていた(第4章第1節に年代測定結果を記載した)。廃棄土坑と考えられ、遺物は土師器皿(124~192)、同安窯の青磁(193・194)、砥石(195)が出土した。

SK108 (第15図) 調査区南東部に位置する。北西側を搅乱で壊されるが、1.1×2.0mの隅丸長方形と推定される。深さは56cmで、さらに中央部に深さ18cmの掘り込みがある。覆土は黄灰色土を基調とする。遺物は出土しなかった。

SK122 (第14図) 調査区北西部に位置する。径0.7~1.0mの楕円形と推定され、深さは30cmである。検出状況をみるとSD25より古い。北東側に深さ12cmのピットがある。遺物は出土しなかった。



第15図 SK101・103・107・108・SP08・22・23・34・35・84・124遺構図

7. ピット

ピットは100基検出し、このうち柵、礎石建物のピットを除くと77基である(第6・7・15図、第2表)。北側に偏って分布し、周辺にはさらなる柵や掘立柱建物の存在が想定される。SP84・49・53・97はN=117°-Eの方位に並び、柵になる可能性がある。SK54に切られる位置にピットがあったとした場合、4間の柵となり、方位はSD37古段階に直交する。このほか、柱痕をもつ規模の大きいSP23からは、土師器皿(198)、珠洲I期の鉢(199・200)、太宰府編年D期の青磁(201・202)が出土し、SD37古段階と同時期の掘立柱建物の柱穴と推定される。SP22からは珠洲(197)が出土した。

第2表 ピット一覧表

遺構番号	平面形	幅(ｍ)	奥行(ｍ)	深さ	覆土	備考(出土遺物、切り合い等)	遺構番号	平面形	幅(ｍ)	奥行(ｍ)	深さ	覆土	備考(出土遺物、切り合い等)
SP01 円形	43	39	44	14	灰黄褐色土	SA133	SP07 横円形	73	50	35	16	褐灰色土	SA129, 土師器皿
SP02 円形	25	23	6	-	褐灰色土		SP08 不規円形	50	-	26	-		
SP03 円形	39	36	46	14	褐灰色土	SP04より新しい、土師器皿	SP09 円形	54	43	49	14	褐灰色土	土師器皿
SP04 不整円形	56	42	42	14	褐灰色土	SA129, SP03より古い	SP10 不整円形	33	26	42	14	褐灰色土	SK37より新しい
SP05 円形	57	49	41	14	褐灰色土	SE19(壁石), SP08より新しい、土師器皿	SP11 楕丸方形	50	-	16	-	褐灰色土	
SP06 円形	32	-	22	14	褐灰色土	SP07より古い、土師器皿	SP12 円形	27	21	28	14	褐灰色土	
SP09 不整円形	68	50	53	14	褐灰色土	SE19(壁石), SP04より新しい、土師器皿	SP13 円形	16	14	13	14	褐灰色土	
SP10 不整円形	50	45	33	14	褐灰色土	SA129, SP09より古い、土師器皿	SP14 不整円形	22	29	11	14	褐灰色土	
SP11 円形	27	20	5	14	褐灰色土		SP15 不整円形	48	-	19	14	灰褐色土	
SP12 楕円形	41	28	32	14	褐灰色土	土師器皿	SP16 不整円形	42	34	35	14	褐灰色土	
SP13 円形	15	14	21	14	褐灰色土	SA129, SP09より古い、土師器皿	SP17 円形	30	21	15	14	褐灰色土	
SP14 円形	19	18	22	14	青灰色土		SP18 楕丸方形	41	41	57	14	褐灰色土	
SP15 円形	18	19	29	14	褐灰色土		SP19 不整円形	59	45	20	16	褐灰色土	土師器皿
SP17 円形	34	29	27	14	褐灰色土		SP20 不整円形	49	40	44	14	褐灰色土	
SP18 楕円形	48	32	46	14	褐灰色土	SA128, 土師器皿	SP21 円形	22	22	53	14	褐灰色土	
SP19 不整円形	66	52	52	14	褐灰色土		SP22 円形	29	29	50	14	褐灰色土	
SP20 楕丸方形	55	-	25	14	褐灰色土	SA119(壁石), 土師器皿, 朱画壁	SP23 円形?	28	-	47	-	褐灰色土	
SP22 円形?	74	-	40	14	褐灰色土	朱画跡	SP24 円形?	34	-	65	-	褐灰色土	土師器皿
SP23 不整円形	86	74	59	14	褐灰色土	SA129, 土師器皿, 朱画跡, 青緑釉	SP25 楕丸方形	48	43	7	14	褐灰色土	
SP26 円形?	45	-	17	14	褐灰色土	SE19(壁石), 土師器皿	SP26 楕丸方形	45	44	8	14	褐灰色土	
SP27 円形?	65	-	41	14	褐灰色土		SP27 円形	25	23	2	14	褐灰色土	
SP28 円形	29	18	23	14	褐灰色土		SP28 円形	30	26	8	14	褐灰色土	
SP29 円形	44	43	46	14	褐灰色土	SA133, SP30より新しい、土師器皿	SP29 円形?	44	-	38	-	褐灰色土	
SP30 円形	45	36	40	14	褐灰色土	SA129, SP29より古い、土師器皿	SP30 円形?	50	-	43	-	褐灰色土	
SP31 円形	58	45	42	14	灰黄褐色土		SP31 円形?	30	29	39	14	褐灰色土	SA133
SP32 円形	27	24	46	14	褐灰色土	SP30より新しい、土師器皿	SP32 楕丸方形	35	34	75	14	褐灰色土	SA128
SP33 円形	63	56	41	14	褐灰色土	SP32より古い	SP33 円形?	30	30	47	14	褐灰色土	
SP34 円形	62	57	23	14	黄褐色土	土師器皿	SP34 楕丸方形	69	63	15	14	褐灰色土	土師器皿
SP35 不整円形	47	37	62	14	黄褐色土	SA129	SP35 楕丸方形	48	-	32	-	褐灰色土	
SP36 不整円形	34	28	62	14	黄褐色土	土師器皿	SP36 楕丸方形	62	-	38	-	褐灰色土	
SP37 円形	23	22	26	14	黄褐色土	SA129	SP37 楕丸方形	25	23	66	-		
SP38 円形	29	26	43	14	黄褐色土	土師器皿	SP38 楕丸方形?	46	-	49	-	褐灰色土	
SP41 円形	44	42	12	14	灰白色土	SP30より古い、土師器皿	SP39 楕丸方形?	50	49	31	14	褐灰色土	SK34より新しい
SP42 円形	24	24	20	14	灰白色土		SP40 楕丸方形	38	36	29	-		
SP45 円形	96	-	31	14	褐灰色土		SP41 楕丸方形	23	22	30	-		
SP46 円形	19	17	10	14	黄褐色土	SA129	SP42 楕丸方形	31	28	43	-	SA128	
SP47 円形	21	19	22	14	褐灰色土		SP43 楕丸方形	17	24	14	-		
SP48 円形	44	40	18	14	褐灰色土		SP44 楕丸方形	24	24	21	-		
SP49 円形?	-	-	59	14	黑褐色地土	土師器皿	SP45 楕丸方形	24	14	12	-		
SP50 円形?	17	-	14	14	褐灰色土		SP46 楕丸方形	31	-	16	-		
SP51 円形	31	27	18	14	褐灰色土		SP47 楕丸方形	18	18	42	-	土師器皿	
SP52 円形	33	29	8	14	褐灰色土		SP48 楕丸方形	32	28	49	-	SA128	
SP53 円形	26	25	51	14	褐灰色土		SP49 楕丸方形	15	-	34	-	褐灰色土	
SP55 円形	40	34	47	14	黑褐色地土	SA128, 土師器皿, 朱画跡	SP50 楕丸方形	19	-	29	14	褐灰色土	土師
SP56 円形	32	27	44	14	灰黄褐色土	SA128, 土師器皿	SP51 楕丸方形	-	-	23	-	褐灰色土	SD125古段跡より古い
SP58 円形	33	27	45	14	黑褐色地土	SA128	SP52 楕丸方形	-	-	19	14	褐灰色土	
SP59 円形	28	25	58	14	黑褐色地土		SP53 楕丸方形	23	17	43	-	SA129	
SP60 円形?	-	-	34	14	黑褐色地土		SP54 楕丸方形	45	26	37	-	SA128	
SP64 円形	55	-	54	14	褐灰色土	SA119, 土師器皿	SP55 楕丸方形	47	43	46	-	SA129	
SP66 円形	20	19	38	14	褐灰色土		SP56 楕丸方形	29	27	50	14	褐灰色土	SA133, SA119(SP07)より古い

第4節 遺物

1. 概要

遺物は構造出土遺物、包含層出土遺物、表土出土遺物、調査区周辺の表探遺物に区分される。出土した土器の大部分を中世の土器が占め、土師器皿、八尾、珠洲、青白磁がある。12世紀後半～14世紀前半のもので、最も出土量が多くなるのは13世紀である。古代の土器は須恵器がごく少量出土した。土器以外には、土製品（土錘、輪羽口、支脚）、石製品（砥石）、鉄製品（刀子・釘・鍵）がある。

なお、中世土師器皿については本書第5章第2節や森隆氏（森2003・2005）の分類を、珠洲については吉岡康暢氏（吉岡1994）、中国製磁器については山本信夫氏（山本2000）の研究成果を援用した。

2. 構造出土遺物

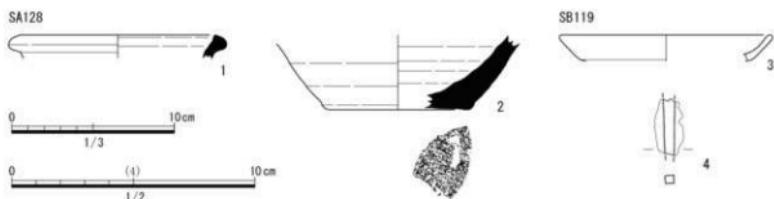
SA128（第16図）1は小型の須恵器広口壺で、口縁部は玉縁状になる。復元口径12.0cmである。2は珠洲の鉢で回転糸切りの底部である。内面のロクロ目が強く、鉗目はない。珠洲Ⅰ期のものである。いずれもSP55から出土した。

SB119（第16図）3はSP20から出土した中世土師器の皿である。手捏ね成形で、E1類である。4はSP07から出土した鉄釘である。

SK21（第17図）5～14は中世土師器の皿である。14を除いて手捏ね成形である。C2a類（10）、C2b類（8・9）、D2類（12・13）、F2類（11）などがあり、13世紀後半が主体である。ロクロ成形RA類で底径の大きい14も同時期である。口径6.0cm代の小皿5～7はC1類で、12世紀後半の混入品である。15～17は管状の土錘である。18は鉄製の刀子、19は鉄釘である。

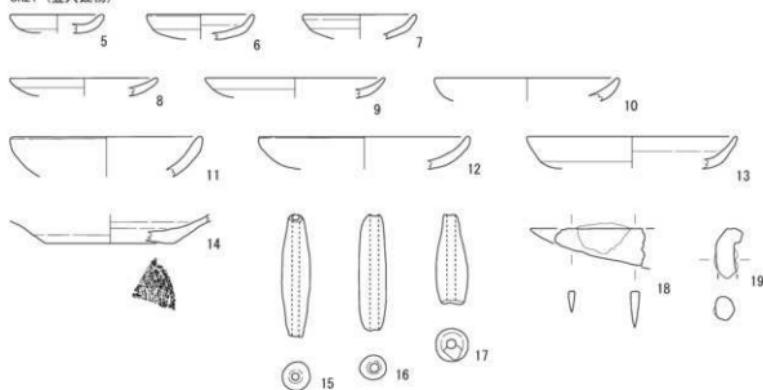
SK85（第17図）20～27は中世土師器の皿、28が内黒の椀である。20～25は手捏ね成形で、B類（20）、C1類（22・25）、C2a類（21・23）、E1類（24）などがある。13世紀初頭のものである。26～28はロクロ成形で、26・27はRA類、28は内黒のRD類である。24の口縁部内面には煤が、27の外側には油煙付着の痕跡がある。28は胎土に海綿骨針を含む。29・30は珠洲である。29は薄手で、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を方頭状に仕上げる鉢である。30は口縁部の内端を嘴頭状に弱く突出させる壺である。いずれも珠洲Ⅱ期のものである。31～33は管状の土錘である。34は輪羽口である。推定径8.0cm、孔径3.0cmほどである。

SK86（第17図）35～39は中世土師器の皿で、手捏ね成形である。B類（35）、C1類（37）、D2類（38）、E2類（36・39）があり、13世紀前半のものである。40は珠洲の壺である。胴部に縦方向の櫛目文を

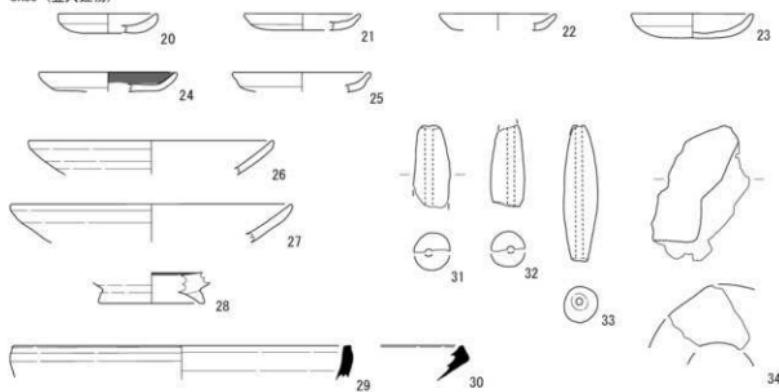


第16図 SA128・SB119 遺物図

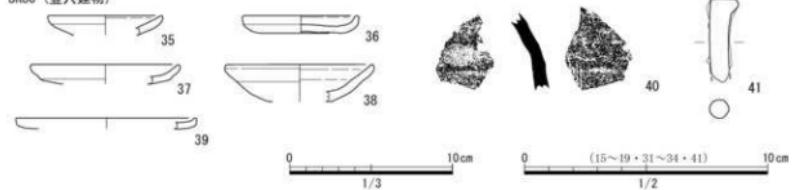
SK21 (整穴建物)



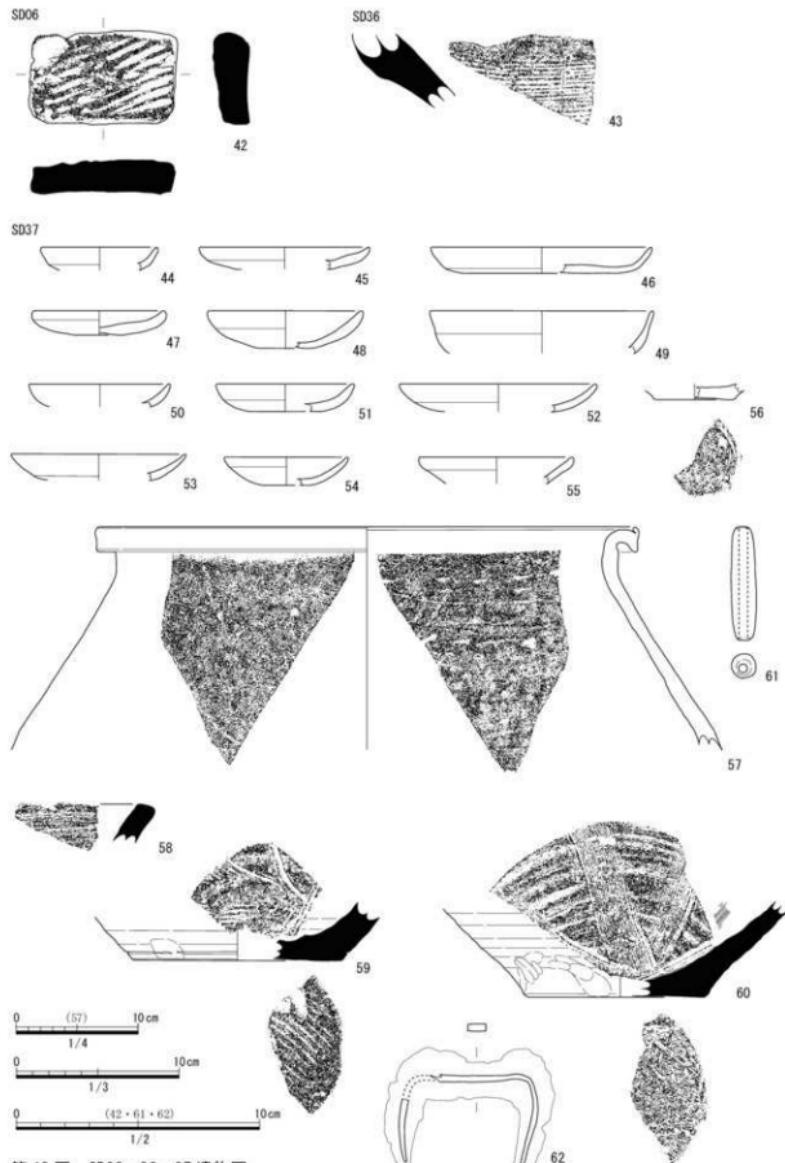
SK85 (整穴建物)



SK86 (整穴建物)



第17図 SK21・85・86遺物図



第18図 SD06・36・37遺物図

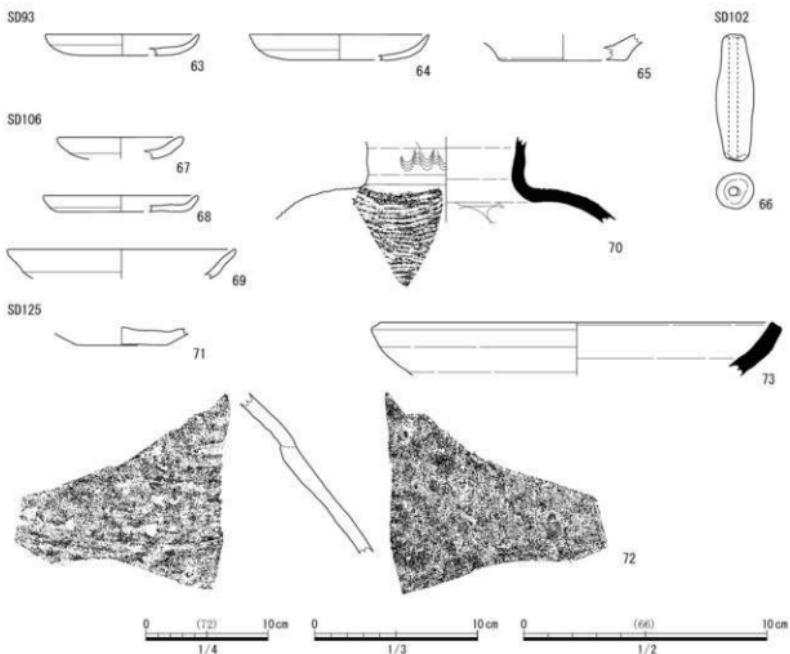
施す。珠洲II期のものである。41は鉄釘である。

SD06 (第18図) 42は珠洲の甕である。6.0×4.0cmほどの長方形の胴部片を砥石のような研磨具に転用したものである。表面の叩きの凸部や長辺側の側縁が磨り減る。胎土に海綿骨針を含む。珠洲の転用砥は、糸魚川市竹花遺跡、上越市用言寺遺跡など新潟県の中世遺跡で多く確認される。

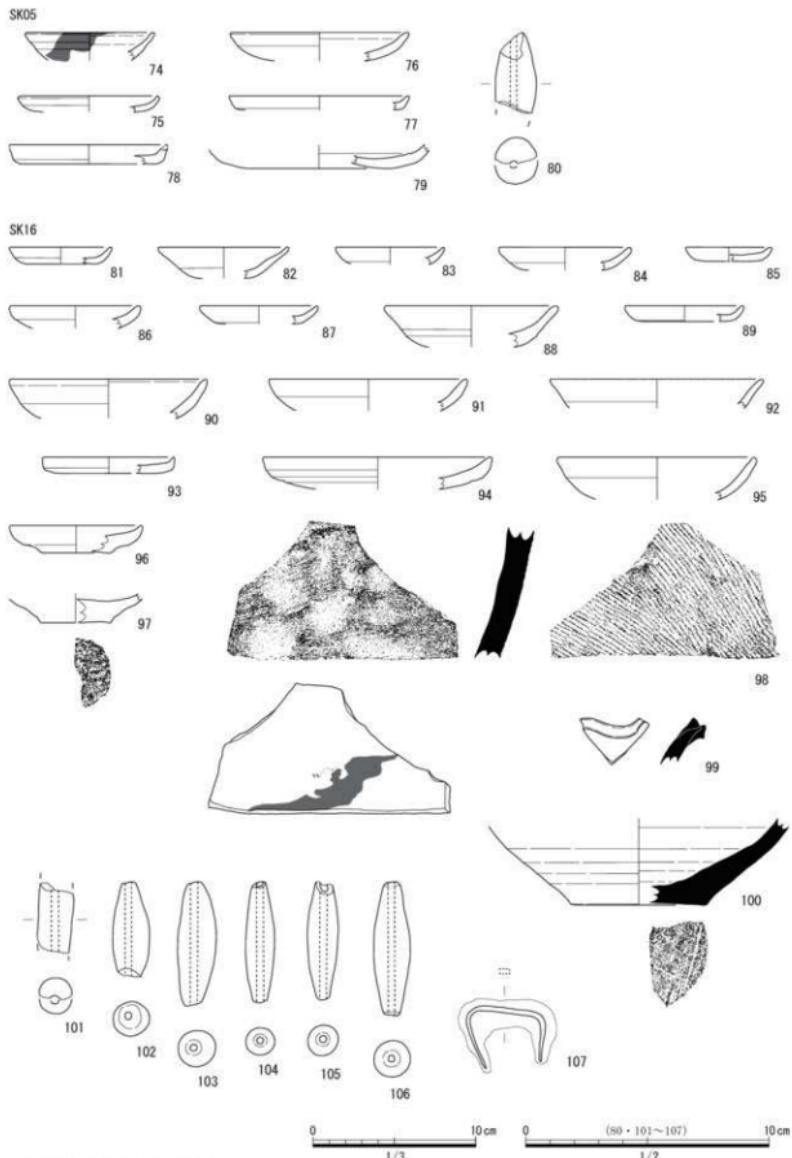
SD36 (第18図) 43は珠洲の甕である。厚みがあり、頸基部直下の叩きはナデ消される。

SD37 (第18図) 44～56は中世土師器の皿である。ロクロ成形 RB類の56以外は手捏ね成形である。B類(47)、C1類(44)、C2a類(50～53)、C2b類(54・55)、D1類(45)、D2類(49)、E1類(46)、F2類(48)などがある。44～47・56はSD37の古段階(12世紀末～13世紀前半)、48・49・51は中段階(13世紀中頃)、52～55は新段階(14世紀前半)に位置づけられる。57は八尾の甕で、SD37新段階の土層から出土した。N字状口縁を呈する。肩部は外面が板状具ナデ、内面はナデであるが、内外面ともに粘土継ぎ目と指頭痕を残す。内外面褐色で、断面は灰色である。14世紀前半のもの。58～60は珠洲の擂鉢である。58の口縁部は外傾し、端部は方頭を呈する。59・60は静止糸切りの底部で、60の体部割れ口には漆継ぎの痕跡がある。58・59は胎土に海綿骨針を含む。58・59は珠洲II期、60は珠洲IV期に比定される。61は管状の土錘で、寸胴型である。62は鉄製品の鎌である。

SD93 (第19図) 63～65は中世土師器の皿である。63・64は手捏ね成形でC2a類、65はロクロ成形のRA類である。



第19図 SD93・102・106・125 遺物図



第20図 SK05・16遺物図

SD102 (第19図) 66は管状の土錐である。

SD106 (第19図) 67～69は中世土師器の皿である。手捏ね成形である。C1類(67)、E1類(68)、D2類(69)がある。70は珠洲の壺である。叩打成形の壺で、頸基部の一段下がった位置から平行叩きを施す。頸部に4条の櫛目波状文を施す。珠洲II期のものである。

SD125 (第19図) 71はSD125古段階の底面から出土した中世土師器の皿である。ロクロ成形のRB類である。全体に摩滅するが、内面のロクロ目が明瞭に残る。13世紀前半のもの。72は八尾の甕の胴部片である。板状具によるナデ調整を内面横方向、外縁方向に施す。色調は内外赤褐色で、断面は灰色である。73は珠洲の片口鉢で、口縁部は内湾し端部が方頭状になる。胎土に海綿骨針を含む。珠洲II期のもので、SD125古段階に帰属する。

SK05 (第20図) 74～79は中世の土師器皿で、手捏ね成形である。C1類(76)、C2a類(75)、E1類(78)、E2類(77)、E3類(74)がある。13世紀前半のもので、本来はSK86に帰属するものである。76・78は見込みに刷毛状のナデがみられる。74の口縁部内外面には煤が付着する。80は管状の土錐である。

SK16 (第20図) 81～97は中世の土師器皿である。81～95は手捏ね成形である。96・97はロクロ成形で、97は底部に回転糸切り痕を残す。A類(95)、C1類(81)、C2a類(83・89)、C2c類(86・93)、D1類(85)、D2類(88・90)、E1類(82・84)、E2類(87)、E3類(94)、F2類(91・92)、RC2類(96・97)などがある。85・95・96は13世紀初頭、87・90・91・93は13世紀前半のもので、それぞれSK16と重複するSK85、SK61に帰属するものと判断される。83・86は14世紀前半のもので、SK16はその時期の遺構と考えられる。98～100は珠洲である。98は甕の胴部片で、内面から割れ口にかけて煤が付着する。99は片口鉢の口縁部で、端部は内側を嘴頭状に弱く突出させる。珠洲I期のものである。100は御目(御目)のない鉢で、ロクロ目が強く、底部は静止糸切りである。I期のものである。98・100は胎土に海綿骨針を含む。101～106は管状の土錐、107は鉄製品の鎧である。

SK43 (第21図) 108は白磁の皿である。体部から口縁部が直線的に開き、口縁端部を釉剥ぎする口禿げのものである。白磁釉が厚く掛かる。太宰府F期の白磁皿IX類(13世紀後半)にあたる。

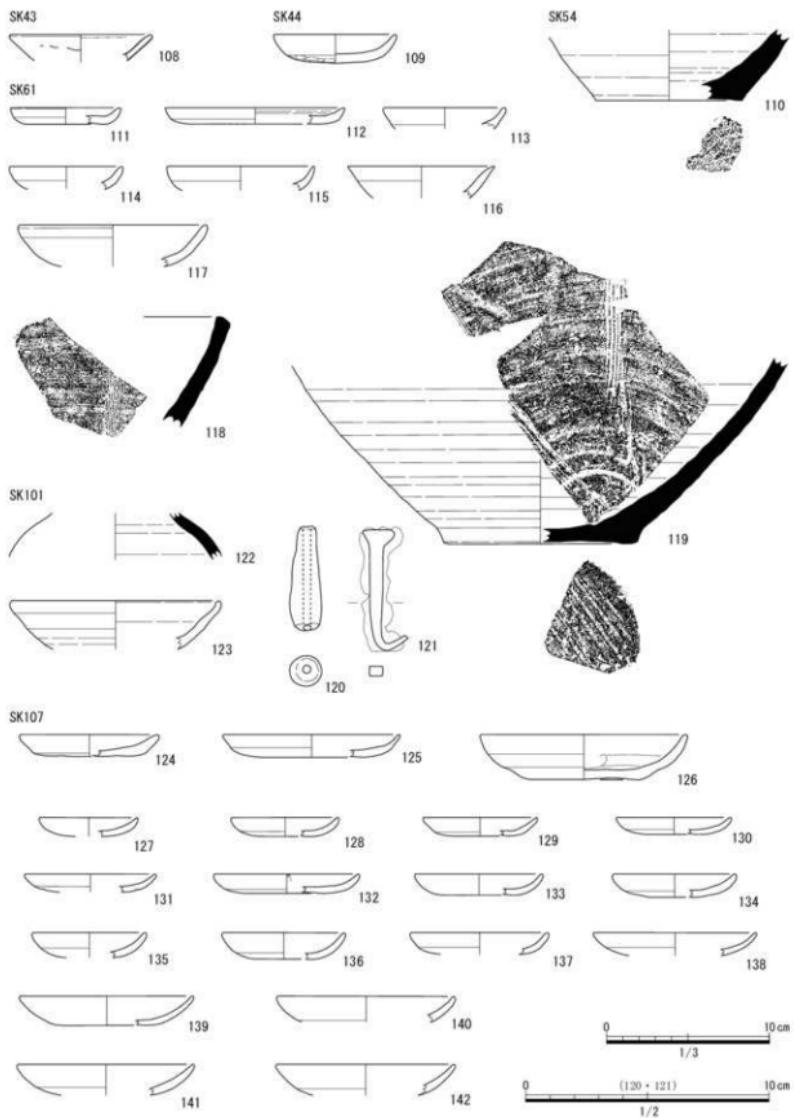
SK44 (第21図) 109は手捏ね成形の中世土師器皿である。C1類で、13世紀後半のものである。

SK54 (第21図) 110は御目(御目)のない珠洲の鉢である。内面のロクロ目が強く、底部は回転糸切りである。胎土に海綿骨針を含む。珠洲I期のものである。

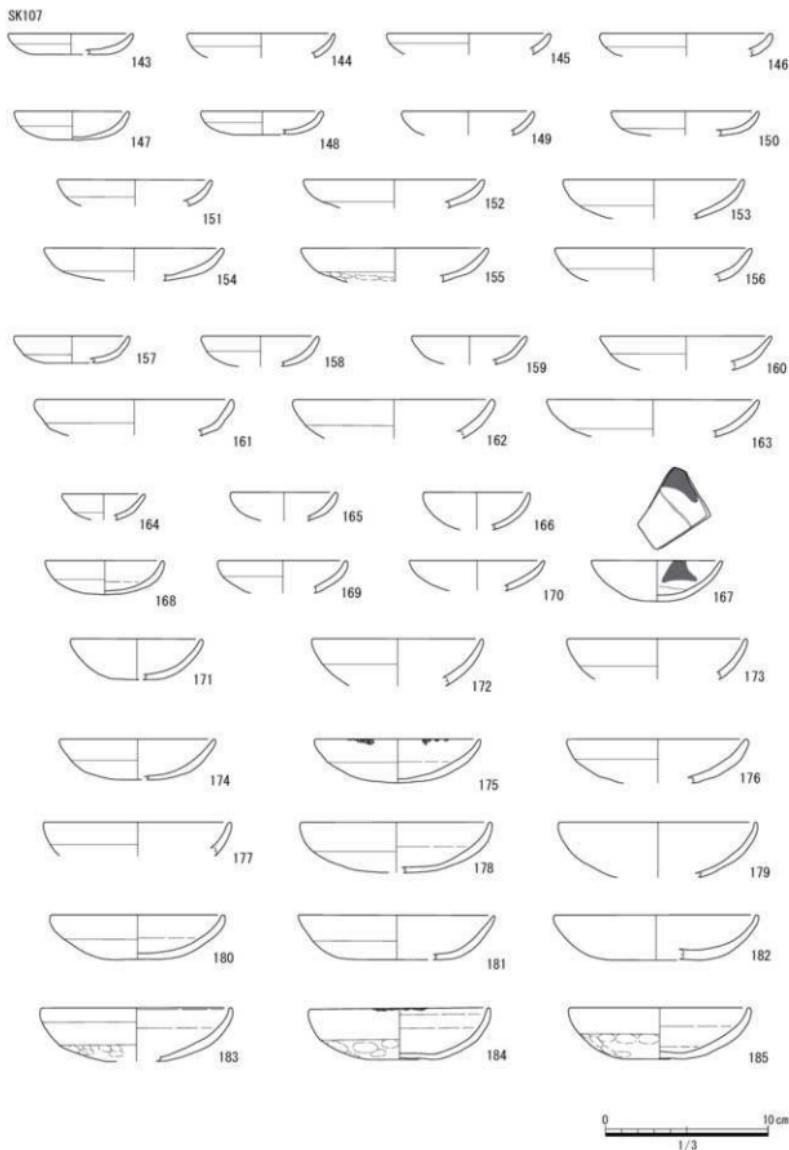
SK61 (第21図) 111～117は中世土師器の皿である。手捏ね成形である。C1類(114)、C2a類(115)、E1類(113)、E2類(111・112)、E3類(116)、F2類(117)があり、13世紀前半にまとまる。111・116の見込みには刷毛状ナデが施される。118・119は珠洲の擂鉢である。118は口縁が内湾気味に立ち上がり、端部を方頭状に仕上げる。13条の御目が浅く施される。珠洲II期のもの。119はロクロ目が強く、底部が静止糸切りで、6条の御目がまばらに入る。底部内面は使用により顕著に摩耗する。珠洲II期のもの。118・119は胎土に海綿骨針を含む。120は管状の土錐、121は鉄釘である。

SK101 (第21図) 122は須恵器壺で、古代遺物の混入である。123は中世土師器の皿で、ロクロ成形のRA類である。14世紀初頭のものである。

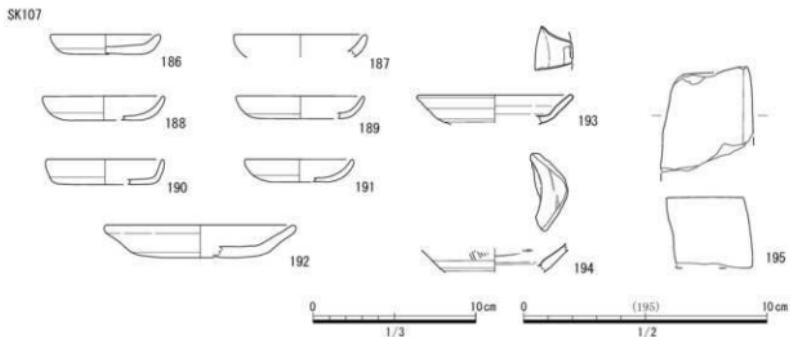
SK107 (第21～23図) 124～192は中世土師器の皿である。126はA類で、口径12.6cmの大皿である。147～156はC1類、125・127～142はC2a類、143～146はC2b類、186・187はC2c類である。174～179はD2類、124・188～191はE1類、157～163はE3類である。164～173はF1類、180～185はF2類である。内面に逆「の」字状ナデを施すのは147・175・178・184・185である。13世紀後半にまとまりがあるが、124～126は12世紀末まで遡り、重複するSD125古段階からの混入と判断される。167の内面には煤と灯芯痕が、175・184の口縁部内外面には油煙が確認される。



第21図 SK43・44・54・61・101・107 遺物図



第22図 SK107遺物図



第23図 SK107遺物図

193・194は同安窯の青磁である。193は体部が屈曲し口縁部がわずかに外反して開く皿で、内定面に櫛描文を施す。全面施釉。太宰府D期の皿I-1b類に相当する。194は楕の体部で、内外面に櫛描文を施す。外面は無釉である。太宰府D期の楕I-1c類に相当する。195は流紋岩製の砥石である。

SP08(第24図) 196は中世土師器の皿である。口径6.1cmの小皿である。

SP22(第24図) 197は卸目のない珠洲の鉢である。ロクロ目がやや強く、口縁端部は内側を嘴頭状に突出させる。胎土に海綿骨針を含む。珠洲I期のものである。

SP23(第24図) 198は中世土師器の皿で、手捏ね成形のC2a類である。12世紀後半のもの。199・200は卸目のない珠洲の片口鉢である。ともに口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は方頭を呈する。胎土に海綿骨針を含む。珠洲I期のものである。201・202は龍泉窯の青磁である。201は満巻状の文様を、202は花文を施文する楕で、釉調はオリーブ黄色である。202は底部と体部の境に稜をもち、高台外面を面取りする。高台の下端から内側は露胎となる。ともに太宰府D期の楕I類。

SP34(第24図) 203は中世土師器の皿で、ロクロ成形のRB類である。口径7.4cmで、厚みがある。

SP56(第24図) 204は中世土師器の皿で、手捏ね成形である。C2a類である。

SP84(第24図) 205は中世土師器の皿で、ロクロ成形のRC2類である。歪みの大きい口縁部は口径8.0cmで、厚みがある。底部に回転糸切り痕が残る。13世紀前半のものである。

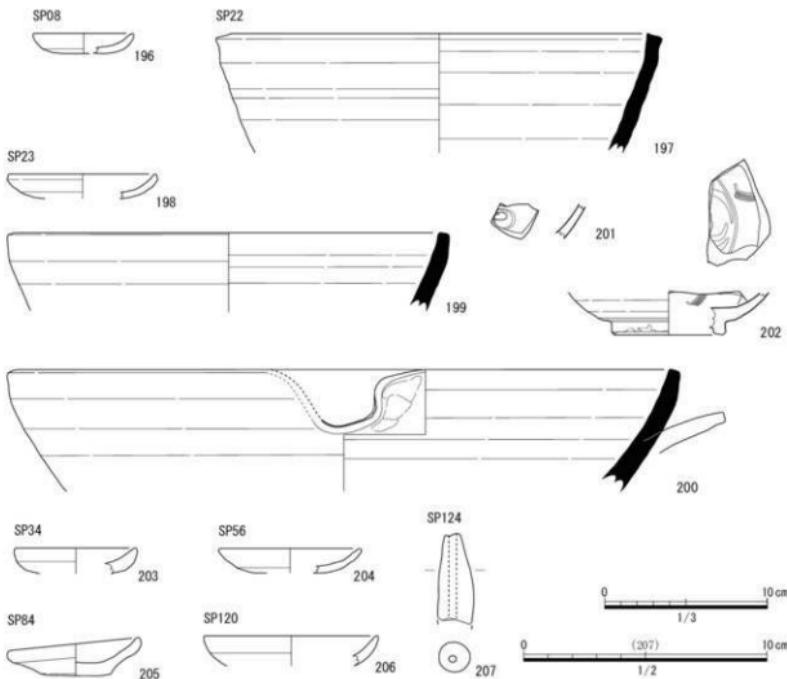
SP120(第24図) 206は中世土師器の皿で、手捏ね成形である。C2c類である。

SP124(第24図) 207は管状の土錘である。

3. 包含層出土遺物

中世の遺物包含層であるVII層から出土したものである(第25図)。調査区北東部と北西部に多い。

208～212は中世土師器の皿で、手捏ね成形である。209がC1類、211・212がC2a類、208がE2類である。210はH2類で中世後期のものである。213～218は珠洲である。213は甌で、口縁端部を鋭く屈曲、垂下させる。珠洲II期に比定される。214～218は鉢である。214は外傾し、口縁部の端面を広くとる方頭を呈し、卸目は8条以上である。珠洲III期のものである。215はやや薄手で卸目が



第24図 SP08・22・23・34・56・84・120・124遺物図

なく、口縁部は内端を嘴頭状に弱く突出させる。珠洲II期のものである。216は御目が8条以上の体部である。217は10条の御目を密に施す体部である。218は底径12cmで、切り離しは静止糸切りである。内面には13条の櫛歯原体による曲線文を装飾的に施す。珠洲I期のものである。なお217を除き、いずれも胎土に海綿骨針を含む。219・220は管状の土錘である。221は支脚と思われる土製品である。粘土塊を手で握るように成形され、底面は指押さえによって概ね平坦に仕上げる。高さ6.7cmである。二次被熱がみられる。古代の遺物と考えられる。222は粘板岩製の砥石である。厚さ0.7cmで、残存する全面に研磨痕がみられる。

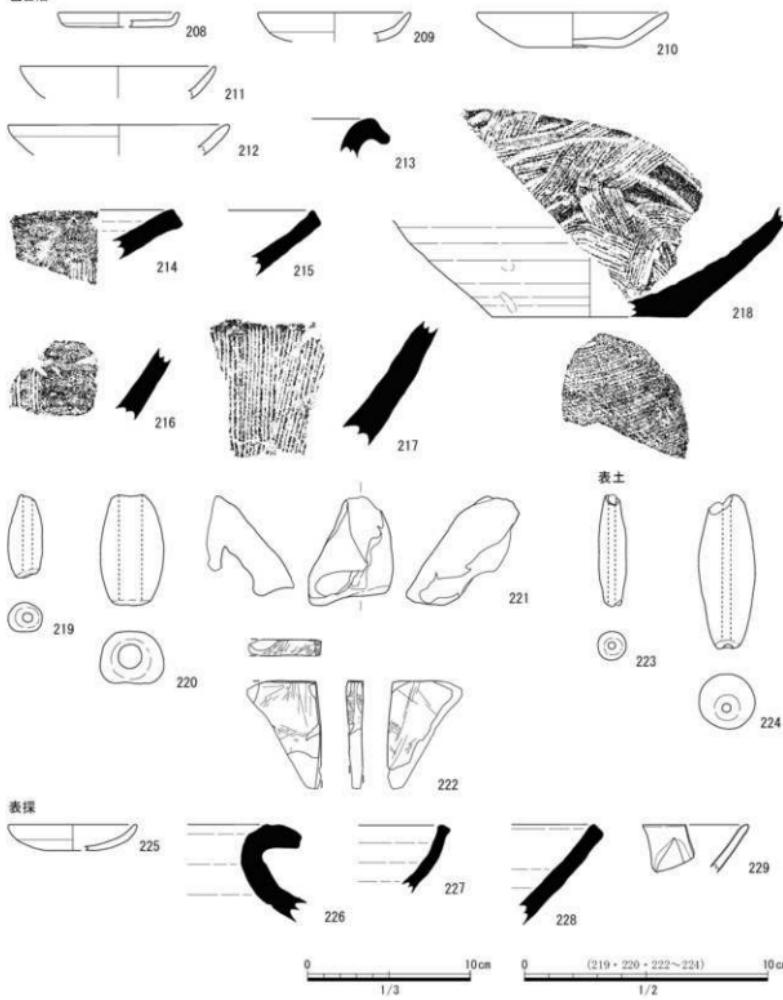
4. 表土出土遺物・表採遺物

223・224は表土中で出土した管状の土錘である（第25図）。

225～229は旧ブルール跡地周辺で表採した遺物である（第25図）。225は中世土師器の皿で、口縁部が内湾気味に立ち上がり、底部は薄手である。226～228は珠洲である。226は甕で、コの字状に強く外反する口頸部から、口縁部は水平に挽き出し先端を舌端状とする。227・228は御目がない

鉢である。227は薄手でロクロ目が強く、内湾氣味に立ち上がる口縁の端部は弱い嘴頭状を呈する。228はロクロ目が強く、外傾する口縁部は方頭となる。226・227は珠洲Ⅰ期で、胎土に海綿骨針を含む。228は珠洲Ⅱ期のものである。229は龍泉窯の青磁碗である。口縁部は直線的に開き、体部に鑄のない蓮弁文を施す。太宰府分類の楕IV類である。

包含層



第25図 包含層・表土・表探遺物図

第3表 遺物観察表(1)

番号	出土遺構層位	種類	器種	法量(cm) (は推定値)			胎土	焼成	色調	成形・調整		備考	
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)				内面	外面		
1	SA128	須恵器	広口壺	(12.0)	-	-	良	良	灰 NS/	ロクロナデ	ロクロナデ	SP55	
2	SA128	珠洲	鉢	-	(9.0)	-	普通 骨針	普通	灰 7.5H6/1	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	SP55, 珠洲Ⅰ期	
3	SB119	土師器	皿	(13.0)	-	-	良	良	灰白 10H8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	SP20, E1類	
4	SB119	鉄製品	釘	残長2.4	残幅0.5	残厚0.3	断面方形						SP97, 重さ3.26g
5	SK21	土師器	皿	(5.6)	-	-	良	良	にぶい橙 7.5H7/3		体部指頭痕	C1類	
6	SK21	土師器	皿	(6.4)	-	-	良	良	浅黄橙 7.5H8/3		指頭痕	C1類	
7	SK21	土師器	皿	(6.8)	-	-	良	良	にぶい橙 7.5H7/4	ヨコナデ	ヨコナデ	C1類	
8	SK21	土師器	皿	(9.0)	-	-	普通 赤色粒	普通	にぶい橙 7.5H7/4			C2b類	
9	SK21	土師器	皿	(11.0)	-	-	良	良	灰白 10H8/2	刷毛状ナデ		C2b類	
10	SK21	土師器	皿	(11.2)	-	-	良	良	にぶい黄橙 10H7/3	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類	
11	SK21	土師器	皿	(11.6)	-	-	良	良	灰白 10H8/2		ヨコナデ、体部 指頭痕	F2類	
12	SK21	土師器	皿	(12.8)	-	-	良	良	橙 2.5H6/6	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	D2類	
13	SK21	土師器	皿	(12.8)	-	-	良 褐色粒	良	浅黄橙 7.5H8/3	刷毛状ナデ		D2類	
14	SK21	土師器	皿	-	(8.0)	-	良	良	浅黄橙 10H8/3	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	RA類	
15	SK21	土製品	土鍤	残5.00	1.15	1.20	良 骨針	良	黒褐 2.5H3/1	上端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.3cm、重さ5.51g	
16	SK21	土製品	土鍤	4.75	1.10	1.00	良	良	にぶい黄橙 10H7/3	充形、ナデ		孔径0.35cm、重さ5.24g	
17	SK21	土製品	土鍤	3.70	1.30	1.40	良	良	にぶい黄橙 10H7/2	ほぼ完形、指押さえ・ナデ		孔径0.35cm、重さ4.36g	
18	SK21	鉄製品	刀子	残長3.7	残幅1.5	残厚0.4	断面三角形						重さ4.05g
19	SK21	鉄製品	釘	残長2.1	残幅0.8	残厚1.0	鍛標れで断面不明						重さ1.85g
20	SK85	土師器	皿	(6.0)	-	-	良	良	浅黄橙 7.5H8/4	刷毛状ナデ ヨコナデ、体部	ヨコナデ	B類	
21	SK85	土師器	皿	(7.0)	-	-	良 赤色粒	良	浅黄橙 7.5H8/3	「の」字状ナデ抜 き	ヨコナデ	C2a類	
22	SK85	土師器	皿	(7.0)	-	-	良	良	浅黄橙 10H8/3			C1類	
23	SK85	土師器	皿	(7.4)	-	-	良 赤色粒	良	浅黄橙 7.5H8/3	ナデ	指頭痕	C2a類	
24	SK85	土師器	皿	(8.4)	-	-	良	良	灰白 10H8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 ～底部指頭痕	E1類、口縁部内面に煤付着	
25	SK85	土師器	皿	(8.4)	-	-	良	良	にぶい黄橙 10H7/3		指頭痕	C1類	
26	SK85	土師器	皿	(15.0)	-	-	良	良	灰黃褐 10H6/2	ロクロナデ	ロクロナデ	RA類	
27	SK85	土師器	皿	(17.2)	-	-	良	良	灰白 10H8/2	ロクロナデ	ロクロナデ	RA類、口縁部外間に油煙の痕跡	
28	SK85	土師器	碗	-	(6.2)	-	良 骨針	良	にぶい橙 7.5H6/3	ロクロナデ	ロクロナデ	RD類、内黒	
29	SK85	珠洲	片口鉢	(20.6)	-	-	良 骨針	良	灰 5H4/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅱ期(口縁b1類)	
30	SK85	珠洲	壺	-	-	-	良	普通	灰白 2.5H8/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅰ期	
31	SK85	土製品	土鍤	残3.35	1.45	-	良	良	黒褐2.5H3/1	下端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ3.48g	
32	SK85	土製品	土鍤	残3.30	1.35	-	良	良	黒褐2.5H3/1	上端欠損、ナデ		孔径0.30cm、重さ3.26g	
33	SK85	土製品	土鍤	5.55	1.35	1.50	良	良	灰白2.5H8/2	ほぼ完形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ9.11g	
34	SK85	土製品	輪羽口	残5.55	-	-	普通	普通	灰オリーブ 5H5/3	外側発泡と一部ガラス質化			

第4表 遺物観察表(2)

番号	出土遺構 位置	種類	器種	法量(cm) ()は推定値			焼土	焼成	色調	成形・調整		備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)				内面	外面	
35	SK86	土師器	皿	(7.0)	-	-	良	良	淡黄褐 10YR8/3	ヨコナデ 体部指頭痕	B類	
36	SK86	土師器	皿	(7.0)	-	-	良	良	淡黄褐 10YR8/3	ヨコナデ ヨコナデ、体部 ～底部指頭痕	E2類	
37	SK86	土師器	皿	(9.0)	-	-	良	普通	褐 5YR6/6	ヨコナデ	C1類	
38	SK86	土師器	皿	(9.0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部 指頭痕	B2類	
39	SK86	土師器	皿	(11.0)	-	-	良	良	にぶい黄褐 10YR7/3	ヨコナデ	E2類	
40	SK86	珠洲	蓋	-	-	-	普通	良	灰 NS/	ロクロナデ 脚部欄目文	珠洲Ⅱ期	
41	鉄製品	釘	残長3.6 残幅1.1 残厚0.8	3.6	1.1	0.8	結晶化で断面不明				重さ4.10g	
42	SD06	珠洲 (転用瓶)	甕	長3.9	幅6.1	厚1.4	良 骨針	良	黄灰 2.5Y6/1	無文當て具	平行タタキ	外面部の中央と側縁が使用により摩滅
43	SD06	珠洲	甕	-	-	-	良	良	黄灰 2.5Y4/1	ナデ、肩部無文 當て具	ナデ、肩部平行 叩き	外面部自然軸
44	SD07	土師器	皿	(7.0)	-	-	良	良	灰白10YR8/2			C1類, SD07古段階
45	SD07	土師器	皿	(10.4)	-	-	良	普通	にぶい黄褐 10YR7/2	ヨコナデ、体部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、体部 刷毛状痕	D1類, SD07古段階
46	SD07	土師器	皿	(13.5)	-	1.6	良	普通	灰白 2.5Y8/1		底部指頭痕	E1類, SD07古段階
47	SD07	土師器	皿	(8.0)	-	1.5	良	普通	にぶい褐 7.5YR7/4		ヨコナデ	B類, SD07古段階
48	SD07	土師器	皿	(9.4)	-	2.3	良	良	灰白 10YR8/2	刷毛状ナデ	体部～底部指頭痕	F2類, SD07中段階
49	SD07	土師器	皿	(13.6)	-	-	良	普通	にぶい褐 7.5YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	B2類, SD07中段階
50	SD07	土師器	皿	(8.6)	-	-	良	良	灰白10YR8/2			C2a類, SD07中段階
51	SD07	土師器	皿	(8.4)	-	1.7	良	良	にぶい黄褐 10YR7/3		ヨコナデ	C2a類, SD07中段階
52	SD07	土師器	皿	(12.0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部 刷毛状ナデ	ヨコナデ	C2a類, SD07新段階
53	SD07	土師器	皿	(10.7)	-	-	良	良	淡黄壁10YR8/3			C2a類, SD07新段階
54	SD07	土師器	皿	(7.6)	-	1.75	良	良	灰白 2.5Y8/2			C2a類, SD07新段階
55	SD07	土師器	皿	(9.4)	-	-	良	普通	灰白10YR8/2			C2b類, SD07新段階
56	SD07	土師器	皿	-	(4.8)	-	普通	良	褐 7.5YR7/6	ロクロナデ	ロクロナデ、 底部凹輪系切り	BB類, SD07古段階
57	SD07	八尾	甕	(43.8)	-	-	精良	精良	褐 7.5YR7/4	ヨコナデ、肩部 下半ナデ	ヨコナデ、肩部 下半板状具	14c前半～中頃、京ヶ峰2群, SD07新 段階
58	SD07	珠洲	鉢	-	-	-	良 骨針	良	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲Ⅱ期(1)SD07古段階
59	SD07	珠洲	擂鉢	-	(12.6)	-	良 骨針	良	灰 NS/	ロクロナデ。鉢 自7条	ロクロナデ、底 部静止系切り	珠洲Ⅱ期, SD07古段階
60	SD07	珠洲	擂鉢	-	(11.4)	-	良	良	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ。体 部下端指頭痕、 底部静止系切り 後に欄状具ナデ	断面に漆黒銀の痕跡 珠洲Ⅱ期, SD07新段階	
61	SD07	土製品	土鍋	4.65	1.0	1.0	良	良	灰白10YR8/2	完形、ナデ		孔径0.40cm、重さ4.77g
62	SD07	鉄製品	鍔	横幅5.6 縱幅5.7	厚さ0.3	断面長方形						重さ36.08g
63	SD093	土師器	皿	(9.4)	-	1.3	良	良	にぶい黄褐 10YR7/3	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類
64	SD093	土師器	皿	(11.0)	-	1.55	良	良	淡黄褐 10YR8/3		ヨコナデ、体部 ～底部指頭痕	C2a類
65	SD093	土師器	皿	-	(7.6)	-	良	良	にぶい黄褐 10YR7/3			EA類
66	SD102	土製品	土鍋	5.20	1.50	1.50	良	良	黒褐2.5Y3/1	ほぼ完形、指押さ・ナデ		孔径0.35cm、重さ10.36g
67	SD106	土師器	皿	(7.6)	-	-	良	良	灰白 2.5Y8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C1類
68	SD106	土師器	皿	(9.4)	-	1.0	良	良	にぶい黄褐 10YR7/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 ～底部指頭痕	E1類

第5表 遺物観察表(3)

番号	出土遺構層位	種類	器種	法量(cm) ()は推定値			胎土	焼成	色調	成形・調整		備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)				内面	外面	
69	SD106	土師器	皿	(14.0)	-	-	普通	普通	にぶい橙 7.5H8.4			D2類
70	SD106	珠洲	蓋	-	-	-	良	良	灰 NS/	頸部口クロナデ・ 柄部無文当て具痕	頸部口クロナデ・ 柄部或其文、側部平行引き	珠洲II期、外面自然釉
71	SD125	土師器	皿	-	5.4	-	良	良	にぶい黄橙 10W8.7/2	ロクロナデ	ロクロナデ	RB類、SD125古段階
72	SD125	八尾	甕	-	-	-	良	良	灰 NS/	横方向の板状具 ナデ	横方向の板状具 ナデ	
73	SD125	珠洲	片口鉢	(24.0)	-	-	良 骨針	良	灰 NS/	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲II期(口縁bt型)、SD125古段階
74	SK05	土師器	皿	(7.8)	-	-	良	良	概灰 10W4.1	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	E3類、口縁部内外面に煤付着
75	SK05	土師器	皿	(8.4)	-	-	良	良	にぶい橙 7.5H8.7/3	ヨコナデ	ヨコナデ、底部 指頭痕	C2a類
76	SK05	土師器	皿	(9.6)	(8.4)	-	良	良	灰白 10W8.8/2	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部 指頭痕	C1類
77	SK05	土師器	皿	(10.8)	-	-	良	良	灰白 10W8.2/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	E2類
78	SK05	土師器	皿	(11.0)	-	-	良	良	浅黄橙 7.5H8.8/4	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部 指頭痕	E1類
79	SK05	土師器	皿	-	-	-	良 骨針	良	浅黄橙 7.5H8.8/4	ヨコナデ、底部 ナデ	ヨコナデ、体部～ 底部指頭痕・ナデ	
80	SK05	土製品	土舞	残.3.30	1.70	-	良	良	黒灰2.5H3.1	両端欠損		孔径0.30cm、重さ4.72g
81	SK16	土師器	皿	(5.2)	-	-	良	良	浅黄橙 7.5H8.8/4	ヨコナデ	ヨコナデ	C1類
82	SK16	土師器	皿	(6.2)	-	1.05	良	良	にぶい黄橙 10W8.7/3	「ノ」字状ナデ抜 き	ヨコナデ、底部 指頭痕	E1類
83	SK16	土師器	皿	(6.6)	-	-	-	-	にぶい黄橙 10W8.7/4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類
84	SK16	土師器	皿	(7.2)	-	0.95	良	良	にぶい黄橙 10W8.7/2	粘土斑痕		E1類
85	SK16	土師器	皿	(7.2)	-	-	良	良	橙 5W8.7/6	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	D1類
86	SK16	土師器	皿	(7.8)	-	-	良	良	浅黄橙 10W8.8/3	ヨコナデ	ヨコナデ	C2c類
87	SK16	土師器	皿	(8.0)	(6.0)	1.0	良	良	橙 5W8.7/6	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部 指頭痕	E2類
88	SK16	土師器	皿	(8.0)	-	-	良	良	にぶい橙 7.5H8.7/4			B2類
89	SK16	土師器	皿	(8.0)	-	-	良	良	にぶい黄橙 10W8.7/3			C2a類
90	SK16	土師器	皿	(10.5)	-	-	良	良	灰白 10W8.8/2	ヨコナデ、体部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	D2類
91	SK16	土師器	皿	(12.0)	-	-	良	良	にぶい橙 7.5H8.7/4	ヨコナデ、体部 ナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	F2類
92	SK16	土師器	皿	(12.0)					灰白 2.5H8.2/			F2類
93	SK16	土師器	皿	(12.0)					浅黄橙 7.5H8.8/4			C2c類
94	SK16	土師器	皿	(13.0)	-	-	良	普通	にぶい黄橙 10W8.7/4	ヨコナデ	ヨコナデ	E3類
95	SK16	土師器	皿	(14.0)	-	-	普通	良	浅黄橙 10W8.8/4	ヨコナデ、体部 ナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	A類
96	SK16	土師器	皿	(8.0)	(4.2)	1.7	良	良	浅黄橙 10W8.8/3	ロクロナデ	ロクロナデ	RC2類
97	SK16	土師器	皿	-	(4.30)	-	良	良	浅黄橙 10W8.8/3	ロクロナデ	ロクロナデ、底 部回転斜切り	RC2類
98	SK16	珠洲	甕	-	-	-	良 骨針	良	灰 NS/	無文当て具痕	平行引き	内面と断面に煤付着
99	SK16	珠洲	片口鉢	-	-	-	良	良	灰 NS/	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲I期
100	SK16	珠洲	鉢	-	(8.4)	-	良 骨針	良	灰 NS/	ロクロナデ	ロクロナデ、底 部静止斜切り	珠洲I期 内外面自然釉

第6表 遺物観察表(4)

番号	出土構造位	種類	器種	法量(cm) ()は推定値			焼土	焼成	色調	成形・調整		備考				
				口径 (長径)	底径 (幅)	器高 (厚さ)				内面	外面					
										外縁	底縁					
101	SK16	土製品	土鍤	残2.85	1.35	-	良	良	褐灰 10YR4/1	両端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ4.06g				
102	SK16	土製品	土鍤	残3.90	1.45	1.40	良	良	黒褐色 2.5YR5/6	下端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ7.02g				
103	SK16	土製品	土鍤	5.10	1.60	1.50	良	良	明赤褐色 2.5YR5/6	完形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ10.26g				
104	SK16	土製品	土鍤	4.95	1.15	1.10	良	良	褐灰 10YR4/1	完形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ5.34g				
105	SK16	土製品	土鍤	残4.85	1.25	1.25	良	良	褐灰 10YR4/1	上端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ5.67g				
106	SK16	土製品	土鍤	5.45	1.50	1.50	良	良	にごり黄褐色 10YR7/4	完形、指押さえ・ナデ		孔径0.25cm、重さ9.94g				
107	SK16	鉄製品	鍔	横幅3.6	縱幅2.6	-				錆止めのため断面不明		重さ8.41g				
108	SK43	白磁	皿	(8.6)	-	-	精良	良	灰白 10YR8/1	口縁端部釉剥落(口禿)		13c後半~14c前半 白磁Ⅳ類				
109	SK44	土師器	皿	(7.4)	-	1.8	良	良	淡黃褐色 7.5YR8/4	ヨコナデ、底部 赤色粒	ヨコナデ、体部 底部指頭痕	C1類				
110	SK54	珠洲	鉢	-	(9.0)	-	良	骨針	灰 5Y/1	ロクロナデ	ロクロナデ、底 部削除系切り	珠洲I期				
111	SK61	土師器	皿	(6.6)	-	-	良	良	淡黄褐色 7.5YR8/4	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	E2類				
112	SK61	土師器	皿	(11.0)	-	-	良	良	淡黄褐色 7.5YR8/4	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	E2類				
113	SK61	土師器	皿	(7.4)	-	-	良	良	にごり黄褐色 10YR8/3	ヨコナデ	ヨコナデ					
114	SK61	土師器	皿	(6.8)	-	-	良	普通	淡黄褐色 7.5YR8/4			C1類				
115	SK61	土師器	皿	(9.0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類				
116	SK61	土師器	皿	(9.0)	-	-	良	骨針	灰白 5Y/1	ヨコナデ		E3類				
117	SK61	土師器	皿	(11.4)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部 赤色粒	ヨコナデ、体部 指頭痕	F2類				
118	SK61	珠洲	片口鉢	-	-	-	良	骨針	灰白 5Y/1	ロクロナデ、即 日13条	ロクロナデ	珠洲II期(口縁b1型)				
119	SK61	珠洲	鉢	-	(12.0)	-	良	普通	灰褐色 2.5Y/7	ロクロナデ、即 日6条	ロクロナデ、底 部静止系切り	底部内面は使用により摩耗 珠洲II期				
120	SK61	土製品	土鍤	4.25	1.30	1.25	良	良	にごり黄褐色 10YR7/4	ほぼ完形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ4.95g				
121	SK61	鉄製品	釘	残長5.0	残幅1.2	残厚0.4	断面長方形	下端折れ曲がる				重さ9.07g				
122	SK101	乳頭器	壺	-	-	-	良	良	灰 5Y/5/1	ロクロナデ	ロクロナデ	外面自然釉				
123	SK101	土師器	皿	(12.7)	-	-	良	良	にごり黄褐色 10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ	RAN類				
124	SK107	土師器	皿	(8.4)	-	1.35	良	良	にごり・擦 7.5YR7/3	ヨコナデ、底部 ナデ	ヨコナデ、底部 指頭痕・ナデ	E1類				
125	SK107	土師器	皿	(10.8)	-	1.40	普通	普通	根 7.5YR7/6	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	C2a類				
126	SK107	土師器	皿	(12.6)	(6.2)	2.75	良	良	にごり黄褐色 10YR7/3	ヨコナデ、体部刷毛 状ナデ、底部ナデ	ヨコナデ、体部 刷毛状ナデ、底部ナデ	A類				
127	SK107	土師器	皿	(6.0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2			C2a類				
128	SK107	土師器	皿	(6.6)	-	1.15	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類				
129	SK107	土師器	皿	(7.0)	-	1.15	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	ヨコナデ	C2a類				
130	SK107	土師器	皿	(7.0)	-	1.05	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 底部指頭痕	C2a類				
131	SK107	土師器	皿	(8.0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類				
132	SK107	土師器	皿	(8.9)	-	1.20	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 底部指頭痕	C2a類、口縁部内面に油漬と灯芯痕				
133	SK107	土師器	皿	(7.8)	-	1.3	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部 ナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類				
134	SK107	土師器	皿	(7.4)	-	1.45	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類				

第7表 遺物観察表(5)

番号	出土遺構層位	種類	器種	法量(cm) ()は推定値			胎土	焼成	色調	成形・調整		備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)				内面	外面	
135	SK107	土師器	皿	(6, 9)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類
136	SK107	土師器	皿	(7, 4)	-	1.65	良	良	灰白10YR8/2			C2a類
137	SK107	土師器	皿	(8, 4)	-	-	良	良	灰白10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類
138	SK107	土師器	皿	(10, 0)	-	-	良	良	灰白10YR8/2			C2a類
139	SK107(ZT)	土師器	皿	(10, 6)	-	-	良	良	灰白10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類
140	SK107	土師器	皿	(10, 8)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2a類
141	SK107	土師器	皿	(10, 8)	-	-	良	良	灰白2.5YR8/2			C2a類
142	SK107	土師器	皿	(11, 0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類
143	SK107	土師器	皿	(7, 6)	-	1.3	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 ～底部指頭痕	C2b類
144	SK107	土師器	皿	(9, 0)	-	-	良	良	灰白10YR8/2			C2b類
145	SK107	土師器	皿	(10, 0)	-	-	良	良	灰白10YR8/2			C2b類
146	SK107	土師器	皿	(10, 4)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2b類
147	SK107	土師器	皿	6, 9	-	1.75	良	良	灰白 10YR8/2	逆「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部 ～底部指頭痕	C1類
148	SK107	土師器	皿	(7, 4)	-	1.45			灰白10YR8/2			C1類
149	SK107	土師器	皿	(8, 0)	-	-	良	良	灰白10YR8/2			C1類
150	SK107	土師器	皿	(9, 0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C1類
151	SK107	土師器	皿	(9, 4)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C1類
152	SK107	土師器	皿	(11, 0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2		体部指頭痕	C1類
153	SK107	土師器	皿	(11, 0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 ナデ	C1類
154	SK107	土師器	皿	(11, 0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C1類
155	SK107	土師器	皿	(11, 4)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C1類、ナデ下に指頭痕
156	SK107 (ZT)	土師器	皿	(12, 0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 ナデ	C1類
157	SK107	土師器	皿	(7, 0)	-	1.65	良	赤色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 ～底部指頭痕	E3類
158	SK107	土師器	皿	(7, 0)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2		ヨコナデ、体部 指頭痕	E3類
159	SK107	土師器	皿	(7, 0)	-	-	良	良	灰白2.5YR8/1	ヨコナデ	ヨコナデ	E3類
160	SK107	土師器	皿	(10, 4)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2			E3類
161	SK107	土師器	皿	(12, 0)	-	-	良	良	灰白 2.5YR8/2		ヨコナデ、体部 指頭痕	E3類
162	SK107	土師器	皿	(12, 2)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	E3類
163	SK107	土師器	皿	(13, 0)	-	-	良	良	灰白 2.5YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	E3類
164	SK107	土師器	皿	(5, 0)	-	-	良	良	灰白10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	F1類
165	SK107	土師器	皿	(6, 4)	-	-	良	良	灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	F1類
166	SK107	土師器	皿	(6, 4)	-	-	良	良	灰白10YR8/2			F1類
167	SK107	土師器	皿	(8, 0)	-	2.5	良	良	灰白 10YR8/2		体部指頭痕	F1類、口縁部内面に煤付着、体部内 面に火芯痕
168	SK107	土師器	皿	7, 2	-	2.1	良	良	灰白 10YR8/2		体部～底部指頭 痕	F1類
169	SK107	土師器	皿	(7, 8)	-	-	良	赤色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 ナデ	F1類
170	SK107	土師器	皿	(8, 2)	-	-	良	赤色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 ナデ	F1類

第8表 遺物観察表(6)

番号	出土構造位	種類	器種	法量(cm) ()は推定値			焼成	色調	成形・調整		備考			
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)			内面					
									良	良				
171	SK107	土師器	皿	(8.0)	-	2.5	良 赤色粒	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部 ナデ	ヨコナデ、体部 →底部指頭痕	F1類			
172	SK107	土師器	皿	(10.4)	-	-	良 褐色粒	良 灰白 2.5YR8/2			F1類、外外面に薄く付着			
173	SK107	土師器	皿	(11.0)	-	-	良	良 灰白10YR8/2		体部指頭痕	F1類			
174	SK107	土師器	皿	(9.4)	-	2.5	良 褐色粒	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部 ナデ	ヨコナデ、体部 →底部指頭痕	D2類			
175	SK107	土師器	皿	(10.0)	-	2.7	良	良 灰白 10YR8/2	達「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部 →底部指頭痕	B2類、口縁部内外面に油付着			
176	SK107(2T)	土師器	皿	(11.0)	-	-	良	良 灰白2.5YR8/1		体部指頭痕	B2類			
177	SK107(2T)	土師器	皿	(11.4)	-	-	良	良 灰白10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	D2類			
178	SK107	土師器	皿	(11.6)	-	3.1	良 赤色粒	良 灰白 10YR8/2	達「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部 →底部指頭痕	B2類			
179	SK107	土師器	皿	(12.0)	-	-	良	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	B2類			
180	SK107	土師器	皿	(10.6)	-	2.75	良	良 灰白 10YR8/2		体部～底部指頭痕	F2類			
181	SK107	土師器	皿	(12.0)	-	2.75	良 赤色粒	良 灰白 10YR8/2		体部～底部指頭痕	F2類			
182	SK107	土師器	皿	(12.4)	-	2.8	良	良 灰白2.5YR8/2			F2類			
183	SK107	土師器	皿	(11.6)	-	-	良	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ、体部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	F2類、ナデ消し			
184	SK107	土師器	皿	13.0	4.0	3.1～ 3.2	良 赤色粒	良 灰白 10YR8/2	達「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部 →底部指頭痕	F2類、口縁部内外面に油付着			
185	SK107	土師器	皿	13.0	3.25	3.15	良 赤色粒	良 灰白 10YR8/2	達「の」字状ナデ	ヨコナデ、体部 →底部指頭痕	F2類			
186	SK107	土師器	皿	(6.7)	-	1.2	良	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部 ナデ	ヨコナデ、底部 指頭痕	C2c類			
187	SK107	土師器	皿	(8.0)	-	-	良 赤色粒	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	C2c類			
188	SK107	土師器	皿	(7.4)	-	1.5	良	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 →底部指頭痕	E1類			
189	SK107	土師器	皿	(7.8)	-	1.4	良	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	E1類			
190	SK107	土師器	皿	(7.1)	-	1.55	良 褐色粒	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ、底部 刷毛状ナデ	ヨコナデ、底部 指頭痕・ナデ	E1類			
191	SK107	土師器	皿	(6.6)	-	1.4	良	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 →底部指頭痕	E1類			
192	SK107	土師器	皿	(11.4)	-	2.0	良 褐色粒	良 灰白 10YR8/2	ヨコナデ	ヨコナデ	E3類			
193	SK107	青磁	皿	(9.6)	-	-	精良	良 オリーブ黄 5Y6/3	底部に櫛描文		残存部分は全面施釉 同安窯、太宰府D期、碗 I-1b類			
194	SK107	青磁	碗	-	-	-	精良	良 灰白 5Y7/2	体部に櫛描文	体部に櫛描文	残存部分は外面部無釉 同安窯、太宰府D期、碗 I-1c類			
195	SK107	石製品	砥石	残4.3	3.20	2.90	下端と裏面欠損。 流紋岩製。	重さ 70.17g						
196	SP08	土師器	皿	(6.1)	-	1.25	良	良 灰白2.5YR8/2						
197	SP22	珠洲	鉢	(25.6)	-	-	良 骨針	良 灰 5Y5/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲 I 3期(口縁a1型)			
198	SP23	土師器	皿	(9.0)	-	-	良	良 にぶい 7.5YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類			
199	SP23	珠洲	片口鉢	(26.0)	-	-	良 骨針	良 褐灰 10YR4/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲 I 3期(口縁b1型)			
200	SP23	珠洲	片口鉢	(40.0)	-	-	良 骨針	良 褐灰 7.5YR4/1	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲 I 3期(口縁b1型)			
201	SP23	青磁	碗	-	-	-	精良	良 オリーブ黄 5Y6/4	満巻状の文様		残存部分は全面施釉、12c中～後 龍泉窯、太宰府D期、碗 I-2a類			
202	SP23	青磁	碗	-	(6.6)	-	精良	良 オリーブ黄 5Y6/3	花文	高台外表面に面取	高台下端から内側は無釉、12c中～後 龍泉窯、太宰府D期、碗 I-1類			
203	SP34	土師器	皿	(7.4)	-	-	良	普通 にぶい 7.5YR4/1	ロクロナデ	ロクロナデ	EB類			
204	SP56	土師器	皿	(8.7)	-	-	良	良 にぶい 7.5YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2a類			

第9表 遺物観察表(7)

番号	出土遺構 層・位	種類	器種	法量(cm) ()は推定値			胎土	焼成	色調	成形・調整		備考	
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)				内面	外面		
205	SP84	土師器	皿	(8.0)	4.3	2.35	良 褐色粒	良	浅黄褐 7.5188/4	クロナデ	クロナデ、底 部削鉢系切り	RC2類	
206	SP120	土師器	皿	(10.6)	-	-	良	良	にぶい橙 7.5187/4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部 指頭痕	C2c類	
207	SP124	土製品	土鍵	残 3.70	1.45	1.20	良	良	にぶい黄褐 10187/3	下端欠損、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ6.77g	
208	包含層	土師器	皿	(7.4)	(6.2)	0.9	良	良	灰黄褐 10185/2	ヨコナデ、底部 ナデ	ヨコナデ、底部 指頭痕	E2類	
209	包含層	土師器	皿	(9.3)	-	-	良 赤色粒	良	浅黄褐 7.5188/4			C1類	
210	包含層	土師器	皿	(11.6)	(5.6)	2.15	良 褐色粒	良	にぶい橙 7.5187/4			H2類	
211	包含層	土師器	皿	(12.0)	-	-	良	良	灰白 10188/2			C2a類	
212	包含層	土師器	皿	(13.6)	-	-	良 赤色粒	良	にぶい橙 7.5187/4			C2b類	
213	包含層	珠洲	甕	-	-	-	良	良	灰 518/1	クロナデ	クロナデ	口縁部内に自然軸 珠洲II期型(a4型)	
214	包含層	珠洲	擂鉢	-	-	-	良 骨針	良	灰 514/1	クロナデ 脚目8条以上	クロナデ	珠洲III期	
215	包含層	珠洲	甕	-	-	-	良 骨針	普通	灰白 2.518/1	クロナデ	クロナデ	珠洲II期	
216	包含層	珠洲	擂鉢	-	-	-	良 骨針	普通	灰白 517/1	クロナデ 脚目8条以上	クロナデ		
217	包含層	珠洲	擂鉢	-	-	-	良	良	灰 N5/0	クロナデ、脚 目10条	クロナデ		
218	包含層	珠洲	擂鉢	-	(12.0)	-	良 骨針	良	灰 N6/0	クロナデ、脚 目13条	クロナデ、指 頭痕、底部静止 余切り	珠洲I期	
219	包含層	土製品	土鍵	3.40	1.40	1.20	良	良	灰白2.518/2	先形、ナデ		孔径0.40cm、重さ3.71g	
220	包含層	土製品	土鍵	4.50	2.60	2.10	良	良	灰白2.518/2	1112先形、ナデ		孔径0.95cm、重さ20.33g	
221	包含層	土製品	支脚	残 6.70	5.10	-	良	良	陶灰10184/1	上端と側面欠損、指押さえ・ナデ			
222	包含層	石製品	砾石	残 4.40	残 2.90	0.70	全面に研磨痕、粘板岩製、重さ9.05g						
223	表土	土製品	土鍵	残 4.60	1.10	1.15	良 骨針	良	灰 10184/1	ほぼ先形、指押さえ・ナデ		孔径0.30cm、重さ4.86g	
224	表土	土製品	土鍵	残 6.80	2.30	2.20	良	良	にぶい橙 7.5187/3	上端欠損。指押さえ・ナデ		孔径0.35cm、重さ24.65g	
225	表探	土師器	皿	(7.8)	-	-	良	良	灰白 10188/2	ヨコナデ、体部 ～底部指頭痕	C2a類		
226	表探	珠洲	甕	-	-	-	良 骨針	良	灰 2.516/1	ヨコナデ、頸部 ナデ	ヨコナデ、頸部 平行叩き	珠洲I2期	
227	表探	珠洲	甕	-	-	-	良 骨針	良	灰 2.514/1	クロナデ	クロナデ	珠洲I2期	
228	表探	珠洲	甕	-	-	-	良	良	灰 N5/0	クロナデ	クロナデ	珠洲II期	
229	表探	青磁	擂鉢	-	-	-	精良	精良	明治紀10177/1	錫のない蓮弁文		太宰府燒IV類	
230	農道 S004	土師器	皿	(11.0)	-	1.9	良	やや 良	浅黄褐 10188/4	ヨコナデ 指頭痕	ナデ	B類	
231	農道 S004	土師器	皿	-	(4.0)	-	やや 不良	不良	灰白 2.518/2	クロナデ	底部削鉢余切り	RA類	
232	農道 S005	土師器	皿	(12.7)	-	-	良	やや 良	浅黄褐 10188/3	ナデ	ナデ	C2b類	
233	農道 S006	土師器	皿	(5.6)	-	1.1	良	良	灰 5186/8	ナデ	ナデ	C2c類	
234	農道 S006	土師器	皿	(7.1)	-	0.9	やや 良	やや 不良	浅黄褐 10188/3	ナデ	ナデ	C2s類	
235	農道 S006	土師器	皿	(15.0)	-	2.2	良	良	灰白 10188/2	ナデ	ナデ	D2類	
236	農道 S006	珠洲	擂鉢	(40.0)	-	-	良 骨針	良	灰 7.516/1	クロナデ	クロナデ	珠洲IV2期	
237	農道 S006	珠洲	擂鉢	-	(10.8)	-	良 骨針	良	灰白 2.518/1	ナデ	ナデ、指押さえ	珠洲I3期、柄目3条	
238	農道 S006	古漁F3	瓶子	-	-	-	やや 良	良	灰白 2.518/1	ナデ	ナデ、自然灰釉	底部付近	

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定・珪藻分析・花粉分析

はじめに

友坂遺跡は、富山県婦中町に所在し、神通川支流の井田川左岸の低位面から氾濫平野上に立地する。中世（13～14世紀）の館跡で、標高は12～18mである。

本報告では、調査区より検出された遺構覆土および地山試料を対象に、遺構の年代観や古環境に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析を実施する。

1. 試料

放射性炭素年代測定に用いる試料は、SK107およびSK21より採取された炭化材、およびSK05より出土した人骨（焼骨）の、計3点である。

珪藻分析、花粉分析に用いる試料は、SD37（サンプルB）、SD106（サンプルA）、SK107（サンプルA）、古代地山（サンプルA）の、計4点である。

2. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。

炭化材については、試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理：AAA）。濃度はHCl、NaOH共に最大1mol/Lである。一方、試料が脆弱で1mol/Lでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度のNaOHの状態で処理を終える。その場合はAaAと記す。

骨試料は、通常コラーゲン抽出を行うが、今回は焼骨であったためコラーゲン抽出はできない。よって、表面の汚れを削り取ったあと、1mol/Lの塩酸（HCl）によりエッジング（表面を溶かす）処理を行う（Edgと記載）。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を

基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach, 1977)。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している）等を用いて作られている。暦年較正に用いるソフトウェアは Oxcal4.3 (Bronk, 2009)、較正曲線は Intcal13 (Reimer et al., 2013) を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach, 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするために、表には丸めない値 (1 年単位) を記す。

(2) 珪藻分析

湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4～5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数する（化石の少ない場合は、この限りではない）。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt (1930–1966)、Krammer and Lange-Bertalot (1985–1991)、Desikachariy (1987)、Lange-Bertalot (2000)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類し表に示す。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのを概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pH に対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に當時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の

多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(3) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレバラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレバラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第 10 表、第 26 図に示す。試料の測定年代（補正年代）は、SK107 の炭化材は 795 ± 20yrBP、SK21 の炭化材は 785 ± 20yrBP、SK05 の人骨（焼骨）は 1,565 ± 20yrBP の値を示す。

暦年較正年代は、測定誤差を $\pm 2\sigma$ として計算させた結果、SK107 の炭化材が calAD 1,215 ~ 1,271、SK21 の炭化材が calAD 1,220 ~ 1,271、SK05 の人骨（焼骨）が calAD 425 ~ 545 である。

第 10 表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	± 1σ C (yr)	削年較正用	暦年較正年代			Code No.
						年代値	標準偏差	標準 %	
SK107 (竹材 (チモノ木))	AAA	795 ± 20	-30, 65 ± 6, 32	795 ± 20		± cal AD 1223 - cal AD 1210	720 - 691 calBP	68, 2 pm ⁻¹ VU-	12869 11405
						± cal AD 1213 - cal AD 1271	735 - 679 calBP	95, 4 pm ⁻¹	
SK21 (ツバキ葉)	AAA	785 ± 20	-29, 88 ± 6, 28	786 ± 20		± cal AD 1221 - cal AD 1236	726 - 714 calBP	31, 2 pm ⁻¹ VU-	12870 11406
						± cal AD 1241 - cal AD 1265	709 - 665 calBP	41, 6 pm ⁻¹	
SK05 人骨 (焼骨)	Edg	1565 ± 20	-21, 99 ± 6, 27	1563 ± 20		± cal AD 431 - cal AD 492	1519 - 1416 calBP	99, 3 pm ⁻¹ VU-	12871 11407
						± cal AD 514 - cal AD 516	1436 - 1434 calBP	2, 1 pm ⁻¹	
						± cal AD 520 - cal AD 537	1420 - 1412 calBP	7, 0 pm ⁻¹	
						± cal AD 425 - cal AD 545	1325 - 1405 calBP	95, 4 pm ⁻¹	

1) 年代値の書式には、1.0hr の半減期を 568 年を使用。

2) yrBP 年代値は、1950 年を基準として何年前であるかを示す。

3) 表記した熟年は、測定熟年 ± (測定誤差の 68% が入る範囲) を年代値に修正した熟年。

4) AAA (アルカリ) 加熱処理、Edg はアルカリの濃度を降低了した処理、Edg はカルシング処理を示す。

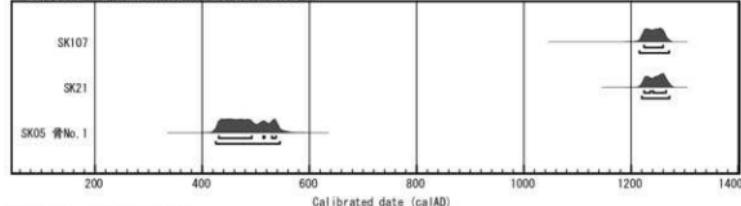
5) 削年の計算には、0.9cal/1.43 を使用。

6) 削年の計算には削に示したための削の値を使用している。

7) 削年の削を丸めた場合だが、削年較正曲線や削正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行っているように、1 手目を丸めて 1,215。

8) 計算的削の値が入る範囲は ± 1.68%、± ± 1.90% である。

Detailed yr-2.2 (2008, 2009) - 5 isotactic styrene (source: Haynes et al. 2003)



第 26 図 暦年較正結果

(2) 珪藻分析

結果を第11表に示す。

SD37(サンプルB)、SD106(サンプルA)、SK107(サンプルA)、古代地山(サンプルA)のすべてから珪藻化石は産出したが、全体的に産出数は少なかった。

SD37、SD106、SK107の3試料は、産出した種に多少の差異はあるものの群集の特徴は、ほぼ同様の傾向を示した。SD37、SD106、SK107からは、それぞれ32個体、40個体、31個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、極不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水性種の *Navicula elginensis* var. *niglecta*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*、*Pinnularia subcapitata* 等である。

古代地山からは、12個体産した。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、極不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で止水性種の *Stauroneis phoenicenteron*、*Staurosira construens*、陸生珪藻の *Pinnularia subcapitata* 等である。

第11表 珪藻分析結果

種 類	生息性		環境 指標種	SD37	SD106	SK107	古 代 地 山
	塩 度	pH		サンプルB	サンプルA	サンプルA	サンプルA
<i>Angora montana</i> Krauske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-
<i>Angora ovalis</i> (Büts.) Kuetzing	Ogh-ind	a1-11	ind	T	-	-	1
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>linosa</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	a1-11	r-ph	T	-	1	-
<i>Fusaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	2	-	1
<i>Frangilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	1
<i>Fruitulia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	2	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	a1-11	ind	RA, U	8	19	15
<i>Laticula natans</i> (Kuetz.) D.G. Mann	Ogh-ind	a1-11	ind	RA, S	3	4	-
<i>Narcissula elegans</i> var. <i>niglecta</i> (Kraus.) Patrick	Ogh-ind	a1-11	r-ph	U	1	1	-
<i>Narcissula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	2	-	-
<i>Pinnularia glabe</i> Ehrenberg	Ogh-ind	as-11	ind	O	-	1	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	as-11	ind	RB, S	14	12	13
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	2	-
<i>Staurosira phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	r-ph	N, O, U	-	-	2
<i>Staurosira</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	a1-11	r-ph	U	-	-	3
海水生種					0	0	0
海水+汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水+汽水生種					0	0	0
淡水生種					32	40	31
珪藻化石収蔵					32	40	31
凡例					12	12	12
塩分：塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性				流水: 流水に対する適応性		
Euh: 両生種	a1-b1: 好アルカリ性種				1-b1: 真止水性種		
Euh-Weh: 両生種・汽水生種	a1-11: 好アルカリ性種				1-ph: 好止水性種		
Weh: 汽水生種	ind: pH不定性種				ind: 流水不定性種		
Ogh-Weh: 汽水生種・汽水生種	ac-11: 好酸性種				r-ph: 好流水性種		
Ogh-hill: 好酸好塩性種	ac-b1: 好酸性種				r-b1: 好流水性種		
Ogh-ind: 好塩不定性種	unk: pH不明種				unk: 流水不明種		
Ogh-hoh: 好塩塩性種							
Ogh-unk: 好塩不明種							

環境指標種

A: 外洋指標種 B: 内洋指標種 C: 海水藻類指標種 D: 汽水藻類指標種

E1: 海水砂質干潟指標種 E2: 汽水砂質干潟指標種

E3: 海水泥炭質干潟指標種 E4: 汽水泥炭質干潟指標種 F: 流水底生種群(以上は小林, 1988)

G: 淡水浮遊種群 H: 河口浮遊性種群 I: 上流水域河川指標種 K: 中～下流水域河川指標種

L: 最下流水域河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沿岸湿地指標種 O: 沼沢湿地付着種群

P: 高麗藻原指標種群 Q: 沿城指標種群(以上は安藤, 1990)

S: 好汚泥性種 U: 広適応性種 T: 好湧水性種(以上はAnsi and Katanobe, 1995)

R: 陸生珪藻 RA-K群, RB-S群, RI-M群(伊藤・船内, 1993)

(3) 花粉分析

結果を第12表に示す。分析したいずれの試料においても花粉化石の産出状況が悪く、定量解析を行えるだけの個体数を得ることができなかつた。

溝試料の中では、SD37(サンプルB)が検出個体数、種類数とも多く、木本花粉ではマツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属などが、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科などが検出された。SD106(サンプルA)、SK107(サンプルA)ではマツ属やスギ属、イネ科、アカザ科などが僅かに認められた程度である。なお、SD37、SD106からは、栽培の可能性があるソバ属も確認された。

古代地山(サンプルA)では、木本花粉のマツ属、スギ属、コナラ亜属、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科などが僅かに認められた程度である。また、第三紀消滅種のフウ属も1個体であるが確認された。

4. 考察

(1) 遺構の年代観

土坑試料における放射性炭素年代測定結果をみると、SK107出土炭化材が補正年代で795±20yrBP、暦年代でcalAD 1,215～1,271、SK21出土炭化材が補正年代で785±20yrBP、暦年代でcalAD 1,220～1,271と、ほぼ同時期の年代値が得られた。いずれも13世紀であり、中世(13～14

第12表 花粉分析結果

種類	SD37	SD106	SK107	古代地山
	サンプルB	サンプルA	サンプルA	サンプルA
木本花粉				
モミ属	1	—	—	1
ツガ属	—	—	—	1
マツ属複雑管束系属	2	—	3	—
マツ属(不明)	3	—	—	2
スギ属	2	2	—	10
ハンノキ属	1	—	—	—
コナラ属コナラ亜属	2	—	—	2
エノキ属—ムクノキ属	1	—	—	—
フウ属	—	—	—	1
草本花粉				
イネ科	16	5	3	3
カヤツリグサ科	4	—	—	1
クワ科	1	—	—	—
サナエタデ節—ウナギツカミ節	1	—	—	—
ゾバ属	2	1	—	—
アカザ科	8	—	3	—
ナデシコ科	—	—	1	—
アブラナ科	2	2	—	—
セリ科	2	—	—	—
アリノトウグサ属	1	—	—	—
ヨモギ属	1	—	1	—
不明花粉				
不明花粉	2	2	—	4
シダ類胞子				
シダ類胞子	37	12	25	51
合計				
木本花粉	12	2	3	17
草本花粉	38	8	8	4
不明花粉	2	2	0	4
シダ類胞子	37	12	25	51
合計(不明を除く)	87	22	36	72

世紀)とされる調査所見とも調和的である。よって、SK107とSK21は13世紀頃の遺構と想定される。

一方、SK05の人骨は、補正年代で $1,565 \pm 20$ yrBP、曆年代でcalAD 425~545と、前述の2試料と比較して古い年代値を示した。通常骨試料の年代測定には、化学的風化作用に比較的強い有機成分の硬タンパク質コラーゲンを用いるが、当該試料は焼骨であることからコラーゲンでの測定が不可能である。そのため今回は、骨の無機成分である炭酸ヒドロキシアバタイト(CHA)を用いて測定している。CHAは結晶性に乏しく、土壤に埋没している間に二次的な炭酸塩が沈着したり、周辺の外来炭素と同位体置換するなど、コラーゲンに比べ汚染されやすいとされている(例えば棕本ほか、2015など)。これらのことと踏まえると、得られた年代値は周囲の土壤中などからの汚染により、本来より古い値を示した可能性がある。

(2) 古環境

珪藻分析の結果、溝跡ないし土坑とされるSD37、SD106、SK107のいずれの試料も珪藻化石の産出数は少なかったため、生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。このことから、対象とした覆土が堆積した頃の遺構内は、好気的環境であった可能性がある。

なお、SD37、SD106、SK107から少ないながらも産出した種をみると、淡水生種で流水性種の*Navicula elginensis* var. *neglecta*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*、*Pinnularia subcapitata*などが認められる。生態性について述べると、流水性種の*Navicula elginensis* var. *neglecta*は、河川や溝等の定常的な水の流れがある水域の基物(疊、水草、大型の藻類)に付着生育する種である。*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*、*Pinnularia subcapitata*等の陸生珪藻は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉、1986)である。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる(伊藤・堀内、1989、1991)。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占(70~80%以上)する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。今回の場合、少なからず認められた珪藻化石の約80~90%が陸生珪藻であった。

これらのことと踏まえると、いずれの遺構においても流水の影響を受けていた可能性が示唆されるものの、常に水が流れているような状況ではなく、頻繁に乾いていたような環境であった可能性が高い。その結果、わずかに取り込まれた珪藻化石も、堆積後の好気的な環境下で分解・消失したと考えられる。

次に花粉分析結果をみると、SD37、SD106、SK107のいずれの試料も、古植生推定のための定量解析が行えるだけの花粉化石が得られなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村、1967; 徳永・山内、1971; 三宅・中越、1998など)。上述のように、珪藻分析から溝内は好気的環境下に曝されていたことが推定されることから、堆積時に取り込まれた花粉やシダ類胞子も、その後の經年変化により分解・消失したと考えられる。

わずかに検出された花粉化石は、マツ属、スギ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹である。遺跡の立地も踏まえると、コナラ亜属は冷温帶性落葉広葉樹林の構成要素として周囲の森林に、スギ属は沢筋などに、マツ属は周囲の二次林などに生育していた可能性がある。また、ハンノキ属などは湿地林を構成する種類であることから、井田川沿いなどに生育していた可能性もある。草本類ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科など、いずれも開けた明るい場所に生育する種類

が検出された。よって、当時の調査区内やその周辺の草地植生に由来すると思われる。なお、SD37、SD106からはゾバ属も確認されたことから、当時の周辺でゾバの栽培利用の可能性も指摘される。

一方、古代地山も珪藻化石の産出が少なかったが、わずかに産出した種は淡水生種で止水性種の *Stauroneis phoenicenteron*、*Staurosira construens*、陸生珪藻の *Pinnularia subcapitata* などであった。止水性種の *Stauroneis phoenicenteron* は、比較的、広範に止水域に認められる種であるが、Cholnoky(1968) は最適 pH を 6.8 に持つ種類であるとしている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。*Staurosira construens* は池沼等の止水域に広く認められ、比較的広域に生育する種である。

以上のことから、古代地山が堆積した頃は沼沢湿地のような環境であった可能性があるが、本地点の場合も、堆積後の好気的な環境下で珪藻化石が分解・消失した可能性が高い。

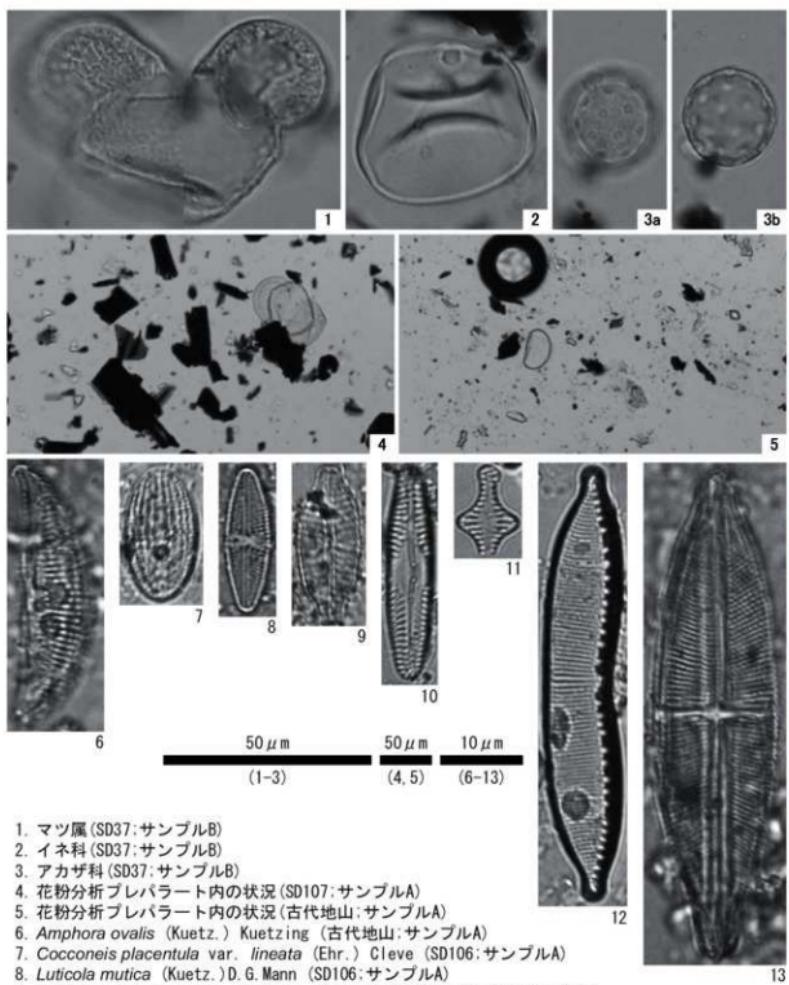
なお、花粉化石はマツ属、スギ属、コナラ亜属などの木本類、イネ科、カヤツリグサ科などの草本類が僅かに認められた程度である。これらは当時の森林植生や草地植生に由来すると思われる。また、第三紀消滅種のフウ属が確認された。本遺跡西方の吳羽山丘陵には、新第三系の音川累層などが分布することから、フウ属は周辺の古い堆積物からの再堆積と考えられる。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

引用文献

- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35 - 47.
- Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- Cholnoky, B. J., 1968, Die Oekologie der Diatomeen in Binnengewässern. Lehre(Cramer), 699p.
- Desikachari, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Österreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Sup pl., 15, 131-809, 1-155, 274-349.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Österreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz.

- under Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Österreich und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討—陸生珪藻の細分一. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.
- 小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 1, 9-44.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. *Bibliotheca Diatomologica*, 9, 250p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.
- Lange-Bertalot, H., 2000, *ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs*.
- Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: *Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1*. 219 plts. 4504 figs, 925p.
- 三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.
- 椋本ひかり・南 雅代・中村俊夫, 2015, 火葬骨の炭酸ヒドロキシアバタイトを用いた14C年代測定の試み. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, XVI, 96-101.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- Sstuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子・化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.



1. マツ属 (SD37:サンプルB)
2. イネ科 (SD37:サンプルB)
3. アカザ科 (SD37:サンプルB)
4. 花粉分析ブレバラート内の状況 (SD107:サンプルA)
5. 花粉分析ブレバラート内の状況 (古代地山:サンプルA)
6. *Amphora ovalis* (Kuetz.) Kuetzing (古代地山:サンプルA)
7. *Coccconeis placentula* var. *lineata* (Ehr.) Cleve (SD106:サンプルA)
8. *Luticola mutica* (Kuetz.) D. G. Mann (SD106:サンプルA)
9. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (SD106:サンプルA)
10. *Pinnularia subcapitata* Gregory (SD37:サンプルB)
11. *Staurosira construens* Ehrenberg (古代地山:サンプルA)
12. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SD106:サンプルA)
13. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (古代地山:サンプルA)

第27図 花粉分析・珪藻化石

第2節 友坂遺跡出土焼骨の人類学的報告

1. はじめに

富山県富山市婦中町友坂遺跡の発掘調査において、中世の遺構より數十点の焼骨が出土した。形態学的特徴に基づいて種を識別できた骨はいずれも人骨であり、ヒト以外の動物に比定される骨はなかつたことから、出土焼骨の全体を人骨とみなして大過ない。以下に、その人類学的観察所見を報告する。

2. 方法

肉眼形態学的観察に基づき、部位の同定、年齢推定、性別判定を試みた。ただ、性差を反映する形態的特徴に乏しく、性別は判定し得なかった。骨の名称は原則として解剖学事典（解剖学用語委員会、2007）に準拠した。年齢は、頭蓋縫合の閉塞状況（瀬田・吉野、1990; White et al., 2012）、および四肢骨の骨体の大きさと骨端部の癒合状況（瀬田・吉野、1990; Scheuer and Black, 2000）に基づいて推定し、以下の成長段階のいずれに相当するのかを検討した：乳児（0～1歳）、幼児（2～5歳）、小児（6～12歳）、若年（13～19歳）、壮年（20～39歳）、熟年（40～59歳）、老年（60歳以上）。また、Fairgrieve (2008) と Shipman et al. (1984) を参考に、焼骨の色調が茶褐色・黒色・灰青色・灰白色・白色のうちのいずれに相当するかを調査し、あわせて形状の変化についても検討した。

3. 観察所見

部位を同定できたのは、歯根（第28図の番号1）、左頭頂骨（同2）、右頬骨（同3）、左頬骨（同4）、左側頭骨（同5）、後頭骨（同6）、椎骨（同7）、および左右不明の大腿骨遠位端（同8）である。他に、上腕骨頭ないし大腿骨頭と思われる骨端片2点（同9・10）や、部位の特定が困難な四肢長骨片（同9～15）などが認められた。どの骨体も白色ないし灰白色を呈し、四肢長骨の骨幹部には輪状の亀裂や捻軸が認められた（同11～15など）。総重量は150.7gであった。

骨の大きさはいずれも若年以上に相当する。四肢長骨の骨端（同9・10）が断片的なため、癒合が完了しているかどうかは判然としない。左頭頂骨と後頭骨のラムダ縫合が閉塞しておらず（同2・6）、老年には達していないと思われる。以上を総合し、若年から熟年のいずれかの段階と推定した。なお、明瞭な傷病変は見当たらなかった。

4. 考察

出土焼骨に部位の重複や年齢段階の齟齬がなく、総重量が成人1体分の焼骨重量（日本人成人女性平均約1.3kg、男性約2kg、山口（1983）による）を超えないことから、焼骨は1体の人骨に由来するものと考えてよさそうである。ただ、出土焼骨重量は成人1体分の焼骨重量に遠く及ばず、土中の埋存過程で減失したか、あるいはもとより遺体の一部が遺構内に置かれたのではないかと思われる。

骨の焼成実験により、低い温度で焼成した骨体は茶褐色や黒色を呈するが、焼成温度が高い場合は灰白色や白色となることが知られている（Shipman et al., 1984; Holden et al., 1995; Fairgrieve, 2008）。骨体が白色を帯びる焼成温度は、Shipman et al. (1984) によれば約650°C以上、Holden et al. (1995) では800°C以上とされる。出土焼骨は全て白色ないし灰白色を呈し、茶褐色や黒色の骨が見当たらないことから、焼成温度は比較的高温だったと考えられる。

池田（1981）は、Buikstra (1973) を引用して「軟部組織に包まれている長骨が焼けた場合、そ

これは外面の深い干割れ、横方向の輪状の亀裂、長軸方向の裂開、さらにはいちじるしい捩れなどの変形で特徴づけられるが、白骨を焼いた時の主な変化は、長軸方向の裂開と、表面の浅い干割れだけにとどまり、形が歪むことはない」と述べている。出土した四肢長骨には輪状の亀裂や捻転が生じていたことから、この個体は、皮膚や筋などの軟部組織に包まれた状態で焼成されたものと推察される。

5. まとめ

友坂遺跡から出土した焼骨を肉眼形態学的に検討した結果、本焼骨が、若年から熟年段階に相当する1個体の焼成人骨に由来するものと推定された。骨体の色調および形状から、この個体は軟部組織に包まれた状態で焼成されたと考えられた。

(新潟医療福祉大学 佐伯史子・澤田純明)

文献

- 池田次郎. 1981. 出土火葬骨について. 太安萬侶墓, 奈良県立橿原考古学研究所, pp. 79-88.
- 解剖学用語委員会. 2007. 解剖学用語, 改訂13版. 医学書院.
- 瀬田季茂・吉野峰生. 1990. 白骨死体の鑑定. 令文社.
- 山口敏. 1983. 出土人骨についての分析. 竜ヶ池観音堂塚群発掘調査報告書Ⅱ, 小千谷市教育委員会, pp. 41-43.
- Buikstra J.E. 1973. Technique and interpretation in the study of a complex cremation site. In: The Perrins Ledge Crematory, Illinois State Museum, pp. 15-23.
- Fairgrieve S.I. 2008. Forensic Cremation Recovery and Analysis. CRC Press.
- Holden J.L., Phakey P.P., Clement J.G. 1995. Scanning electron microscope observations of incinerated human femoral bone: a case study. Forensic Science International, 74: 17-28.
- Scheuer L. and Black S. 2000. Developmental Juvenile Osteology. Academic Press.
- Shipman P., Foster G., Schoeninger M. 1984. Burnt bones and teeth: an experimental study of colour, morphology, crystal structure and shrinkage. Journal of Archaeological Science, 11: 307-325.
- White T.D., Black M.T., Folkens P.A. 2012. Human Osteology, Third Edition. Academic Press.



1. 牙根 2. 左頭頂骨片 3. 右頰骨片 4. 左頰骨片 5. 左側頭骨片 6. 後頭骨片
8. 左右不明大脛骨遠位端片 9. 上腕骨ないし大腿骨の骨頭片 10. 上腕骨ないし大腿骨の骨頭片
11 ~ 15. 部位不明四肢長骨片

第5章 総 括

第1節 友坂遺跡における中世遺構の調査歴

友坂遺跡では、昭和56年度の第1次調査以降、発掘調査が徐々に進んでいる。今回の調査で検出した中世遺構を総括するにあたり、ここでは既往調査の主要な中世遺構を居館跡を中心に整理したい。

1 過去の調査概要

第1次調査・第4次調査（婦中町教委 1984・1993） 第1次調査B地区において一辺40m超の方形区画を想定できる堀SD22を検出し、居館跡の存在が知られることとなった（第2図）。SD22は幅3.5～4.5m、深さ1.5mほどの規模である。14世紀代の珠洲や青磁が出土している。この区画の内外では遺構の多寡が顕著で、区画内からは掘立柱建物9棟、櫛1条、井戸1基、土坑、溝を検出した。掘立柱建物は概ねSD22と方位が揃い、最大規模はSB03の2×5間である。井戸SE41からは13世紀中頃～14世紀初頭の白磁、土師器皿が出土した。土坑には掘立柱建物の内部に収まるSK51・52、SB05～09と同方位で同寸法の竪穴状となるSK54・55などがある。この南西側には、SD22に直交する堀SD21がある。SD21はSD22との間に3.0mの距離を空けて途切れるため、土橋状通路が想定された。ただしSD21は井戸SE41より新しく、またSD21とSD22の遺物に時期差もあることから、土橋状通路の存否を含め、区画内の遺構には数次の変遷が想定される（第5章第3節）。SD23は上幅2.4m、深さ0.8mの溝で、SD24方面へ延びる。方形区画内には小規模な区画溝SD25・27・31がある。

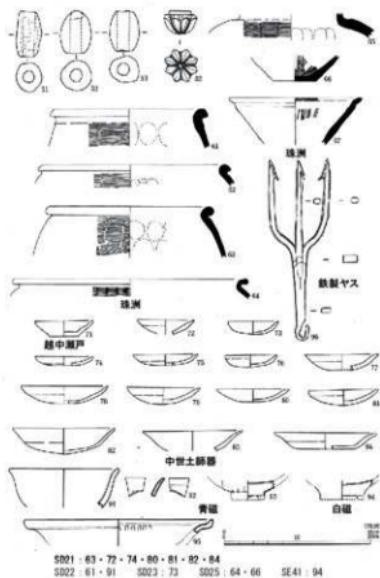
SD24は第4次調査A地区で検出した屈曲する堀SD01に繋がり、上幅5.7m、下幅2.5m、深さ0.8mの規模がある。SD22に対する外堀として、二重堀の可能性が指摘される。ただし遺物の主体となる珠洲や古瀬戸が14世紀後半～15世紀中頃であることから、SD22に後出する可能性もある。

以上のように、居館跡の中心部には、二重堀ないし、改修に伴って新旧のある単独の堀による方形区画があり、その規模は内側の堀で40m以上、外側の堀で50m以上となる。二重堀を想定すれば、内堀と外堀の間の遺構空白地に、最大幅7.0mの土塁が存在した可能性がある。方形区画内は区画溝によって仕切られ、小区画ごとに掘立柱建物が存在し、中心部寄りでは井戸や竪穴状土坑を伴う。掘立柱建物はほとんどが梁行1間である。出土遺物は土師器皿、珠洲、越前、青磁、白磁、瓦質土器、鉄製ヤス、漆器などの木製品があり、その時期は12世紀後半～15世紀に及ぶ。

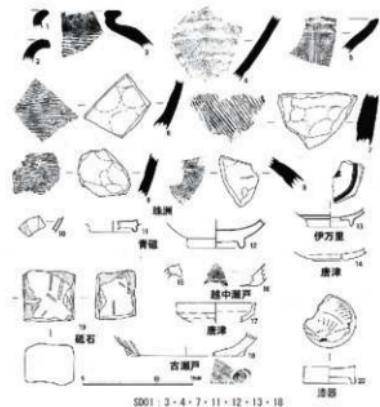
第2次調査（婦中町教委 1984） 朝日小学校の北西側60mの位置で行われた。幅3.6m、深さ60～80cmで掘り直しのある溝SD129と区画溝SD126を挟んだ西側に掘立柱建物1棟と井戸1基、東側に竪穴状土坑1基を検出した。SD129は居住域を区画する溝と考えられ、14世紀代の珠洲、土師器皿、漆椀・脚・曲物などの木製品が出土した。掘立柱建物SB111は1×2間である。井戸SE141からは珠洲、中世土師器が出土し、SB111併設の井戸と考えられる。竪穴状土坑SK152は4.9×3.3mの長方形を呈し、深さ55cmで、貼床が2面ある。土層は人為的な短期埋没を示しており、珠洲や土師器皿が出土した。竪穴状土坑SK161はSD129より古く、規模は5.0×3.0m以上の長方形を呈し、深さ50cmである。珠洲、土師器皿のほか、火葬人骨が出土した。火葬人骨はSD126からも出土している。

第6次・第9次調査（未報告） 朝日小学校から西100～200mの位置にある。中世の木組井戸2基のほか、溝・土坑等を検出した。珠洲、青磁、箸、砥石等が出土したとされ、13世紀代に中心がある。

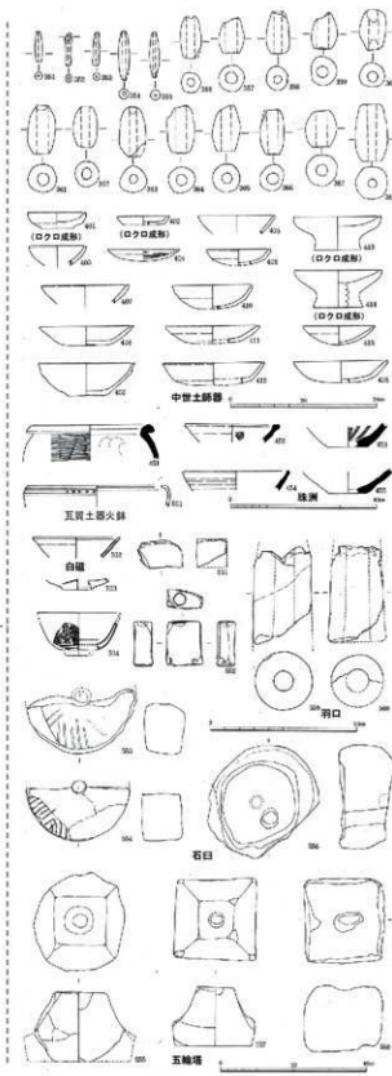
第7次調査（婦中町教委 1997） 朝日小学校から南西へ120～170mの位置にある2地点で実施された。A地区では中世末から近世初頭にかけての遺構が検出された。溝SD02は幅0.8～1.5mの規



昭和56年度調査（福中町教委1984上り軒轅加筆）



平成4年度調査A地区 (福中町政委1990上り軒轅)



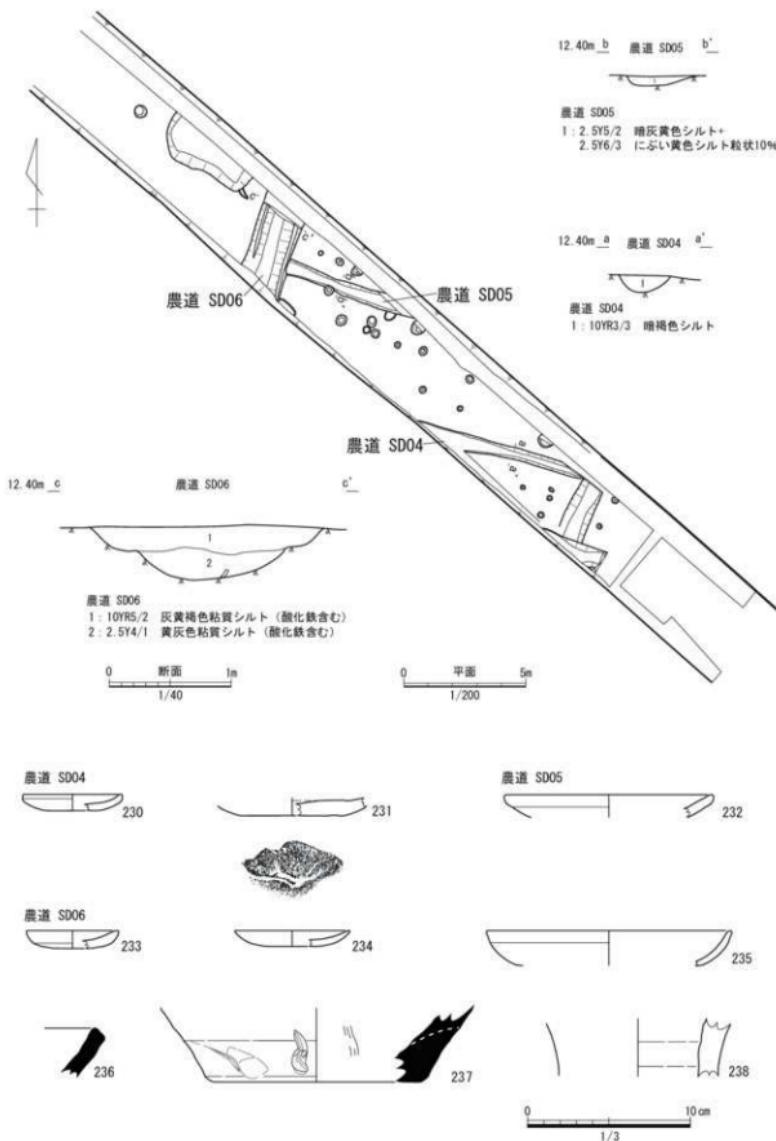
更多題庫請到

第20圖 古板遺跡過去調查出土遺物

第13表 友坂遺跡過去調査遺物一覧表

年度	遺構番号	遺構	種別	器種	法量(cm)			備考
					口径	高さ	进径	
昭和36年調査 第1次調査B地区	61	SB022	床面	便	39.0	-	-	床面IV期
	62	床面	便	41.4	-	-	床面IV期	
	63	SB021	床面	便	43.2	-	-	床面V期
	64	SB025	床面	便	63.6	-	-	床面VI期
	65	床面	便	-	-	-	-	
	66	SB025	様鉢	-	-	6.0	即日8条	
	67	床面	様鉢	34.8	-	-	床面VI期	
	71	鋪地中戸	断続窓	-	7.8	2.1	3.9	14c後
	72	SB021	中世土師器	瓦	7.5	-	-	15c後
	73	SB023	中世土師器	瓦	6.7	1.8	3.8	14c中
	74	SB021	中世土師器	瓦	7.0	2.4	2.4	15c後
	75	中世土師器	瓦	8.7	1.9	2.1	-	
	76	中世土師器	瓦	7.2	1.7	1.2	-	
	77	中世土師器	瓦	9.6	2.1	3.0	-	
	78	中世土師器	瓦	11.7	2.4	5.4	-	
	79	中世土師器	瓦	9.6	2.3	2.8	-	
	80	SB021	中世土師器	瓦	9.9	1.8	3.6	15c後
	81	SB021	中世土師器	瓦	9.3	2.1	1.2	15c後
	82	SB021	中世土師器	瓦	12.8	3.3	1.2	15c前
	83	中世土師器	瓦	13.6	-	-	-	
	84	SB021	中世土師器	瓦	13.5	2.2	7.8	15c後～末
	91	SB022	青磁	碗	14.7	-	-	碗IV類・太宰府G期
	92	青磁	碗	-	-	-	-	
	93	青磁	碗	-	-	3.0	-	
	94	SE41	白磁	碗	-	-	4.5	碗IX-2a類・太宰府F期
	95	青磁	瓶	25.4	-	-	杯頭類・太宰府F期	
昭和37年調査 第2次調査	801	中世土師器	瓦	7.8	2.3	4.5	ロクロ成形、13c中	
	802	中世土師器	瓦	6.9	1.2	5.4	13c中	
	803	古代土師器	瓦	7.5	-	-	-	
	804	SB126	中世土師器	瓦	9.6	16.5	1.2	-
	805	中世土師器	瓦	10.2	-	-	-	
	806	SK152	中世土師器	瓦	8.7	2.3	1.5	-
	807	古代土師器	碗	11.7	-	-	-	
	808	中世土師器	瓦	12.6	2.7	5.7	-	
	809	中世土師器	瓦	12.9	4.4	5.1	ロクロ成形	
	810	中世土師器	瓦	10.8	3.3	2.4	-	
	811	中世土師器	瓦	12.6	2.4	3.6	-	
	812	中世土師器	瓦	13.8	3.0	5.4	-	
	813	SK151	中世土師器	瓦	11.7	4.6	6.3	ロクロ成形、12c後
	814	中世土師器	瓦	11.7	5.0	6.6	ロクロ成形、12c後	
	815	中世土師器	瓦	9.9	2.6	1.5	-	
	816	SE141	中世土師器	瓦	12.6	2.9	3.6	-
	851	SB129	床面	佛	32.2	-	-	床面IV期
	452	床面	様鉢	22.8	-	-	即日7条以上	
	453	SK161	床面	様鉢	-	-	10.8	即日文4条
	454	床面	様鉢	28.2	-	-	即日なし	
	455	床面	火鉢	-	-	10.2	即日なし	
	502	白磁	碗	11.7	-	-	碗IX類・太宰府F期、口縁端部口秀げ	
	503	白磁	碗	-	-	3.9	-	
	504	白磁	碗	-	-	-	-	
	551	白磁	碗	-	-	4.1	-	
	552	白磁	碗	5.6	2.6	6.6	-	
昭和41年調査 第4次調査A地区	553	SE141	石臼	30.0	11.1	-	-	
	554	SE141	石臼	28.2	10.5	-	-	
	555	SE141	五輪塔	火輪	-	18.9	-	-
	556	SE141	石臼	31.5	15.0	-	-	
	557	SE141	五輪塔	火輪	-	15.9	22.2	-
	558	SE141	五輪塔	地輪	-	18.0	20.7	-
	559	SB126	羽口	8.0	-	-	-	
	560	羽口	7.1	-	-	-	-	
	1	床面	便	-	-	-	-	
	2	床面	便	-	-	-	-	
	3	SB01	床面	便	-	-	-	床面I期
	4	SB01	床面	様鉢	-	-	-	床面VI期、即日13条
	5	SB01	床面	様鉢	-	-	-	床面V期、即日8条
	6	床面	便	-	-	-	-	
	7	SB01	床面	便	-	-	-	-
	8	床面	便	-	-	-	-	
	9	床面	便	-	-	-	-	
	10	青磁	碗	-	-	-	-	
	11	SB01	青磁	碗	-	-	5.7	-
	12	SB01	青磁	碗	-	-	6.9	-
	13	SB01	伊万里	碗	-	-	5.7	-
	14	青磁	碗	-	-	4.8	-	
	15	-	-	-	-	-	-	
	16	鋪地中戸	様鉢	-	-	-	-	
	17	古面戸	向付	10.8	-	-	-	
	18	SB01	古面戸	折縁深皿	-	-	12.6	後IV期(新)、内面に鉄物
	19	帆石	碗	6.9	5.6	-	-	
	20	漆器	碗	-	-	6.6	-	

※法量は報告書から算定



第30図 友坂遺跡平成8年度農道調査遺構図・遺物図

模で、古代の溝が中世に再掘削されたものである。友坂遺跡において中世の地割が古代から引き継がれたことを示す一例である。珠洲、越中瀬戸が出土した。土坑SK12は径1.2mの円形で、鉄滓・焼土・炭の廃棄と考えられる。SK12の北側には、切り合いのある竪穴状土坑SK14・15・18があり、底面に砂が敷かれていた。輪羽口・鉄滓・釘・焼土・炭が多量に出土しており、鍛冶に関連した施設の可能性が指摘される。隣接する石組井戸SE01からは、越中瀬戸、石臼、古銭、輪羽口が出土した。A地区は、中世末から近世初頭にかけて鍛冶に関わる作業場として機能したと考えられる。B地区では溝、井戸を検出した。溝SD02は幅2.8m、深さ1.15mの規模で、土師器皿、珠洲、越中瀬戸、土錐、硯、輪羽口、石臼が出土した。14世紀代の溝を近世に掘り直したものと考えられている。

平成25年度（富山市教委2014） 朝日小学校の南側200mの位置で、個人住宅建築に伴う調査が実施された。遺構面は上層が戦国時代、下層が平安時代～中世である。下層の井戸SE10は、推定径5.4m、深さ1.0mの規模があり、土師器皿、珠洲、越前、青磁が出土した。SE24は径1.8m以上、深さ1.2mの規模で、土師器皿、珠洲が出土した。SE10より古く、平安後期から鎌倉時代のものとされる。

平成30年度（富山市教委2019） 朝日小学校の西側400mの位置で、個人住宅建築に伴う調査が実施された。中世の掘立柱建物、井戸、溝状遺構、土坑を検出した。掘立SB67は1×3間以上の規模である。木組井戸SE27からは珠洲、青磁が出土しており、13世紀前半の井戸とされる。SB67も同時期か。SX40は幅1.8m以上の溝状遺構で、出土した珠洲から13世紀中葉～後半とされる。

朝日小学校の北東側で行われた農道工事ほかに伴う第8次調査の詳細は、下記に記載する。（常深）

2 第8次調査（平成8年度）

朝日小学校の周囲に廻る農道の舗装工事が行われることとなり、平成8年7月25日～7月30日に試掘調査を実施した。その結果、約280m²に遺跡の遺存が確認されたため、引き続き7月26日～8月19日に本発掘調査を実施した。この調査は未報告であったが、今回調査と遺構のつながりがあるため、ここでは中世の遺構について報告し、古代の遺構は別の機会に報告することとする。

①遺構

農道SD04（第30図） N-107°-Eの主軸方向に延びる。遺物は土師器皿(230・231)が出土した。出土遺物から農道SD06と繋がると考えられる。

農道SD05（第30図） N-107°-Eの主軸方向に延びる。遺物は土師器皿(232)が出土した。出土遺物から農道SD06と繋がると考えられる。

農道SD06（第30図） 断面観察から新古の2時期があり、古段階は幅125cm前後、検出面からの深さ44cm、新段階は幅1.8～1.9m、深さ22cmである。ともにN-17°-Eの方位に約4.0mの長さで延びる。断面逆台形となる。古段階はSD37中段階、新段階はSD37新段階の延長線上にあると考えられ、農道SD06とSD37をつなぐ同一直線上にあるゲートボール場試掘2T内にも溝を確認できる。遺物は土師器皿(233～235)、珠洲(236・237)、古瀬戸(238)が出土した。235・237は古段階、それ以外は新段階の遺物である。

②遺物

農道SD04（第30図） 230・231は中世土師器の皿である。230はB類、231はロクロ成形のRA類である。

農道SD05（第30図） 232は中世土師器の皿である。C2b類である。

農道SD06（第30図） 233～235は中世土師器の皿である。233・234はC2a類、235はD2類である。236・237は珠洲の擂鉢である。236は珠洲IV₃期、237は珠洲I₃期である。237の内面には弧状の櫛目文が確認できる。238は古瀬戸の瓶子である。

（堀内）

第2節 中世前期の土師器皿の諸様相 ~富山県内の城館遺跡出土遺物を中心に~

友坂遺跡において、今回の調査で、SK85 → SK86 → SK21と変遷したことが分かる竪穴建物、かわらけ廐棄土坑 SK107、土坑 SK61、区画構 SD37などの遺構から12世紀末～14世紀初頭を中心とした時期の遺物が比較的まとまった量出土した。また、昭和56・57年度調査、平成4年度調査で14～15世紀の方形館に伴う遺構・遺物が確認されている（婦中町教委1984・1993）。

ここでは、富山県内の城館遺跡出土遺物で友坂遺跡の足りない部分を補いつつ、陶磁器類を含めた中世前期の土師器皿の様相を検討したい。なお、富山県内の中世前期の中世土師器皿の編年は、宮田・越前・森などによって行われている（宮田1992・1997、越前1996、森2003・2005・2006）。

1 土師器皿の分類

(1) 非クロ口（手涅ね）成形

A類 口縁部に二段のヨコナデを施す。

B類 丸底気味の底部から一段ナデで口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁端部に面取りを行う。

C1類 丸底気味の底部から一段ナデで短い口縁部が強く屈曲するため、底部と体部の境が明瞭になる。口縁端部は丸く納める。

C2類 丸底または丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境が明瞭でない。底部と体部の境から幅広の一段ナデを施し、口縁端部は鋭く仕上げるものをC2a類、口縁端部に幅狭の一段ナデを施し、口縁端部は鋭く仕上げるものをC2b類、器壁は厚めで口縁端部は肥厚気味に丸く納めるものをC2c類とする。

D1類 丸底気味の底部から体部が逆S字状に浅く開いて立ち上がる。二段ナデA類が在地化した。

D2類 D1類に比べ深い丸底から体部が内湾し、口縁部がそこから逆S字状に立ち上がる、ないしは直線的に外傾する。口縁端部は丸く納める。

E1類 平底から口縁部が垂直に立ち上がる。

E2類 平底から口縁部を短くつまみあげ、口縁端部を鋭く仕上げる。

E3類 深い平底から体部が屈曲し、口縁部は外傾する。口縁部に幅広の一段ナデを施す。

F類 深めの底部から体部が内湾し、そのまま口縁部が直線的に外傾しないしは内湾する。丸底を呈するものをF1類、扁平な小さな平底があるものをF2類とする。

G類 丸底から体部が内湾し、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸く納めるか小さくつまむ。

H類 内型つくり的な成形法を用いて作られ、体部外面下半にはユビオサエの指頭圧痕が顕著に残る。口縁端部にヨコナデを施す。やや器壁が厚く丸底のH1類、器壁が薄く平底のH2類がある。

(2) ロクロ成形

RA類 古代土師器椀の系譜を引く大型皿ないしは椀である。屈曲した体部から直線的ないしは内湾しながら立ち上がる。

RB類 RA類に比べ器高が低いもの。屈曲した体部から体部が内湾しながら立ち上がる。

RC類 柱状高台を有するもの。高台の高いものをRC1類、低いものをRC2類とする。

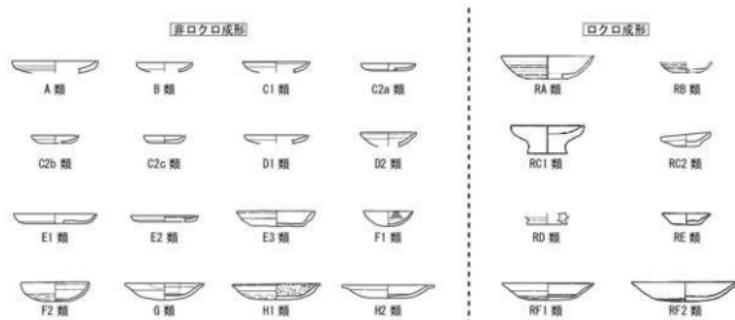
RD類 内黒の黒色土器椀をRD類とする。

RE類 屈曲した体部から口縁部が外反する。

RF類 底部外面をヘラケズリする。口縁部が内湾し、口縁端部を丸く納めるか小さくつまむものをRF1類とし、口縁部が外反するものをRF2類とする。RF1類はG類、RF2類はH類の器形を模倣したものと考えられる。

第14表 土師器皿の分類比較表

	堺内 2020	井口城 1990	越前 1996	森 2003・2005	森 2006
非口クロ(手捏ね成形)	A 類		NA I 類・NA II 類	A1 類	
	B 類	B4 類	NDI 類	A2 類	
	C1 類		ND II 類	B3 類	
	C2a 類	B1 類	ND II 類	B1 類	
	C2b 類	B5 類		B2 類	
	C2c 類			Z7 類	
	D1 類		NB I 類	Z3 類	
	D2 類		NC II 類	A3 類	
	E1 類	B2 類	NG 類	B4 類	
	E2 類	B7 類	NH 類	Z1 類	
	E3 類	B6 類	NF 類	Z4 類	
	F1 類		NC III 類	B2 類	
	F2 類	B3 類	NC I 類	Z6 類	
	G 類	B8 類	NJ 類	C5 類	
	H1 類	B9 類	NE 類	Z9 類	
	H2 類			Z8 類	
口クロ成形	RA 類		RB 類		A1 類
	RB 類	A1 類	RD 類・RE 類		S7 類
	RC1 類		RA I 類		C2 類
	RC2 類		RA II 類 (RB 類)		C1 類
	RD 類				B4 類
	RE 類	A2 類	RG 類		S8 類
	RF1 類	A3 類	RF 類		S10 類
	RF2 類	A4 類	RF 類		S10 類



第31図 土師器皿の分類図

2 基準資料

今回調査から基準資料とした遺構は、堅穴建物 SK21・SK85・SK86(SK05を含む)、溝 SD37、土坑 SK16・SK43・SK44・SK61・SK101・SK107、ピット SP23・SP84である。個別の詳細についてはここでは割愛する。また、友坂遺跡の過去調査の遺物については、第5章第1節を参照する。

(1) 黒崎種田遺跡(富山市)

① SE48 木組井戸である。中世土師器皿は、C1類、D2類、E3類、F1類、ロクロ RA類がある。珠洲II期、青磁碗II類、古瀬戸、八尾が伴う。

② SD54 屋敷を囲む堀である。中世土師器皿は、C2a類、C2b類、F1類、F2類がある。珠洲IV期、青磁碗III類、古瀬戸、八尾が伴う。13世紀中頃の中世土師器皿、珠洲II期が混入する。

③ SE02 石組井戸である。中世土師器皿は、B類、C2a類、F1類、F2類がある。珠洲IV期が伴う。

④ SE61 石組井戸である。中世土師器皿は、C2a類、C2b類、G類、H1類がある。

⑤ SD50・199 屋敷を囲む堀である。中世土師器皿は、C2a類、C2b類、F1類がある。珠洲V期、上田編年第四期の青磁碗、越前が伴う。

⑥ SK35・SX49 馬小屋と推測された堅穴状土坑である。中世土師器皿は、C2a類、C2b類、G類、H1類がある。珠洲V期、上田編年第四期青磁碗、越前が伴う。

(2) 新庄城跡(富山市)

⑦ 1-SD05 土壘1-SA01を伴う堀である。中世土師器皿は、C2a類、C2b類、F1類、G類、H1類、H2類がある。

⑧ 1-SD04 土壘1-SA01を壊して作った溝である。中世土師器皿は、C2a類、C2b類、F1類、G類、H1類、H2類、ロクロ RF2類がある。珠洲V～VI期、古瀬戸後IV期、上田編年第四～五期青磁碗が伴う。

(3) 北反戻遺跡(小矢部市)

⑨ SB90・SK90・SK91 SD92に囲われた掘立柱建物 SB90と建物に付随した土坑である。中世土師器皿は、A類、C1類、ロクロ RA類、RB類がある。珠洲I期、白磁碗が伴う。

(4) 弓庄城跡(上市町)

⑩ F地点 SD511 屋敷を囲む堀である。中世土師器皿は、B類、C1類、D1類、E1類がある。珠洲II期が伴う。

(5) 梅原胡麻堂遺跡(南砺市・旧福光町)

⑪ SK1283 堅穴状土坑である。中世土師器皿は、B類、C1類、D1類、E1類、E3類がある。珠洲II期、青磁が伴う。

⑫ SK1306 廃棄土坑である。中世土師器皿は、B類、C1類、E1類、E3類がある。珠洲IV期が伴う。

(6) 田尻遺跡(南砺市・旧福光町)

⑬ 第2次 SD87・SK141 屋敷を囲む堀、堀と連結する土坑である。中世土師器皿は、C2a類、C2c類、D2類、E1類、E3類がある。珠洲IV期が伴う。SD86下層溝 SD26の遺物である12世紀中頃の中世土師器皿、珠洲I期、白磁が混入する。

(7) 井口城跡(南砺市・旧井口村)

⑭ SK23 土坑である。中世土師器皿は、B類、C2a類、E1類、E3類がある。珠洲III期が伴う。

⑮ SD5 曲輪の堀である。中世土師器皿は、C2b類、E1類、H2類、ロクロ RE類、RF1類、RF2類がある。珠洲V～VI期が伴う。旧堀の遺物である14世紀前半の中世土師器皿、八尾が混入する。

⑯ SD7 曲輪の堀である。中世土師器皿は、E1類、H1類、H2類、ロクロ RE類、RF1類、RF2類がある。旧堀の遺物である13世紀後半の中世土師器皿、珠洲III期、青磁碗III類が混入する。

⑰ SK15 かわらけ廃棄土坑である。中世土師器皿は、ロクロ RE類、RF2類がある。

(8) 菅田薬師中世墓（氷見市）

⑩中世墓 出土地点がわかる中世土師器皿のみ抜粋。E1類、F1類、G類がある。

3 編年概要

ここからは、第32図・第33図に示した土師器皿の編年案について記述する。なお、大画期は宮田編年の画期に基づくものとする。友坂遺跡では宮田II期（12世紀後半～13世紀前半）から土師器皿が確認できることから、宮田I期（11世紀中頃～12世紀初め）は今回除外するとする。

宮田II期（12世紀後半～13世紀前半、小画期3期）

珠洲I～II期、大宰府D～E期の白磁、同安窯青磁、龍泉窯青磁が伴う。

12世紀中頃から後半は非ロクロA類、C1類、ロクロRA類、RB類、RC1類が存在する。口径は8.0～9.4cm、10.8～15.8cmの大小があるが、バラツキがみられる。12世紀末～13世紀初頭になると、非ロクロには、口縁端部に面取りするB類、二段ナデA類が在地化したと考えられるD1類、一段ナデのC2a類、E1類などが出現する。A類はこの頃には喪失する。ロクロ土師器は徐々に減少し、内黒RD類はこの頃に喪失する。口径は6.0～9.0cm、14.0～17.8cmの大小があるが、バラツキがみられる。13世紀前半には、非ロクロ土師器には前小画期で出現したものに加え、E1類から派生したE2類、口径が大きく器高が2cmを超える大法量のD2類、E3類、F1類、F2類が出現する。大法量のD2類、E3類、F1類、F2類の出現とともにロクロRA類は減少する。口径は6.6～9.0cm、10.8～12.0cmの大小がある。口径の大きいものは前小画期に比べ縮小傾向がみられ、口径が11～12cm付近にまとまりを見せる。小7～9cm台、大11～12cm台という法量の二分化が明瞭になる。

宮田III期（13世紀後半～14世紀前半、小画期2期）

珠洲III～IV期、大宰府F期の口禿げ白磁、龍泉窯青磁が伴う。

概ねII期から継続する器形がほとんどで、在地化したと考えられる。13世紀後半にC2a類のナデ幅を狭くした（一段ナデの簡略化した）C2b類、器壁が厚くなったC2c類が出現した。ロクロ土師器は13世紀後半に姿を消す。B類、C1類、C2c類、E3類、F2類は14世紀前半で姿を消す。口径はII期で明瞭となった法量の二分化が維持され、口径は小6～9cm台、大11～14cm台（主に11～12cm台）が主体をなしている。

宮田IV期（14世紀後半～15世紀前半、小画期2期）

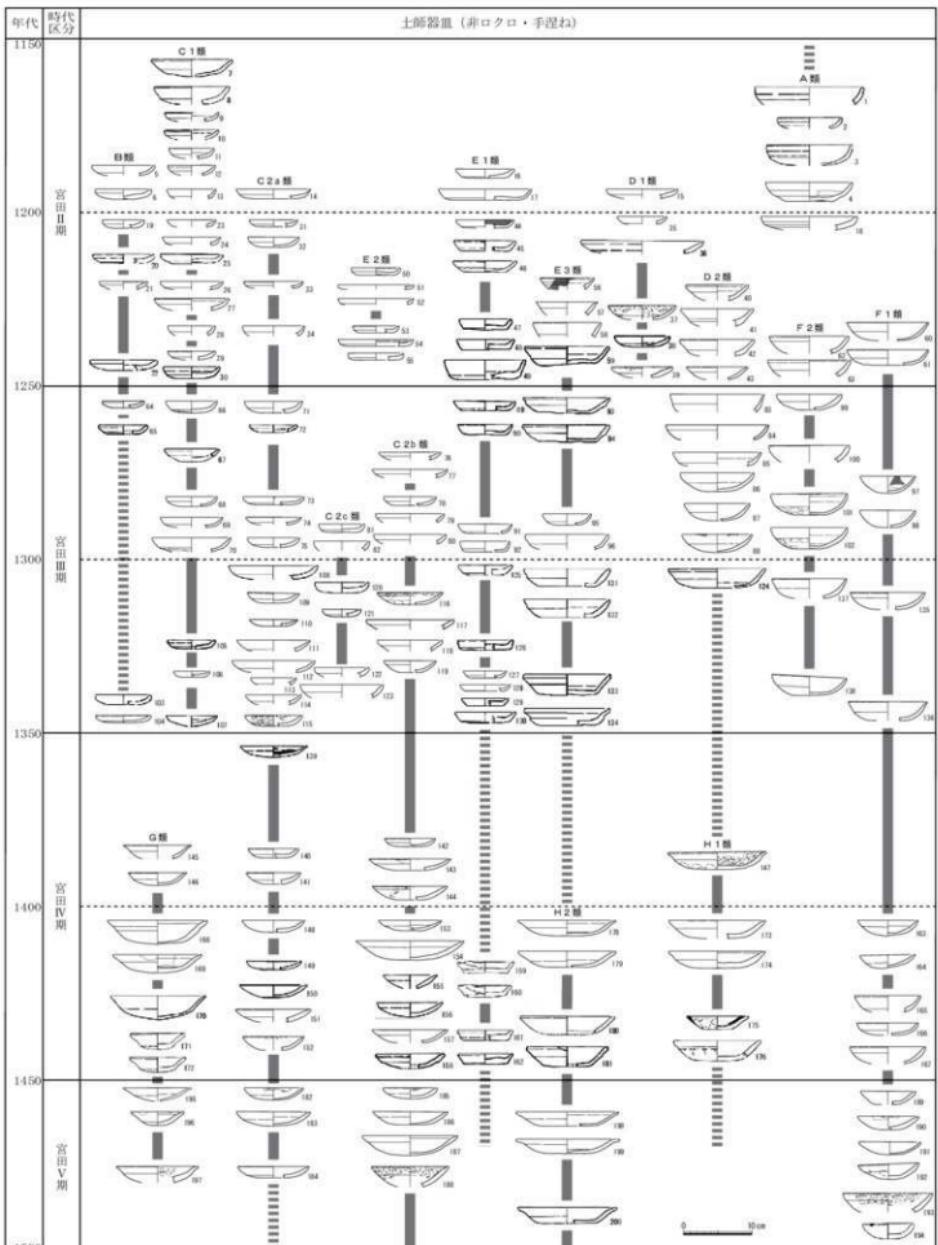
珠洲IV～V期、大宰府G期の龍泉窯青磁、八尾、古瀬戸が伴う。

III期から器形に大きく変化が見られるが、C2a類、C2b類、F1類はIII期から継続する器形である。14世紀後半に北山文化が越中に浸透していたことを物語る金付き土器が黒崎種田遺跡から出土しており、北山文化の浸透とともに京都系土師器皿の影響を受けた内型つくりで成形したH類が出現する。H1類はD2類、H2類はE3類を祖型としたと考えられる。丸底から口縁部が外反するG類も出現する。また、15世紀前半にはロクロ土師器が再び出現する。口径は小7.2～9.9cm、中10.8～11.8cm、大13.8～15.6cmの大中小が確認でき、III期にはあまり見られなかった14～15cmの大皿が増加する傾向にある。

宮田V期（15世紀後半～16世紀初め）

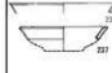
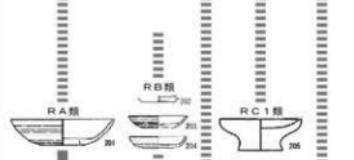
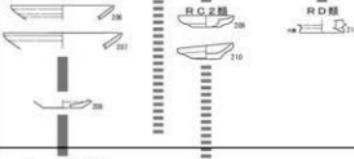
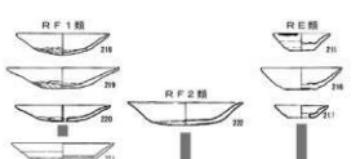
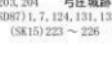
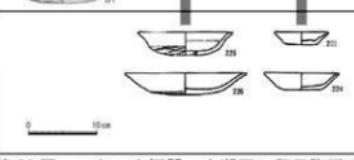
珠洲V～VI期、上田編年第四～五期の青磁、古瀬戸が伴う。

概ねIV期から継続する器形がほとんどである。15世紀後半の土師器について、筆者が近世成立期の土師器皿の編年（堀内2019）のI期に該当し、その中で分類した「在地系A類」はC2a類、C2b類、「在地系B類」はE1類、「京都系土師器C1類」はH2類から派生するものが該当すると考える。口径はIV期同様に小7.6～10.3cm、中10.6～11.8cm、大13.0～15.0cmの大中小が確認できる。（堀内）



第32図 土師器皿の編年案

友坂道跡 : (SK07)6, 13, 15, 17, 71, 83, 99, 111, 112, 118, 119, 202, 241, 242 (SK16)18, 35, 41, 55, 63, 106, 113, 114, 122, 233, 209 (SK21)11, 12, 76, 77, 85, 100, 214 (SK45)238 (SK44)66 (SK61)28, 34, 53, 54, 57, 62 (SK85)19, 23, 24, 31, 32, 44, 206, 207, 211 (SK86+05)21, 26, 27, 33, 40, 50 ~ 52, 56 (SK107)4, 14, 16, 68 ~ 70, 73 ~ 75, 78 ~ 82, 86 ~ 89, 90, 91, 95 ~ 98, 101, 102 (SK101)213 (SP23)5, 240 (SP84)210 (農道SD04)64, 212 (農道SD05)117 (農道SD06)84, 110, 121, 229 (1次SD21)149, 150, 155, 156, 170, 200 (1次SD22)246 (2次SE41)239 (2次SD126)139 (2次SK15)205 (4次SB03)235, 253, 254 黒崎猪田道跡 : (SE02)104, 115, 136, 138 (SE48)29, 37, 42, 58, 60, 61, 208, 243 (SE61)140 ~ 147 (SD50+199)151, 152, 157, 165 ~ 167, 247 ~ 249 (SD54)39, 43, 109, 116, 135, 137, 227, 228, 245

時代区分	年代	青磁	白磁	古瀬戸	ロクロ土師器Ⅲ
大宰府D期	1150				
大宰府E期	1200				
大宰府F期	1250				
大宰府G期	1300				
上田城跡第十四期	1350				
上田城跡第十五期	1400				
上田城跡第十六期	1450				
	1500				

第33図 ロクロ土師器・古瀬戸・貿易陶磁の編年案

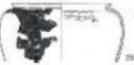
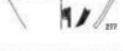
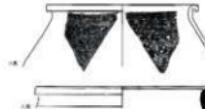
黒崎種田道路 : (SK35・SX49)184, 188, 192, 193, 197 新庄城跡 : (1-SD04)182, 183, 185 ~ 187, 189 ~ 191, 195, 196, 198, 199, 221, 230 ~ 234, 250 ~ 252

北反秋道跡 : (SK90)2, 3, 8 (SK91)9, 10, 201, 203, 204 弓庄城跡F地點 : (SD51)20, 25, 36, 45, 46

梅原胡夢卜遺跡 : (SK128)22, 30, 38, 47 ~ 49, 59 (SK136)103, 107, 129, 130, 133, 134 田尻道路2次 : (SD87)1, 7, 124, 131, 132, 236 (SK141)108, 120, 125

井口城跡 : (SD5)105, 126, 158, 162, 181, 217, 220, 222 (SK97)87, 161, 175, 176, 180, 215, 216, 218, 219, 237, 244 (SK15)223 ~ 226 (SK23)65, 72, 84, 89, 90, 93, 94

萩田葉部中世墓 : 159, 160, 171, 172, 194

年代	時代区分	珠洲・八尾
1160	I ₁ 期	 285
1180	I ₂ 期	 286  287  288  289  290
1200	II ₁ 期	 294  295  296  297  298  299  300
1225	II ₂ 期	 290  291  292  293
1250	III期	 295  296
1280	IV ₁ 期	 297  298  299  300  301
1320	IV ₂ 期	 291  292  293  294
1360	IV ₃ 期	 295  296
1380	V期	 297  298  299  300
1450	VI期	 291  292  293  294
1480	VII期	
1500		

第34図 珠洲・八尾の編年案

友坂遺跡：(SK37)265, 266, 288, 290 (SK61)269, 270 (SK85)264 (SP23)257, 258 (農道 SD06)286 (1次 SD21)292 (1次 SD22)284
 (1次 SD25)262, 263 (2次 SD19)285 (4次 SD01)256, 299 基崎稲田遺跡：(SE02)287 (SE48)271 (SK35)274 (SD05)279, 294, 295
 (SD45)272, 280 ~ 283 新庄城跡：(1-SD04)297, 298 北反欽遺跡：(SK91)259, 260 (SD02)261 丹庄城跡F地盤：(SD01)267, 268
 田尻遺跡2次：(SD87)255, 277, 278 梅原胡摩堂遺跡：(SK1283)273 (SK1306)289 井口城跡：(SD5)291, 293, 296, 300 (SD7)275 (SK23)276

第3節 友坂遺跡中世館跡の変遷

今回の調査区は、中世の方形館を検出した第1次・第4次調査区の北東に隣接する。方形館の堀と軸が揃う遺構も多いが、軸が大きく異なる遺構や方形館より時期の古い遺物もみられる。ここでは、遺構の主軸方位や切り合い、前節で検討された出土遺物によって方形館周辺の遺構を6段階に分類し、方形館成立前を友坂1・2期、方形館存続期を友坂3～5期、方形館廃絶後を友坂6期として、中世館跡の変遷を検討する(第15表、第35図)。あわせて方形館成立前後の地割の変化について、見通しを述べたい。

1 各期の概要

友坂1期(12世紀後半～13世紀前半) 今回の調査区の溝SD37(古)・SD125(古)・SD106の時期である。SD37(古)とSD125(古)は同一の溝と想定されるが、北側は第8-4次調査区まで延びておらず、途切れる可能性が高い。両溝は後述する古代からの地割Aの一町四方の方格線に一致し、集落域を限る区画溝と考えられる。溝の東側では1期から6期を通じて遺構が希薄となることから、区画溝の有無にかかわらず同地が一貫して境界性を帯びていたことが分かる。溝の西側では堅穴建物がSK85→SK86→SK21(2期)と建て替えられる。同規模の堅穴遺構は、第1次調査のSK54・55や第2次調査のSK152のように掘立柱建物に隣接して構築されており、貼床を伴うものもあることから、掘立柱建物に付属する作業場ないし倉庫的な建物であった可能性が考えられる。SK85・86もこれらと同様の堅穴遺構であれば、近接して掘立柱建物が存在することが想定される。また堅穴建物の南西にある柵SA129と、堅穴建物と重複する柵の可能性があるSP84を含むピット列は、堅穴建物と前後してL字の区画を作り出している。1期の遺構の広がりは遺跡全体としては散漫であるが、今回の調査区には区画溝と柵、堅穴建物があり、方形館成立以前に区画性を帯びた小規模な居住域が存在したことを示している。区画の中心は旧ブルール跡地の中に想定される。遺物は土師器皿、珠洲のほか、青磁の出土が目立つ。

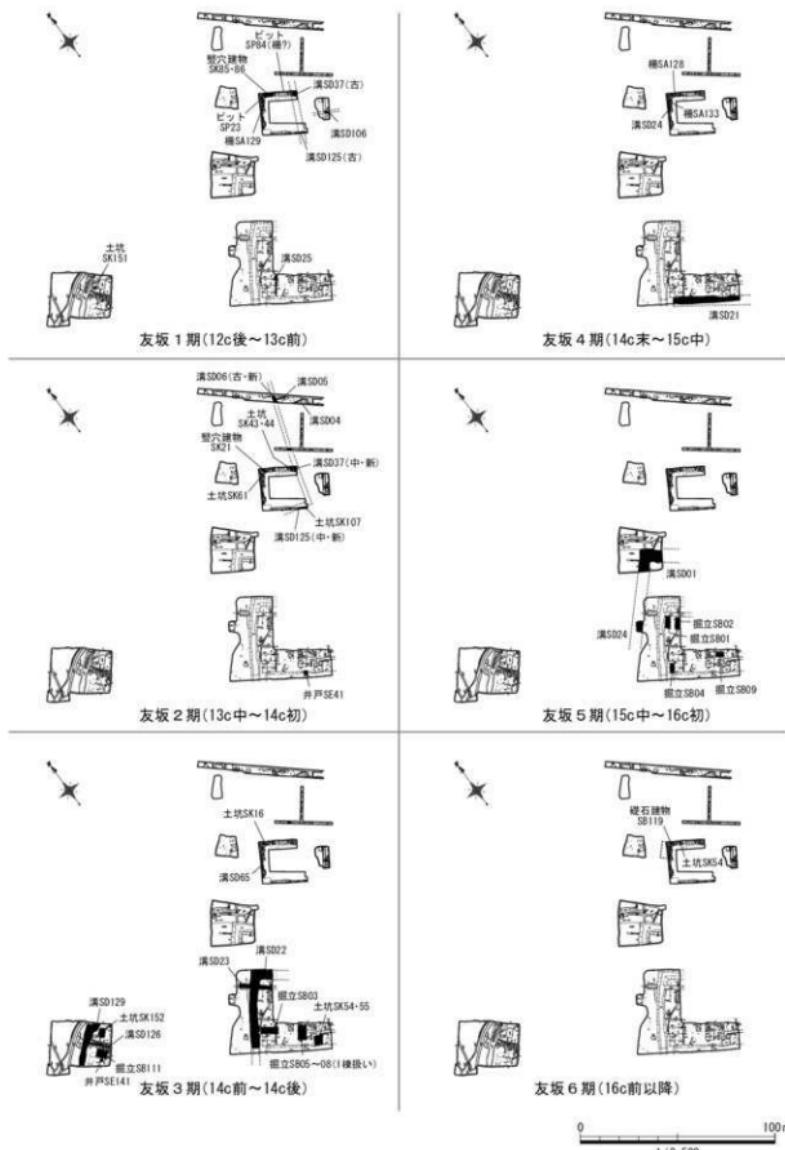
友坂2期(13世紀中頃～14世紀初頭) 今回の調査で最も多く遺構・遺物が検出された時期である。1期SD37・125古段階の埋没後に、規模の縮小と方位の変更を伴って改修されたSD37・125の中・新段階があり、さらに兩段階の間には土師器皿の廃棄土坑SK107も介在し、3時期に細分される。SD37・125(中・新)は、地割A・Bと異なる方位を採用し、調査区南端で折れ曲がると想定される。北側は農道SD06まで続いており、60m以上の長さがある。農道SD06は掘り直しによる古・新段階があり、SD37・125の中・新段階に対応する。SD125の西側は第4次調査A地区までは延びていない。SD37中段階は珪藻・花粉分析により、當時の滯水ではなく、頻繁に乾く環境にあったとされることがから、これらの溝はL字に区画する閉鎖的な溝であったと考えられる。区画内部には、堅穴建物SK21や土坑43・44・61などがある。SK107は土師器皿が大量廃棄された土坑であるが、炭化物の年代測定で13世紀後半の数値が得られたこと、SD125新段階で14世紀代の八尾が出土することから、SD125の中・新段階の間に位置付けられる。区画内側から土師器皿が廃棄されることから、SD125新段階への改修の前に、溝の屈曲点において土師器皿を大量に使用する行為が行われたことが想定される。またSD37に近接するSK43は、掘立柱建物の柱穴としては規模が大きいため、SD37に懸かる橋を想定した場合に橋脚となる可能性がある。SK43は3期までに抜き取り穴(SK44)により消滅する。2期は、今回の調査区に遺構が偏在する傾向や堅穴建物の継続が1期を踏襲するが、1期とは方位や区画の広がりが異なる。一方で、3期に方形館が成立する第1次調査区には井戸が存在するものの、全体として3期に繋がる要素が見受けられない。遺物は土師器皿、珠洲、白磁などがある。

友坂3期（14世紀前半～後半） 3期は第1次調査区に40m超の方形館が成立する時期である。主軸方位は、堀SD22の示すN-37°-Eへと大きく変化し、以後5期まで36°～39°で推移する。これは前代までと異なる新たな地割Bに基づいている。方形館内には2×5間の側柱建物SB03、2×4間の総柱建物(SB05～08を1棟扱い)がL字に配置される。この総柱建物と同尺(14尺)の幅をもつ竪穴状土坑SK54・55は、この時期の竪穴建物と考えられる。同様に第2次調査区においても区画溝と掘立柱建物、井戸、竪穴状土坑の組合せがある。今回の調査区では、堀SD22の延長線上に位置する溝SD65があり、そのSD65が途切れた先には、直交する土坑SK16がある。SK16は溝状の土坑で、SD65とあわせてL字の区画が形成される。3期は、新たな地割に基づいた方形館を中核に、複数の区画が取り巻く複雑な構造がみてとれる。遺物は土師器皿、八尾、珠洲、青磁がある。

友坂4期（14世紀末～15世紀中頃） 4期は第1次調査区の堀SD21の時期である。3期のSD22は土層断面に掘り直しの形跡があり、自然堆積を示していることから、当期まで残存した可能性がある。その場合にはSD21とSD22の間が土橋状の通路となり、南北35mほどの区画が形成されることになる。今回の調査区では、3期に引き続いてSD22の延長線上にある溝SD24と柵SA133、直交する柵SA128により、L字の区画が形成される。4期は、3期の方形館を継承したものであるが、建物が検出されず、居館の活動が低調な印象が見受けられる。遺物は土師器皿、珠洲がある。

第15表 友坂遺跡遺構変遷

年代	時期区分	主要 遺 構						主軸方位	
		令和元年度調査			昭和56・昭和57・平成4年度調査 (※は平成8年度農道調査)				
		礎石建物・ 竪穴建物・柵	溝	土坑・ ピット	掘立柱建物	溝	土坑・ 井戸		
1150									
1200	友坂1期	SK85 SA129 SK86	SD37(古) SD125(古) SD106	SP23 SP84(SA?) SK61		SD25	SK151	N-26°～ 28°-E	
			SD37(中) SD125(中)			※SD06(古) ※SD04	SE41	N-17°-E	
1250	友坂2期	SK21	SK43+44 SK107	SD37(新) SD125(新)	SD22+23 SB111	※SD05 ※SD06(新)		N-17°-E	
								N-36°-E	
1300	友坂3期		SD65	SK16	SB03+05～ 08 SB111	SD22+23 SD126+129	SE141 SK152	N-49°-E	
1350								N-35°-E	
1400	友坂4期	SA128+133	SD24		SB01+02+ 04+09	SD21		N-38°～ 39°-E	
1450								N-43°-E	
1500	友坂5期				SD24(H4+SD01)				
	友坂6期	SB119		SK54					



第35図 友坂遺跡中世遺構変遷図

友坂5期(15世紀中頃～16世紀初頭) 堀SD21・22が埋没し、新たに堀SD24(第1次調査)・SD01(第4次調査)が出現する。60m超の方形館となり、内部には1×2間の掘立柱建物が分散して配置される。今回の調査区や第2次調査区では遺構が検出されていない。5期は、方形館の大型化に伴って、方形区画内に居住を集約化した時期といえる。遺物は土師器皿、珠洲、古瀬戸、青磁などがあるが、今回の調査区ではほとんど出土していない。

友坂6期(16世紀前半以降) 方形館の堀が全て埋没し、居館としての機能が失われた時期である。ただし、今回の調査区では礎石建物SB119が検出されており、同所が1・3・4期におけるL字型区画の角に位置する場所であったことから、SB119が何らかの象徴性を帯びた建物であった可能性も考えられる。この時期、友坂遺跡内には第7次調査A地区で区画溝、鍛冶工房、井戸が、平成25年度調査区では溝、土坑が検出されており、集落は中世末から近世まで継続する。

2 中世の地割

現在の県道68号線は、延喜式内社に比定される熊野神社及びその別当寺である友坂寺(現在の永源寺)に至る参道であったと推測されている(第1図)。友坂遺跡や友坂天神遺跡において7世紀後半から遺物が出土し始め、8世紀末頃の井田川の氾濫を被りながらも、10世紀まで集落が維持されることは、古代の信仰地としての性格に起因したものであろう。この参道を境に、南北で字名が異なり、地割にも違いがある。一町(109m)四方の方格線をあてはめると、参道南側では26°東、北側では37°東へ傾いている(第1図地割A・B)。旧河道などの地形的影響もあろうが、参道が旧鳥居推定地の東側で折れ曲がることに関連したものと考えられる。参道北側では、この屈折地点を基準にすると、ちょうど二町先に第1次調査のSD22とSD23の交点がある(第2図)。SD22に沿う方格線はさらに今回調査のSD06・24・65・93が並走する地点に重なっており、これは地割に基づき、同一地点に繰り返し区画溝を設けたものと判断される。このように参道北側では、友坂3期に地割Bの施行と方形館の成立があり、大きな画期として捉えられる。現在の県道59号線もこの地割に沿っており、その東側に想定される近世飛驒街道の脇道も地割Bの影響を残したものといえよう。友坂3期の段階においても、飛驒街道の前身にあたる道路は十分に想定され、それに直交するように参道が折り曲げられた可能性がある。

これに対し、地割Aは旧鳥居推定地西側で直線的に延びる参道と、それに直交する現集落内の南北道が基準となる。古代以来の伝統的な地割と考えられ、中世の館跡周辺の集落もこの地割を踏襲した可能性が高い。第7次調査のSD02は、古代の溝を中世に復旧したものであるが、地割Aの方格線に一致することから、一町四方の地割が古代まで遡ることを示す証左となる。

3 おわりに

友坂遺跡のある下条地区は古代以来の信仰地であったが、交通の要衝にあるが故に、軍事的・政治的重要性の高まった中世において居館としての機能が付加された。方形館成立以前の1・2期においては、方形館の原型となりうる区画性をもった居住域が既に出現しており、今回の調査区がその中心部に位置することが特筆される。下条の地は文明16(1484)年の文献には、室町幕府奉公衆の小田氏の所領と記されることから、5期の居館跡については小田氏に関わるものと判断される。一方で方形館が成立する14世紀前半は鎌倉幕府滅亡の動乱期にあたり、県内では下村加茂遺跡の調査で、その動乱に起因した館跡の廃絶が想定されている。本遺跡の方形館の成立にあたっては、従来の地割を踏襲せず、新たな地割を採用していることから、鎌倉幕府滅亡の動乱を契機として新たな政治勢力が進出したとも捉えられる。それが小田氏とどう結びつけられるかは今後に残された課題である。(常深)

引用・参考文献

- 栗島義明 2012 「コハクの利用と縄文社会」『考古学ジャーナル』No.627 ニューサイエンス社
- 井口村教育委員会 1990 『井口城跡発掘調査概要』
- 越前慎子 1996 「梅原胡摩堂遺跡出土中世土器器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 大野 究 2011 「蔽田薬師中世墓再考」『平成22年度 氷見市立博物館年報』第29号 氷見市立博物館
- 小矢部市教育委員会 1990 『北反歎遺跡』
- 佐伯哲也 2017 「12 白鳥城」『戦国の北陸動乱と城郭』 戎光洋出版
- 下村教育委員会 1999 「下村加茂遺跡発掘調査報告」
- 高瀬重雄監修 1994 『日本歴史地名体系16 富山県の地名』 平凡社
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2002 『清水島II遺跡、中名II遺跡、持田I遺跡発掘調査報告』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003 『中名I・V遺跡発掘調査報告』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2004 『道場I・II遺跡発掘調査報告』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2005 『中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡発掘調査報告』
- (公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2015 『平岡遺跡発掘調査報告』
- (公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2016 『野下・新聞遺跡発掘調査報告』
- 富山県埋蔵文化財センター 1992 『古沢バイパス関連遺跡発掘調査報告書一中老田C遺跡・塚越A遺跡一』
- 富山県埋蔵文化財センター 2006 『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
- 富山市教育委員会 1970 『金草第1号窯址発掘中間報告書』
- 富山市教育委員会 1973a 『吳羽丘陵城山南部の自然科学および文化史跡調査報告書』
- 富山市教育委員会 1973b 『上堤池遺跡』
- 富山市教育委員会 1974 『境野新遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1975a 『富山市古沢遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1975b 『杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1976 『古沢・金星地内古墳概要調査報告書』
- 富山市教育委員会 1983 『古沢A遺跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1984 『吳羽丘山丘陵古墳分布調査報告書』
- 富山市教育委員会 1985 『野下遺跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1988 『昭和62年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1999a 『柳谷南遺跡』
- 富山市教育委員会 1999b 『金屋南遺跡（1）』
- 富山市教育委員会 2000a 『向野池遺跡』
- 富山市教育委員会 2000b 『西金屋窓跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2001a 『開ヶ丘中山IV遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2001b 『向野池遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002a 『開ヶ丘中山III遺跡 開ヶ丘中山IV遺跡 開ヶ丘中山V遺跡 開ヶ丘孤谷遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002b 『境野新南II遺跡 池多東遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002c 『向野池遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002d 『御坊山遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002e 『柳谷南遺跡発掘調査報告書III』
- 富山市教育委員会 2002f 『開ヶ丘中山I遺跡 開ヶ丘中山IV遺跡 開ヶ丘中遺跡 開ヶ丘孤谷遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003a 『北押川C遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003b 『開ヶ丘中山III遺跡 開ヶ丘孤谷III遺跡 開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003c 『開ヶ丘中遺跡 開ヶ丘孤谷III遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003d 『開ヶ丘孤谷III遺跡 開ヶ丘中山I遺跡 開ヶ丘中山IV遺跡 開ヶ丘孤谷IV遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2004a 『開ヶ丘孤谷III遺跡発掘調査報告書』

- 富山市教育委員会 2004b『開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘孤谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2006『向野池遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2007a『開ヶ丘中遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2007b『金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- 富山市教育委員会 2008a『北押川B遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008b『富崎遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008c『北押川C遺跡・御坊山遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2009『北押川B遺跡・北押川C遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2012a『富山市内遺跡発掘調査概要VI－西金屋・西金屋窓跡・米田大党遺跡－』
- 富山市教育委員会 2012b『富山市内遺跡発掘調査概要VII』
- 富山市教育委員会 2012c『二本榎遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2014a『富山市内遺跡発掘調査概要XI－北代村巻V遺跡・友坂遺跡・吉作遺跡－』
- 富山市教育委員会 2014b『西金屋遺跡』『富山市の遺跡物語 No.15』
- 富山市教育委員会 2014c『新庄城跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2015『二本榎遺跡確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2017『富山市内遺跡発掘調査概要XVII－境野新南III遺跡－』
- 富山市教育委員会 2019『富山市内遺跡発掘調査概要21－友坂遺跡－』
- 富山市教育委員会 2020『黒崎種田遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 2000『富山市西金屋窓跡発掘調査概要』
- 富山市郷土博物館 2010『特別展「秀吉越中出陣－「佐々攻め」と富山城』
- 西井龍儀・小林高範 2005『與羽山古道の調査』『大境』第25号 富山考古学会
- 婦中町教育委員会 1984『友坂遺跡発掘調査報告書』
- 婦中町教育委員会 1986『新町II遺跡の調査』
- 婦中町教育委員会 1993『友坂遺跡発掘調査報告II』
- 婦中町教育委員会 1996『堀I遺跡発掘調査報告』
- 婦中町教育委員会 1997『友坂遺跡発掘調査報告III』
- 婦中町教育委員会 2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
- 婦中町教育委員会 2003『鍛治町遺跡発掘調査報告書』
- 婦中町教育委員会 2004『砂子田I遺跡発掘調査報告』
- 婦中町教育委員会 2005『砂子田I遺跡発掘調査報告II』
- 堀内大介 2019『越中における近世成立期の土師器皿の諸様相－富山城跡出土資料から－』『北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相－城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に－』（公財）石川県埋蔵文化財センター
- 堀沢祐一 2008『富山市花ノ木C遺跡の祭祀具について』『富山市考古資料館報 No.45』富山市考古資料館
- 宮田進一 1992『越中における中世土師器の編年』『中世前期の土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 宮田進一 1997『越中における土師器の編年』『中・近世の北陸－考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会
- 森隆 2003『富山県の中世土器（資料編）－県東部・富山平野を中心とした地域における－』『富山考古学研究』第6号（財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 森隆 2005『富山県の中世土器（資料編2）－道場I遺跡出土資料の検討と中名遺跡群出土資料の総括－』『富山考古学研究』第6号（財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 森隆 2006『富山県における古代末・中世の回転台土師器（資料編）』『富山考古学研究』第9号（財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 山本信夫 2000『4. 陶磁器分類』『大宰府条坊跡 XV』太宰府市教育委員会
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



調査区全景（空撮、南東から）



礎石建物 SB119 全景（南東から）

圖版〇二
遺物(1)



中世土師器 (SK107)



青磁・白磁

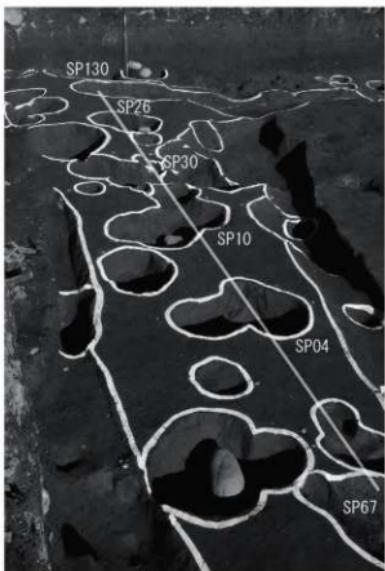


調査地区全景（空撮、南から）



調査地区全景（空撮、右下が北）

図版〇四
遺構(3)



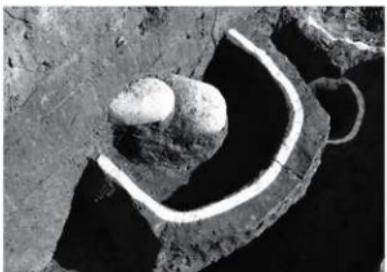
図版〇五
遺構(4)



SB119-SP07 磚石検出状況（南東から）



SB119-SP26 磚石検出状況（北西から）



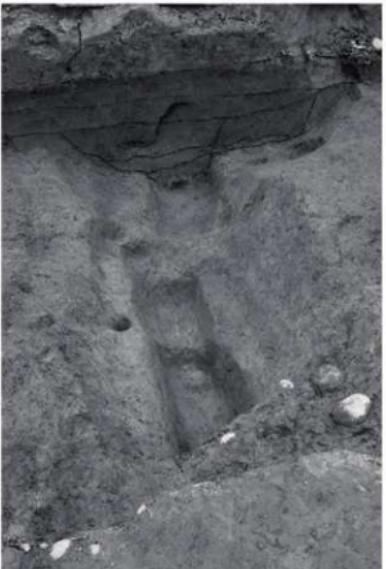
SB119-SP20 磚石検出状況（北西から）



SK05 人骨検出状況（南東から）



SK16・61 全景（南東から）



SD106 全景（北西から）

図版〇六
遺構(5)



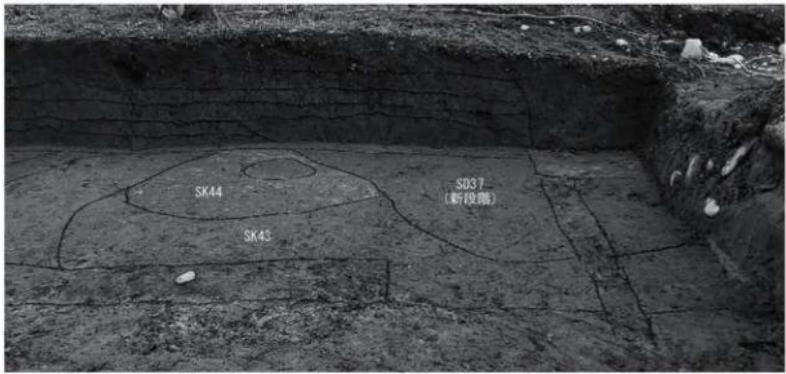
SK21 全景（西から）



SK86 全景（南から）



SD37 全景（南西から）



SD37, SK43・44 検出状況（南西から）



SK43・44 全景（南東から）



SD36 全景（西から）

図版〇八
遺構
(7)



SK107 全景（北から）

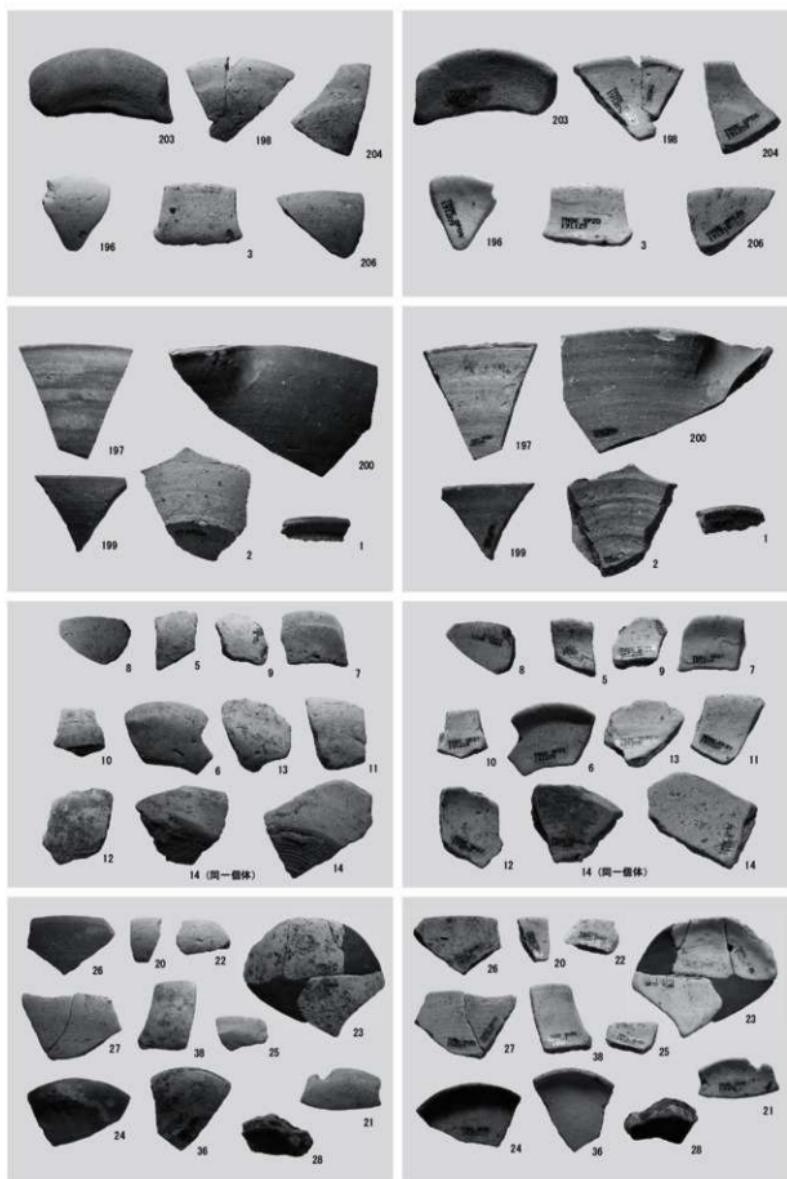


SD125 全景（南東から）



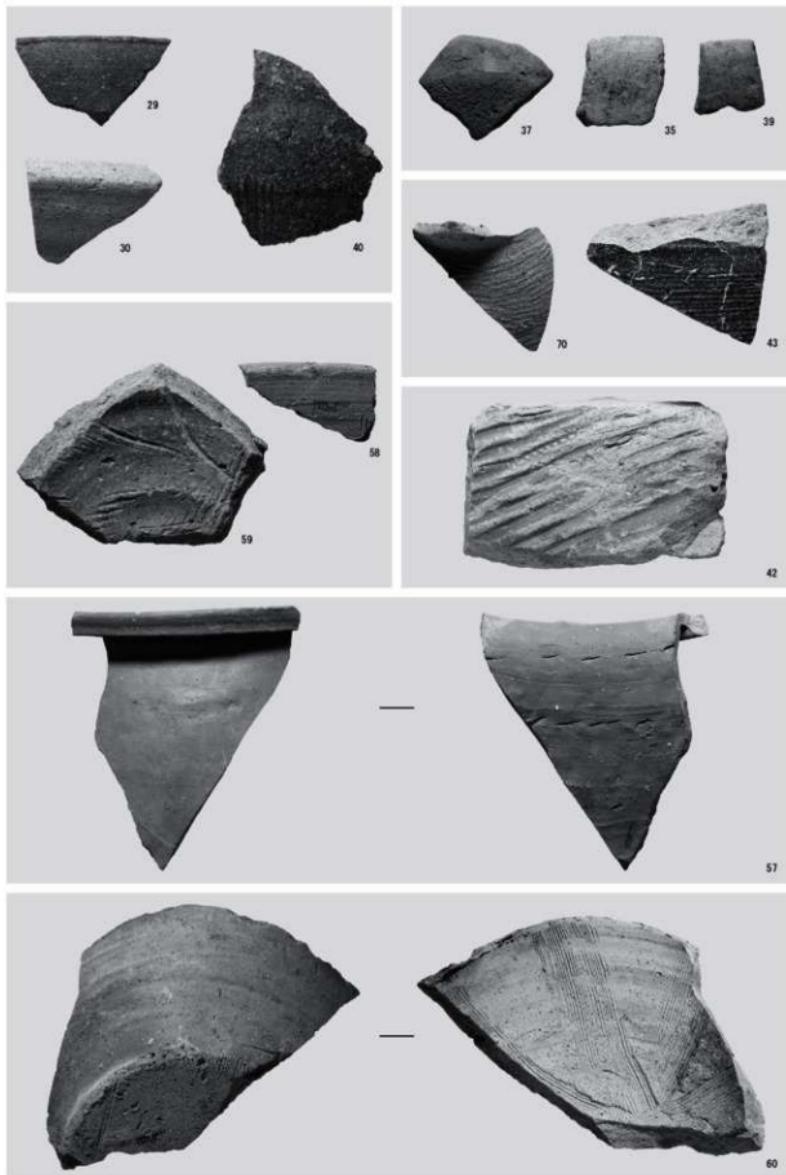
SD125 全景（北西から）

図版〇九
遺物(2)



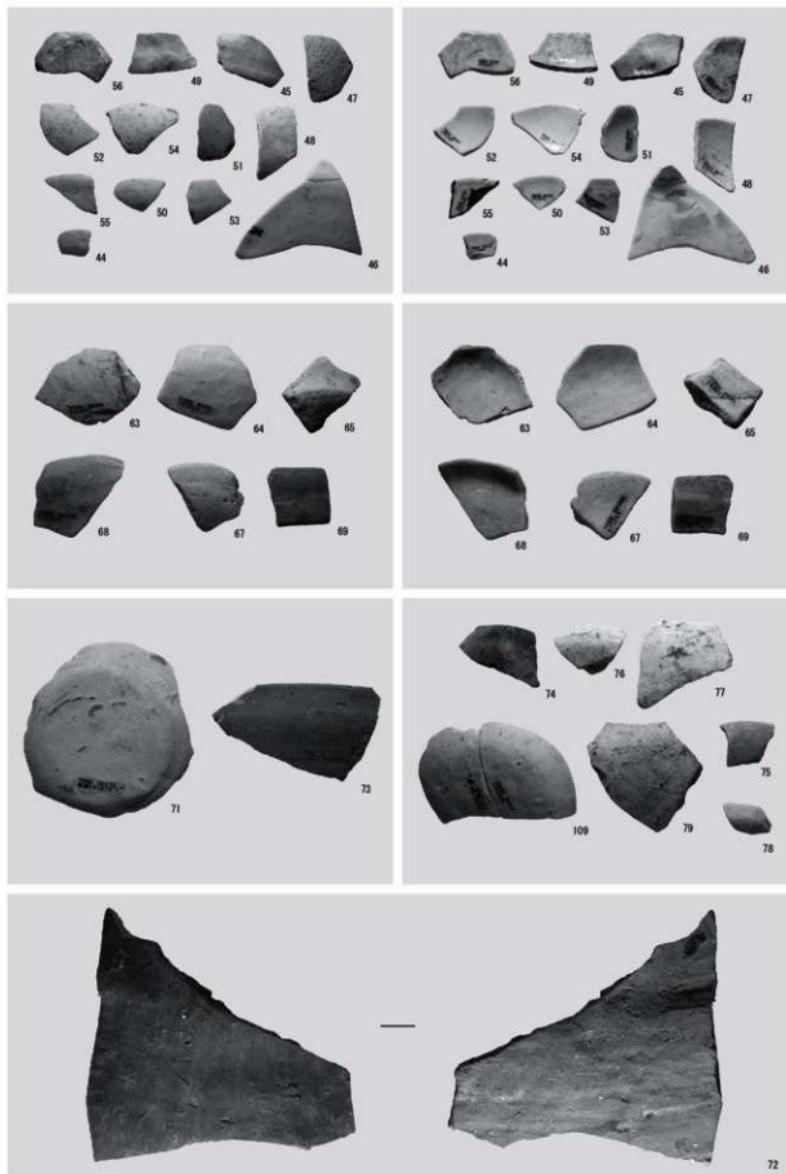
SA128, SB119, SK21・85・86, SP08・22・23・34・120・124 出土遺物

圖版一〇
遺物(3)



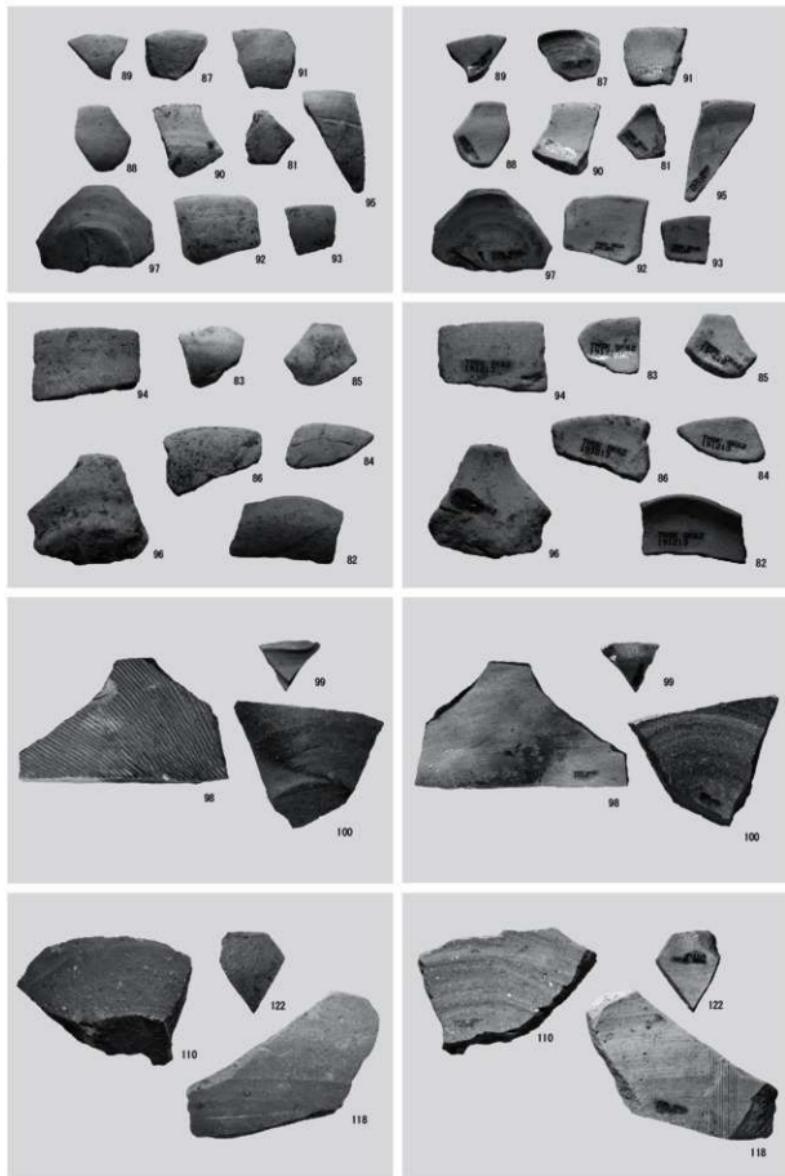
SD06・36・37・106, SK85・86 出土遺物

図版
一一
遺物(4)



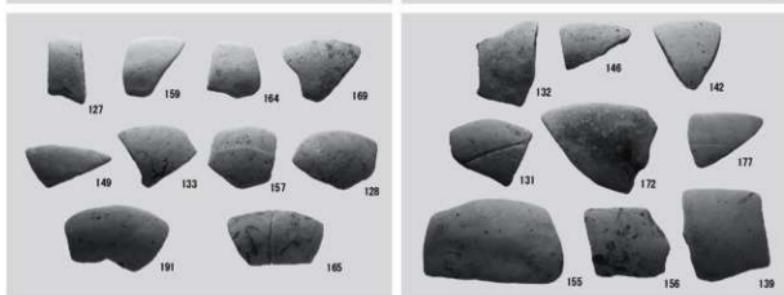
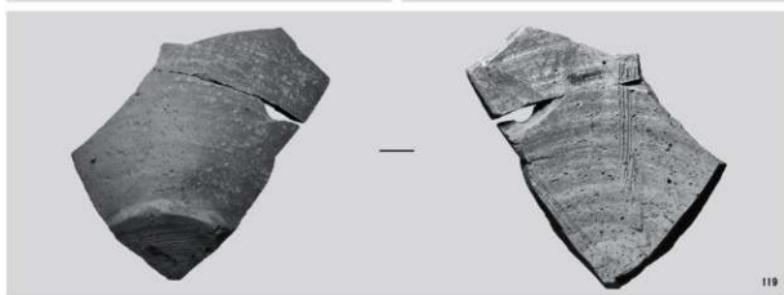
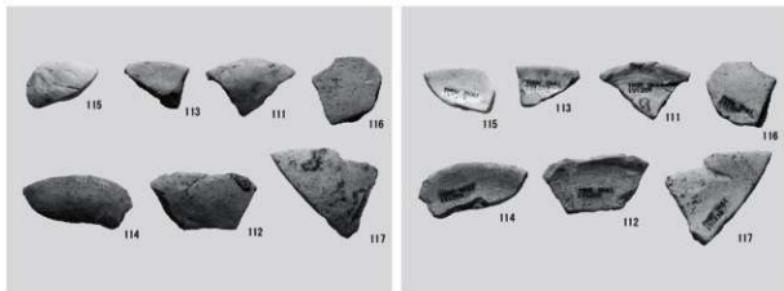
SD37・93・106・125, SK05 出土遺物

圖版
一二
遺物
(5)



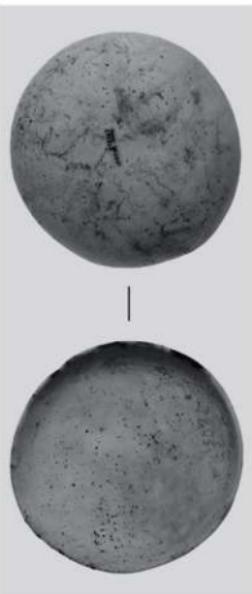
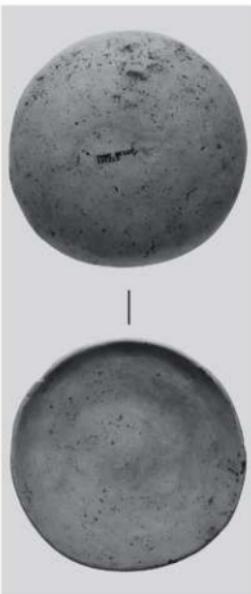
SK16・54・61・101出土遺物

図版一三 遺物(6)



SK61・101・107出土遺物

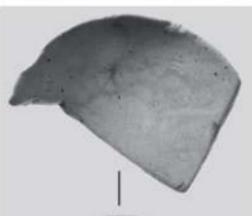
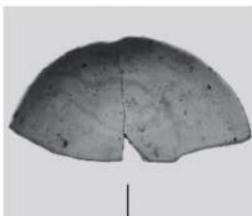
圖版一四
遺物
(7)



205

185

184



|

|

|

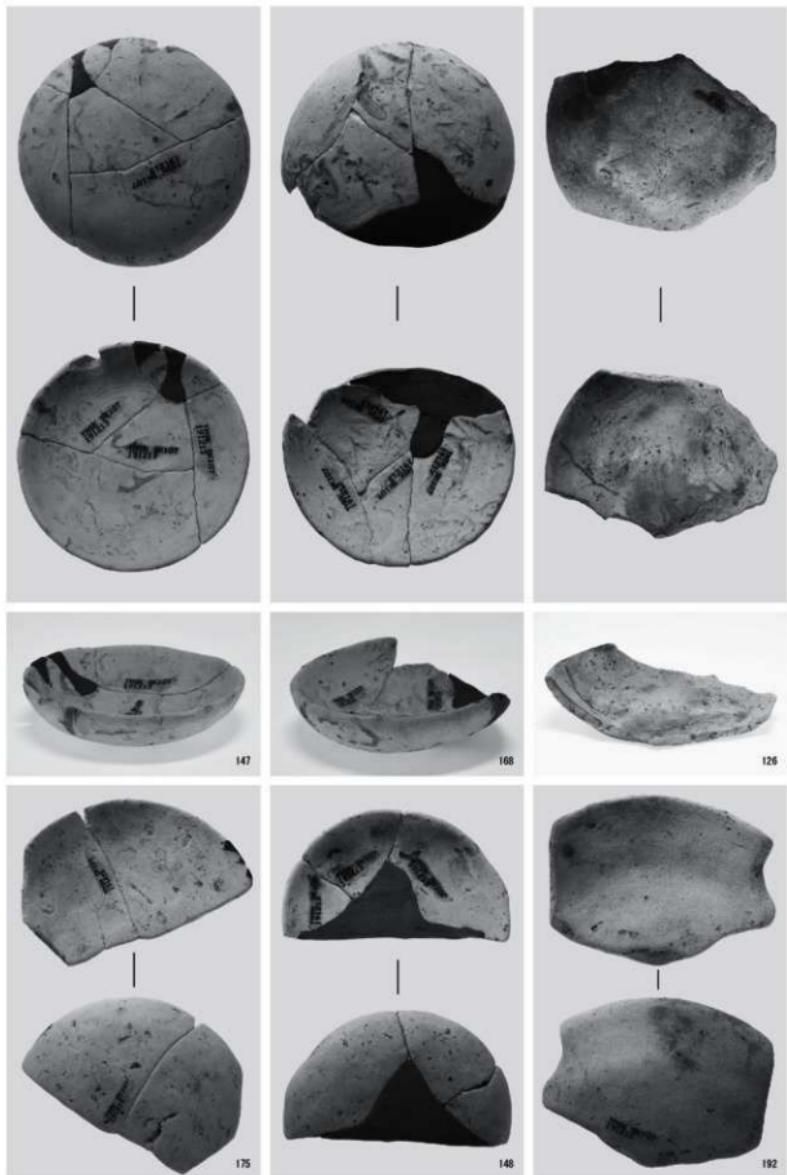
178

183

180

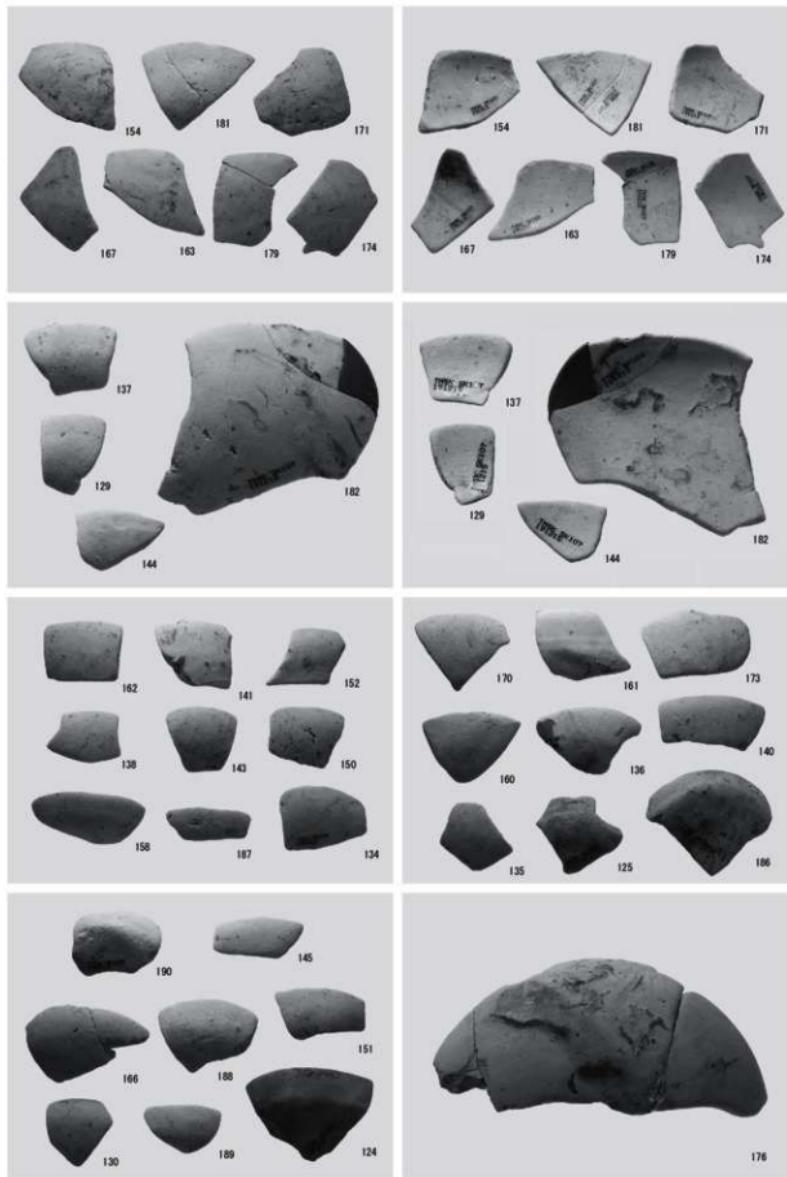
SK107, SP84 出土遺物

圖版一五
遺物(8)



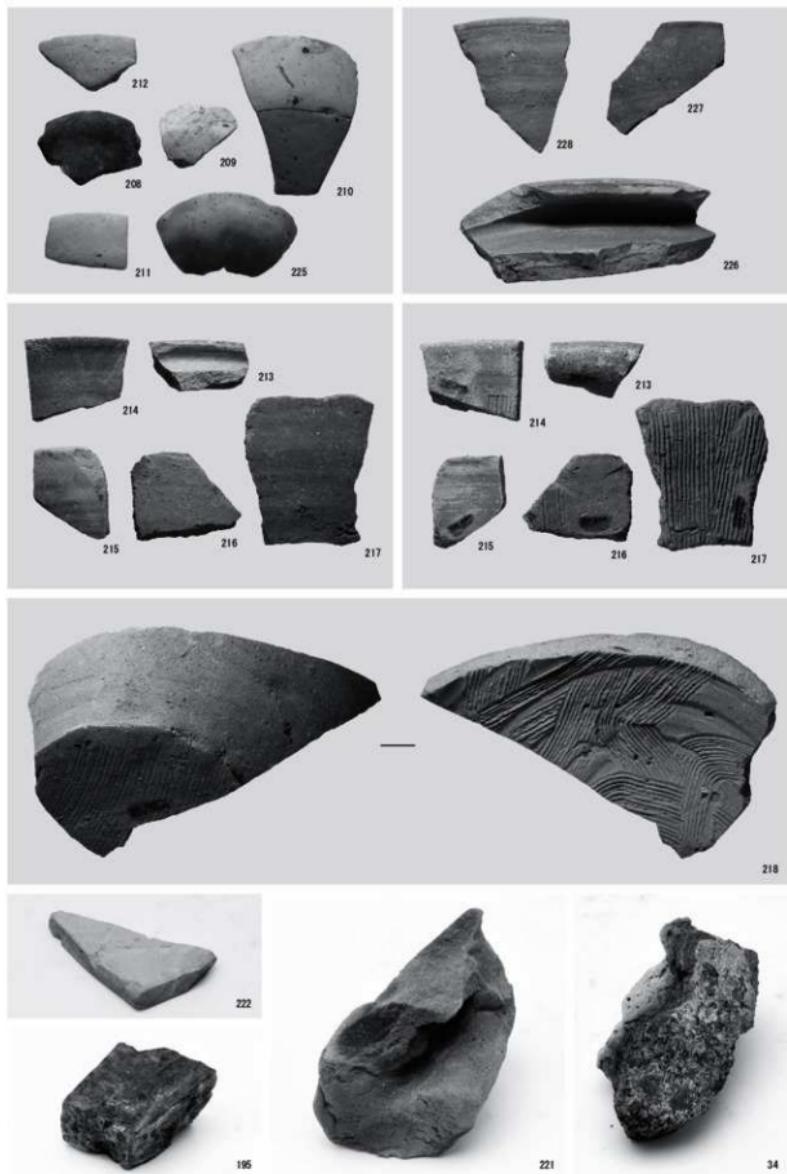
SK107 出土遺物

圖版一六 遺物(9)



SK107 出土遺物

図版一七 遺物(10)



包含層出土遺物、表採遺物、石製品、土製品

圖版一八 遺物(11)



鐵製品、土製品

報告書抄録

富山市埋蔵文化財調査報告 103

富山市友坂遺跡発掘調査報告書

—朝日小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2020（令和2）年12月25日発行

発 行 富山市教育委員会

編 集 有限会社毛野考古学研究所富山支所

印 刷 中村印刷工業株式会社